

男子高校生のきんいろな日常

牧弥潤巳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

きんいろモザイクにオリキャラと仮面ライダーを組み合わせたものです。文脈がおかしい所がありますが、ご閲覧お願いいたします。

800年前：…人間により生み出されたメダルの怪人グリード。彼らが持つそれぞれ9枚のコアメダル。

それを使い戦うのは・・・高校生!?誰かを助けることに迷いが無い少年、桐生楓。

「手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それがイヤだから手を伸ばすんだ。」

そして、彼を取り巻く環境にはそれぞれの想いが芽吹こうとしている。

更に、ごく普通に過ごしていた彼があるきっかけでメダルを使い戦う者、オーズとなる。

楓「変身!!」

そして、これから人の欲望が、思惑が、そして、恋が動き出す。全てのメダルを手に入れるのはグリードか。オーズか。あるいは人の欲望か。そして、その先に待つ結末とは一体・・・

目次

復活の兆し	1
復活のオーズ	11
ダブル誕生	20
グリード登場	35
疑いと価値と救いの手	51
セレブと転校生と鬼ごっこ	65
ヤキモチと契約と昆虫コンボ	79
おつかいと悩みと慣れ始め	93
番外編 フェイの1日とキャラ変更事項	111
男子会と女子会と新たなベルト	115
スカウトと条件と記憶喪失	119
手助けと少女と恋模様	124
鋼鉄と猛獣と宇宙戦士	129
電撃と自覚と仲直り	143
事情と説明と誕生日	152
ラブレターと勉強会と夏休み	162

復活の兆し

??? 「?ここどこだ?」

俺はどこかわからない場所に立っていた。ただただ歩き、周りを見回すと、

??? 「なんだよこれ!」

俺は街が銀色のメダルになってどこかに吸い込まれていったのを見た。俺は急いでいつもの場所に向かうと、

??? 「陽子!綾!こっちだ!」

俺の友達の女の子を助けようと手を伸ばしたら、その二人までもがメダルになってしまった。

??? 「あ・・・ああ・・・」

俺は辺りを見回した。そしたら街のほとんどが消え去っていた。俺は人の気配がして振り向くと友達の女の子がいた。

??? 「・・・しの!こっち!」

俺は女の子に手を伸ばした。するとその女の子は俺に微笑んで・・・メダルになって消えていった。

??? 「ああああああああああ!!」

??? 「・・・ハッ!はあはあはあ・・・」

息を切らしながら俺、桐生楓は夢から目を覚ました。

楓 「なんだ。夢か。・・・ん?なんだこれ。メダル?」

手に何か違和感を持った俺は手を見たら、赤いメダルを握っていた。

楓 「夢で見たのと似てるな。何に使うんだ?」

俺がこれの使い方を考えていると、

??? 「楓!早く降りなさい!遅刻するわよ!」

楓 「あ、はい!」

俺は制服に着替え、リビングに向かった

楓「おはよう。母さん。」

紫音「おはよう楓。」

母の桐生紫音は時に厳しく時に優しいというのにふさわしい人だ。母さんはモデルのような体型なのに、柔道の有段者なのだ。

悠木「おはよう。母さん。楓。」

楓「おはよう兄さん。」

紫音「おはよう悠木。」

兄の桐生悠木は成人していて、今は昔からの夢だった警察官になっている。

紫音「悠木。今日も遅いの?」

悠木「うん。あ、今日は会議があるから、もう行くよ。昼は適当に済ますから。じゃあ行つてきます!」

紫音「行つてらっしやい。」

楓「大変だねえ。警察官は。」

紫音「あんたもそろそろ時期が来るんだから、ちゃんと進路決めときなさい。」

楓「分かつてるよ。今日午前中だから弁当いらさないよ。じゃあ行つてきます。」

紫音「いつも忙しいわね。色々。」

楓「まあね。」

そうして俺は自宅を出て、隣の家に向かいインターホンを鳴らした。

ピンポン

???「あら、楓君。おはよう。」

楓「おはようございます勇さん。しの起きてますか?」

勇「起きてるけど、玄関にいるわ。ドア開けていいわよ。」

楓「はい。ありがとうございます。」

俺はドアを開けると、何かを読んでいる小学校からの幼馴染がいた。

楓「しの、なにしてんの?」

忍「あ、楓君。おはようございます。」

楓「ああ。おはよう。じゃなくて、なにしてんの。」

忍「いえ、お手紙を読んでいます。」

楓「なんで今読むんだよ！遅刻するぞ！」

忍「でも読みたいんですよ。」

楓「あーもう！学校着いてから読みなさい！行くぞ！」

俺はしの手を引いてあいつらのいる駅前に向かった。

???「それでさー。」

楓「おはよう。」

忍「おはようございます。陽子ちゃん、綾ちゃん。」

陽子「しの、楓遅い！」

楓「悪い！しの連れてくのに時間食った。」

綾「時間食ったって、今まではそんな事なかったわよね？」

忍「実はお手紙を読んでいたんですよ。」

陽子「あ！エメール！」

楓「そういや、しのってイギリスにホームステイしたことあったっけ？」

忍「はい。アリスからです。」

陽子「おおすげえ！不思議の国か！」

綾「イギリスね。」

楓「読んでたまでにはいいけど、読めたのか？」

忍「いえ、一文も。」

陽子「読めてないのか。見せて。」

陽子「おお、英語だ！ディアシノブ。」

忍「私は大宮忍ですよ。」

楓「おい、高校生でそれはないだろ。」

しのの発言に通りすぎた女性が笑っていた。

すると綾が顔を真っ赤にしながら

綾「ちよつと後にして！」

と言ったので、俺達は学校へ向かった。

学校に行く途中、陽子がいきなり

陽子「あれ、楓。胸ポケットにあるそれなんだ？」

楓「え？ああ。これ？」

俺は今朝のメダルを見せた。

綾「何？それ？」

楓「知らん。なんかあった。」

忍「何に使うんですかね？」

楓「まあ一応持つとくよ。」

俺達は学校に着き、下駄箱にいた。

忍「楓君英語得意でしたよね？」

楓「まあある程度は。・・・わーったよ。ちよつと見せな。」

俺はしのから手紙を受け取った。

楓「えつと、日本に来るって書いてあるな。」

忍「本当ですか？」

楓「ああ。それから・・・」

さくら「大宮さーん。ちよつといいかしらー？」

俺達のクラスの担任の烏丸先生がしのを呼んでいた。

忍「あ、はーい。今行きます。先に行つて下さい。」

陽子「じゃあ行こうか。」

綾「そうね。」

???「あの一。その方？」

陽子「おー！金髪少女！」

楓「初めて見た。」

???「シノブという女の子を知りませんか？」

楓「え？しの？」

???「最近の写真がなくて申し訳ないのですが、この人形にそっくりな子です。」

と言いながらこけしを見せてきた。

陽子「失礼だなおい。」

???「あ、そろそろ行かないと、失礼しました。」

陽子「なんだったんだ？」

綾「さあ。」

???「あ、楓達だ。」

??? 「ほんとだ。おはよう。」

楓「昴、海翔。」

陽子「おっはよう！」

綾「おはよう。」

昴「あれ？大宮さんは？」

楓「しのならさつき烏丸先生によばれてていないぞ。」

海翔「じゃあ教室行こう。」

綾「ええ。」

こうして俺達は教室へと向かった。

忍「あ、昴君と海翔君。おはようございます。」

昴「おはよう、大宮さん。」

海翔「うつつ。」

俺達は全員同じクラスだ。だが俺としのが前の席で、綾達が後ろの席なので離れている。

楓「そういや、さつき金髪少女に会ったぞ。」

忍「え!?!本当ですか!?!詳しく教えて下さい！」

しのが目をキラキラさせながら言ってきた。しのは外国と金髪が好きだからである。

楓「背はそこまで高くなかったな。金髪をツインテみたいにしてて、かんざしつけてたな。あと、しのに用があったっぽいぞ。」

忍「え? そうなんですか？」

楓「ああ。」

さくら「皆さん。おはようございます。」

俺達の担任の烏丸さくら先生。英語の教師で、ほんわかした人だ。なぜかいつもジャージを着ている。

忍「先生！おはようございます！」

さくら「大宮さん。今日も元気ね。」

忍「はい！」

さくら「いらっしやい。」

先生がそう言うときつき会った金髪少女が入ってきた。

陽子「あ！」

綾「さっきの。」

忍「アリス？」

楓「え？あの子が？」

しのがアリスと言ったその子はこちらを向くと、あからさまに明るくなって、しのに抱きついた。

アリス「シノブ！シノブ！」

忍「お久しぶりです。本当に来たんですね。」

アリス「うん！シノブに会いに来たよ。」

忍「アリス。日本語。」

アリス「勉強したよ。」

忍「すごいです！でもどうしてここに？」

さくら「カータレットさん。まず自己紹介からね。」

アリス「あ、ごめんなさい。」

そう言う少女は自己紹介を始めた。

アリス「はじめまして。アリスカータレットと申します。イギリスから編入してきました。」

忍「・・・えー!？」

綾「気づくの遅!！」

アリス「手紙に書いたよ？」

忍「英語だったの。」

アリス「そう思って二枚目はローマ字で書いたよ？」

楓「ああ。何か違和感あるなって思ったら、ローマ字だったのか。」

アリス「皆さん。よろしくお願いします。」

放課後、俺達はまだ教室にいた。

陽子「いやーまさか高校入学して間もない時にイギリスの子が編入してくるとはねー。」

昴「人形みたいだな。」

綾「かわいいわね。」

忍「わかります。ドレスを着せて小ケースに入れて一日中眺めたいですよね。」

忍以外「・・・」

俺達はしこの発言に絶句してしまった。

もうアリスは顔が青ざめている。

忍「え？ ジョークなので笑って下さい。」

楓「本気かと思った。」

忍「へ？」

アリスはゆっくりだが、俺達の名前と誰がそうなのかを確認していた。

アリス「コミチアヤ。」

綾「よろしく。」

アリス「イノクマヨウコ。」

陽子「猪に熊で猪熊。なんか強そうでかつこいいだろ？」

アリス「あ、ああ・・・ワタシタベテモオイシクナイノデ。」

陽子「片言!？」

アリス「ヤガミスバル。」

昴「どうも。」

アリス「セトカイト。」

海翔「うつつ。」

アリス「キリユウカエデ。」

楓「よろしくな。」

陽子「そうだ。アリス、そのかんざしかわいいな。」

アリス「あ、これはホームステイの時にシノブがくれたものなの。」

忍「あーあの時の物を今も大事に。けど私かんざしって刺すものだと思います。人を。」

昴「怖いよ。」

綾「仕事人？」

楓「そういや、日本にいる間はどこに住むんだ？」

海翔「一人で来たんだろ？」

アリス「うん！ えっと、シノブの家に。」

忍「アリス！」

アリス「？」

忍「かわいそうに。たった一人、住むところもなく・・・」

楓「あれ？」

忍「私の家にきていいんですよ！何もない家ですが！」

アリス「え!?えーっとそのつもりであああの！」

昴「面白いコンビだね。」

陽子「そうだな。」

綾「あはは。」

昴と陽子が面白がる中、綾は苦笑いをしていた。

海翔「じゃあ。」

陽子「またなー！」

綾「またね。」

アリス「バイバーイ！」

別れ道が来たので、俺達は昴達と別れた。

アリス「カエデはどこに住んでるの？」

楓「ん?しのん家の隣。」

忍「楓君とはお隣さんなんですよ。」

アリス「へえー。そうなんだ。」

楓「じゃあな。」

忍「また明日。」

アリス「バイバーイ！」

く忍sideく

アリス「アリスと言います。お世話になります。」

忍「お母さん。アリスが来るのを知ってて内緒にしてたんですよ？」

プチドツキリです。」

忍母「驚かそうと思って黙ってたの。ごめんなさい。それにしても

日本語上手ね。」

忍「正座も上手です。」

アリス「日本のこといっぱい勉強したよ。それと、一度だけ着物を着たことあるよ。正座も苦しいけど、着物も重くて暑くて辛かった。十二単の重さは凡そ10キロにもなるという。これに耐えたら大和撫子になれると信じて・・・」

アリスが正座の状態で震えています。足がしびれてしまったよう

です。

忍「苦しいなら我慢しないでいいんですよ!?!?どうぞ。くつろいで下さい。遠慮は無用ですよ。」

アリス「あの。お土産ですが。」

忍「まあご丁寧に。」

アリス「空港で買ったたら焼きです。」

忍「日本産!?!」

私、てつきりイギリスで買ってきたものかと思ってました。

忍母「あ、そうだ。忍。楓君と遊んで来たら。アリスちゃんと一緒に。」

忍「そうですね。アリスはどうします?」

アリス「私はいいよ。」

忍「じゃあ行きましょうか。」

アリス「うん!」

桜の咲く頃、我が家にイギリス人少女がやって来ました。

〜楓side〜

楓「ただいま。・・・って昼頃だし誰もいないよな。さあて、これからどうするかな。」

ピンポン

楓「?はい。」

俺がドアを開けると、

忍「こんにちは。」

アリス「カエデ!遊ぼう!」

隣に住んでるしのアリスがいた。

楓「えっと、どうした?」

忍「お昼は特にやることはないの、お母さんが楓君と遊んだらと勧められたので。」

アリス「忙しかった?」

楓「いや、別に暇だったけど、なにするんだ?」

忍「シヨツピングモールに行きたいです。生地がそろそろ切れそうなので。」

楓「俺はいいけど、アリスは？」

アリス「私もいいよ！」

忍「じゃあ行きましょう！」

アリス「おぉー！」

楓「行くのはいいが・・・」

忍・アリス「？」

楓「しの、まともな格好をしろよ。」

忍「？私はちゃんと着ていますが？」

楓「いや、そのゴスロリみたいな格好のどこがまともなんだ？」

忍「外国人ですよ！」

楓「ぎっくりだなおい！・・・まあいいや。じゃあ行くぞ。」

こうして俺達はショッピングモールへと向かった。あの事件に巻き込まれ、あの赤いメダルの使い方を知るとは思いもせずに・・・

（??? side）

ショッピングモールの地下に赤い腕が浮遊していた。幸い誰も人がいない為、騒ぎになっていない。

???「はあはあはあ・・・クソッ！なんでこれだけしか復活しないんだ。おまけに俺のコアメダルがたったの一枚。加えてこの二枚とはな・・・」

その腕は楓が持つてるメダルに似ている黄色と緑色のメダルを握っていた。

???「仕方がない・・・こうなったらやるしかないか。」

赤い腕は持つてるメダルが入るくらいの差し込み口が三つある石を握っていた。

???「800年前に俺達を封印した・・・」

オーズを復活させる！」

復活のオーズ

俺、桐生楓は幼馴染のしのこと大宮忍と今日からしのの家にホームステイし始めたアリスカータレットとショッピングモールに来てい
る。何でもしのが生地がそろそろ切れそうと言ったからである。

楓「んー。結局、これ何なんだろうなー。」

そう言いながら、俺は今朝握ってたメダルを放りながら呟いた。

アリス「カエデ。なにそれ？」

忍「今朝楓君が持ってたらしいんですよ。」

楓「(嫌な夢も付いてな・・・)あ。着いたぞ。」

そんなこんなで俺達はショッピングモールに着き、目的の店に着い
た。

アリス「喉乾いたね。」

忍「そうですね。」

楓「じゃあ俺、飲み物買って来るよ。何がいい？」

忍「いえ。悪いですよ。」

楓「気にすんなって。ちよつと行って来る。」

忍「相変わらずですね・・・」

アリス「・・・(もしかして)」

忍side

大宮忍です。私は今日ホームステイに来たアリスとお隣さんの桐
生楓君と一緒にショッピングモールにきたのですが、楓君がまた気を
遣ってくれたのか、飲み物を買って来ると行ってしまったので、アリ
スと生地を見ていました。

忍「アリス。どれがいいですかね。」

アリス「あ！これがいいと思うよ。」

忍「あ！これ、楓君に合いそうです。」

アリス「ねえ。シノブ。」

忍「？どうかしましたか？」

アリス「シノブって、カエデが好きなの？」

アリスにそう質問されたのがきっかけなのか、顔が熱くなってきま

した。

忍「!わ、私は別に、楓君とはお隣さんなだけで・・・／＼／＼」
アリス「(シノブって、こういう事分かりやすいなー)」

楓 side

飲み物を買った俺はしの達のもとへ戻ろうとしていた。
すると、

??? 「おい!」

楓「?」

??? 「こつちだ!」

楓「おわあ!腕だけ!」

俺がみると、赤い腕だけの人?がいた。そいつはいきなり俺の胸ぐら
らを掴んで、

??? 「さっきのなんだ!」

楓「え?」

??? 「さっき投げてた物はなんだ!」

楓「ああ。これ?今朝持ってたんだよ。」

俺は今朝の赤いメダルを見せると、

??? 「コアメダル・・・」

楓「?」

怪物「よこせ。」

楓「うわ!なんだあれ!」

俺が振り向くと、カマキリに似た怪物がいた。

怪物「フツ!」

その怪物はいきなり俺に攻撃してきた。

??? 「グッ!」

攻撃を受けるかと思っただが、赤い腕が俺を庇っていた。

怪物「お前・・・アंकか。」

楓「え?アंकって言うの。お前。」

アंक「今はどうでもいいだろ。これは俺のコアメダルだ。」

楓「おいおい。一方的過ぎるだろ。おい、やめろ!」

俺は怪物に掴みかかる。だが、あっさりと俺の首元を掴み放り投げ

た。

楓「うわあー！」

俺はシヨツピンググモールのテーブルにぶつかる。

楓「ぐっ、いってえ。」

俺が痛みを耐えていると、パトカーの音が聞こえた。

そこから刑事が拳銃で怪物を発砲するが

怪物「フン、ハッ！」

銃弾を真つ二つに切り、怪物はパトカーを攻撃した。

攻撃を受けたパトカーは他の車とぶつかる。すると、パトカーから人が拳銃を持ちながら出てきた。だが、力尽きてしまった。しかも出てきた人が、

楓「兄さん！大丈夫!?!」

俺の兄、桐生悠木だった。

楓「大丈夫ですか!?!しっかり！」

怪物の方を見ると、アंकへの攻撃を続けていた。

楓「これなら・・・」

怪物がアंकにとどめを刺そうとしたとき、

バン！バン！

俺は怪物に向かって発砲した。

楓「なんだか知らないけどもうやめろって！」

怪物「邪魔するな。お前に関係ない。」

楓「あるね。」

怪物「ん？」

楓「あるよ。兄さんとは長い付き合いだし、そいつともさつき知り合った仲だからな。」

アंक「・・・」

怪物「フン。」

怪物は再びとどめを刺そうとする。

楓「やめろ！」

俺は再び怪物に発砲したが・・・

楓「弾切れ!?!クソッ！」

拳銃を投げ捨て、もう一度怪物に掴みかかった。がまた投げ飛ばされた。

忍 side

忍「楓君どこに行っただんでしようか。」

アリス「シノブ！あれ！怪物がいるよ!!」

忍「？あ！楓君！・・・と腕？」

アंक「あいつ・・・ただのバカだ。使える。いや・・・今はこの手しかない。」

怪物が楓君を壁にぶつけて、放り投げました。

楓「ぐわっ！うわぁー！」

と、腕が楓君を掴んでいたのです。

怪物「アंक。人間を助けるとはな。」

忍「楓君君！」

アリス「カエデ！大丈夫!!」

楓「しの！アリス！」

楓 side

怪物に投げ飛ばされて、もう終わりと思ったが、アंक？が助けてくれた。

アंक「お前、名前は？」

楓「え？桐生楓だけど。」

アंक「楓、お前には感心した。助かる方法を教えてやる。」

そう言うアंकは何かの石を取り出した。

怪物「!?それは、封印の!」

アंकが俺の腰に石をつけたらいきなり何かのベルトに変わった。

楓「うお!」

アंक「俺がこの手に握ってきたのはコアメダルだけじゃなくな。楓、助かるには奴を倒すしかない。」

楓「あいつを・・・」

アंक「メダルを三枚、ここにはめろ。緑を左、黄色を真ん中、赤を右にな。そうすれば力が手に入る。」

俺はアंकからメダルを二枚受けとる。すると怪物が

怪物「乗せられるなアंकに。使えば、ただでは済まない。」

楓「え？そうなの？」

と、アंकの方を見た。するとアंकが頬を挟んで、

アंक「おい、多少のリスクがなんだ。ここで全員死ぬよりはマシだろ。早くやれ楓。変身しろ。」

怪物「よせ！」

俺は少し考える。中学の時に父さんから聞いた話を思い出し、少し笑いこう言う。

楓「父さんから色々話は聞いてきたけど、楽して助かる命がないのは、どこも一緒らしいな！」

俺はメダルを高く弾いた。帰って来たメダルを掴み、ベルトに左右に同時に、真ん中にメダルはめる。真ん中にはめたと同時にベルトが傾いた。

アंक「これを使え。オースキャナーだ。これをメダルに通せ。」
そう言いながらアंकが俺の右腰についていた丸い物体を渡す。

楓「あ、ああ。」

俺がその物体を取ると音が出始めた。俺は言われた通りにメダルを通す。通した瞬間、軽快な音が出て来て、俺は不意にこう呟いた。

楓「変身？」

タカトラバツタ タ ト バ♪ タトバタトバ♪

怪物「なんだと!？」

アंक「フツ、思った通りだ。」

忍「楓君!？」

アリス「カエデが変わったよ!？」

後で聞いてみたら上から赤、黄色、緑に変わっていたらしい。

楓「え？何だ今の歌。タカトラバツタってこれが!？」

アंक「歌は気にするな。それはオーズ。どれだけのものかは戦つてみればわかる。」

楓「え？」

俺が前を見ると怪物がこっちに襲いかかってきた。

楓「おわあ！」

俺は間一髪怪物の攻撃を防ぐ。すると、胸の黄色の場所がいきなり光始め、かぎ爪？が現れた。

楓「はっ！」

俺がカマキリに似た怪物をそのかぎ爪で攻撃する。すると、その怪物はメダルを少し撒き散らしながら転がっていく。俺は怪物を

今度は緑の場所が光始めた。

楓「おお。なんか力が体の中に溜まってくる！」

怪物「クツ！」

楓「フツッ！はあー。はあー！」

俺がジャンプすると、一回だけで怪物も元まで飛べたので、連続で蹴りを入れる。

楓「へへッ。これ面白いな。」

怪物「貴様あ！」

怪物が俺に攻撃を仕掛けてきた。俺はそれをまともに受けてしまった。すると、真ん中のトラ？の絵がかかれた場所が黒く点滅し始めた。

楓「いててて。ん？なんだ？」

アंक「楓！真ん中をこいつに変えて、さつきと同じことをやれ！」
アंकは俺に緑のメダルを投げてきた。

楓「え？えつと、これを真ん中に変えて・・・」

俺が言われた通りに真ん中のメダルを変えている途中、

怪物「させるか！」

楓「あー邪魔！」

怪物が邪魔をしようとしてきたので俺は蹴りを加え、少し遠ざける。

楓「さつきと同じことをやる。」

右腰にあるオースキャナーを取り出し、もう一度メダルに通すと、タカカマキリバツタ

音が鳴り終わると、腕がカマキリに似たものになっていた。

楓「わーお。ホントにカマキリだ。」

アंक「よし！」

怪物「貴様！そのメダルを渡せ！」

俺は襲ってきた怪物をさつき変わった腕で切りつけた。

楓「はっ！ふっ！はあ！」

カマキリとバッタの場所が光り始め、

楓「はあー！ー！」

俺はジャンプして、一気に怪物へと近づき、勢いよく切りつけた。

楓「せいやー！！」

すると怪物が爆発したと同時に銀色のメダルが飛び散っていた。

楓「銀色のメダル。これでできてたんだ。さつきの。」

俺はそのメダルを拾いよく見る。

楓「(やっぱり、夢のアレと同じだ)」

夢の事を思い出し、考えていたが一番大事な事を思い出した。

楓「ていうか、これどうやってもどんだ？おーい！アंकってやつー！」

俺がアंक？を探してると、

忍「楓君！」

楓「どうした？しの。」

アंक「良い体を見つけた。」

忍「あれ見て下さい！」

楓「？」

しのの指さした場所をみると、

アंक「これで少しはマシに動ける。」

兄さんが起き上がっていた。起き上がっては……いたのだが、右腕を見た瞬間、何が起こったのかわかってしまった。

楓「お前、兄さんに何した！」

なんとアंकって腕は兄さんに取り憑いて？いたのだ。

アंक「俺には目的があるからな。それを果たすまでこの体を借りるぞ。」

楓「なんだよ。目的って。」

アंक「さあな。あと、傾きを戻せば変身が解ける。」

楓「えつと……こうか。」

傾きを戻すと変身が解けた。

楓「ああ戻った。それより、兄さんは大丈夫なんだよな。」

アंक「どうでもいいだろ。どのみちこいつは死にかけだったんだからな。」

楓「気になるよ。家族なんだし。というかさつきなんだよ。聞きたいことが色々あるんだけど。」

アंक「あーうるさい！話してやるから騒ぐな！」

俺がアंकに次々と問いを掛けていると、

p r r r r

楓「？兄さんの電話？」

兄さんの電話が鳴っていた。発信元をみると、今の状況下で掛けてきてはいけない人からだった。

楓「うっわ・・・これはまずい。」

忍「どうかしましたか？」

楓「勇さんだ。」

大宮勇さん。しのお姉さんで、今は高校三年でモデルをしている。え？そののどこがまずいのかって？いや、そりゃあ・・・

忍「お姉ちゃん？何がまずいんですか？」

楓「いやだって勇さんが今の兄さんの状況を知ったら・・・あの人達付き合ってるし。」

そう。勇さんと兄さんは恋仲、両家公認？というものなのだ。今の兄さんの状況を知れば絶対悲しむだろう。そういう事はしたくない。

忍「どうしましょう。」

楓「黙っておくか？でもあの人結構勘が鋭いからな。誤魔化すにしても大変だし、どうしよう。」

???
side

白衣を着た研究員？みたいな男性がオーズの戦いを見ていた。

??? 「あれがオーズの力・・・頭と胴体と脚を変えられるのか。興味深いね。」

研究員がそれを見ていると、

??? 「旭さん。何堂々とサボってるんですか。」

オーズの戦いを見ていた人に白衣を着た女性が近づいてきた。

旭「おや？ 亜美君。いやね、面白いものをみつけたのだよ。見たまえ。」

旭が亜美にオーズの戦いを見せた。

亜美「これは確かに興味深いですが、私達が今実験中だと言うことを忘れてませんか？」

旭「忘れてはいないさ。それに一つ完成しているだろう？？」

亜美「それはそうですが、まだ使ったことがないでしょう。実験体もないのに。」

旭「それなら心配ないよ。心当たりがある。」

旭はポケットから二つのメモリ？みたいなものを取り出した。

旭「あの二人に使わせよう。」

亜美「あの二人？」

旭「私の友人の子さ。彼ならこれを使いこなせるだろう。」

亜美「因みに、その人の名前は？」

旭「八神昂だよ。」

ダブル誕生

昴side

俺の名前は八神昴。県立もえぎ高等学校に通い始めた。突然で話が変わるが、俺の家には居候と呼べる奴がいる。

??「やつと帰って来たね。昴。」

昴「フエイ、お前本気で高校行く気なのかよ。」

フエイ「僕はここで本を読むのが好きなんだよ。この本は実に興味深い。」

昴「そういう問題じゃないんだがな。とりあえず、母さんに相談するから。行くつもりでいろよ。」

フエイ「ふむ、わかった。」

こいつが居候のフエイ。小さい頃に色々あったらしく、俺が子供の時に母が引き取った。読書が好きで好奇心旺盛な奴だ。中学までは一緒に通ってたんだが高校になってからどこの高校にも入っていない。それは母は知らず、俺が苦労してるのである。

って、誰に説明してんだ俺は。

ピンポーン

昴「？」

俺の家のインターホンが鳴った。誰かが来たみたいだ。

昴「はい。」

旭「やあ、昴君。久しぶりだね。」

昴「お久しぶりです旭さん。」

望月旭さん。彼は研究員で、小さい時から色々世話してもらってた。因みにフエイとも面識がある。

昴「それで、今日は用事ですか？」

旭「まあ、ちよつとね。細かい話は間を挟んで話すでしょう。まずはこれを見たまえ。」

旭さんがアタッシユケースからUSBメモリ？らしき物を6本見せてきた。

昴「あの、旭さん。これは一体？」

旭「これはガイアメモリ。地球に記憶された現象・事象を再現するプログラムが組み込まれている。」

昴「は、はあ。それで、これをどうすればいいんでしょうか?」

旭「次にこれだ。」

そういうと旭さんがメモリの差し込み口が二つある何かを見せてきた。

昴「これは?」

旭「これはダブルドライバー。さっきのガイアメモリを差し込むことで力を発揮する。」

昴「じゃあ、なんで差し込み口が二つも?」

旭「ああ。それは、君達二人で使ってもらいたいんだよ。ダブルドライバーは元々二人で使うものだからね。詳しいことはこのマニュアルブックをみて確認したまえ。」

昴「え?ちよつと。まだ使うなんて言っていないんですけど。」

旭「おおつと、もうこんな時間か。悪いね昴君。じゃあそういうことで頼んだよ。」

昴「ちよつと旭さん!・・・逃げたな。」

フェイ「昴。これは興味深いね。」

昴「何が?」

フェイ「このダブルドライバーはどうやら腰につけるとベルトに変わるようだ。一人がつけければ、自動的にもう一人にも装着されるらしい。」

昴「ふーん。で、問題がこのガイアメモリってやつよ。」

サイクロン

昴「?」

フェイ「昴。これはどうやら中に端末らしきメカが入っている。このボタンを押せば音が鳴るようだ。」

昴「なるほどね。」

俺は黒いメモリを手に取り、ボタンを押すと

ジョーカー

と、音が鳴った。

昴「ふーん。確かにこれは面白い。」

カチツカチツ

またフェイがなにかいじってるな。

昴「今度はなにしてんだお前。」

フェイ「昴。これを見た限りではどうやらこのメモリをこのベルトに差し込み、二つを左右に同時に開けると、二つのメモリの力を持ち、変身？を遂げるようだ。」

昴「変身だあ？」

キヤーー!!

昴「!なんだ!?!」

フェイ「昴。行ってみよう。これの正確な使い方が分かるかもしれない。」

昴「オーケー。」

楓 side

俺は桐生楓。俺は今日赤い腕のアंकって奴に遭遇したり、変な怪物に襲われたり、なんかオーズってやつに変身したり、色々とおかしなことに巻き込まれている。夢なら覚めて欲しい。それだけならまだしも、あの腕が兄さん、桐生悠木に取り憑きやがった。

楓「あいつ・・・好き放題やりやがって。」

忍「か、楓君。アंकさんが・・・あれ見て下さい。」

楓「アंकがどうし・・・」

俺はこの日絶句の意味をその身を持って知った。え？なんでかって？なぜなら、アंकが勝手にアイスクャンディを持った行こうとしてるからだよ！

店員「ちよつと兄ちゃん！なにしてんの！」

楓「おい！お前なにしてんだよ！」

俺はすぐさま店員に謝りに向かい、アंकが持って行った分のアイスクャンディのお金を払った。

楓「えつと、360円でしたよね。どうぞ。」

店員「ちようどね。ちゃんとあの兄ちゃんに言つといてよ。」

楓「すいません。おいアंक！」

俺は店員に謝罪し、アंकの元へ向かう。

アंक「なんだ。」

楓「なんだじゃないよ。いい加減説明しろって！」

アंक「俺達は800年前に封印されたグリードと呼ばれるコアメダルから作られた・・・」

楓「ちよっ！待て待て待て待て！全然わかんねえし。俺が聞いてるのは兄さんのことだよ。」

アंक「安心しろ。俺が時々こうして食わせてやる。」

楓「食わせるって・・・」

普通に食べてるだけなのに、なんか感じの悪い言い方だな。

アंक「何だ？俺も味は感じてるぞ。これが冷たくてうまいのは分かる。それとも、こっちのほうがよかったか？」

するとアंकはアイスクャンディを口に含まず、腕、つまりアंकの本体に突っ込んだ。

楓「ああ！なにしてんの！こいつ！離れろ！」

俺がアंकの部分を掴み、兄さんから離そうとするが、中々離れない、勢い良くアंकから兄さんを引き剥がした。

楓「やった！離れた！」

俺が喜んでいると、

アंक「俺が離れると、こいつは十分もしない内に死ぬぞ。はあ!?死ぬ!？」

楓「ええー!?先に言えよ!このっ!えいっ!くっつけーっ!!」
今俺達は橋にいた。あの後、なんとかアंकを兄さんに戻し、事なきを得た。

忍「楓君、大丈夫ですか？」

俺がどんよりしていると、しのが話しかけてきた。

楓「ああ。それにしても、離れたら持たないって・・・じゃあもう兄さんは・・・ん?」

俺がどうするか考えていると、アंकは俺の口にアイスクャンディを入れた。

アंक「食つてろ。お前に倒れられたら困る。メダルを集める為にもな。」

アंकは俺が変身した赤いメダルと、怪物が落とした銀色のメダルを取り出した。

楓「・・・お前もさっきの奴みたいになメダルでできてんのか？」

アंक「あ？ヤミーか。メダルにも二種類あつてな。このメダルがコアメダル。この銀色のメダルがセルメダルだ。」

メダルを一枚ずつ見せ、アंकは説明を始めた。

アंक「いいか？このアイスキャンデー、この棒がコアで、アイスがセルだ。コアを中心にセルがくっついてるのが俺達、封印されてたグリード、お前が倒したヤミーは棒のないアイスだと思っとけ！」

そういうとアंकは俺の口にアイスを突っ込み、棒だけを引っこ抜いた。俺は残ったアイスを掴み、

楓「分かりやすいのか分かりにくいのか微妙な説明だな。」

そう呟いた。

アंक「！ヤミーか。早速お出ましだな。楓、行くぞ！」

そう言いアंकは走り出す。

楓「ああ。しの！アリス！二人はここにいてくれ！」

忍「あ、楓君！」

アリス「カエデ！」

俺はアंकの後をついて行った。

忍 side

私は今何かわからない感情に襲われています。楓君がオースツツと言うものに変身して戦う。まだそれはいいんです。ただ、楓君だって無傷で帰ってくるのかわからない。さっきだって、怪物の攻撃を受けていましたし。

私はどうしたらいいんでしょう・・・

アリス「シノブ！」

忍「？」

アリス「行こう！」

忍「！はい！」

私達は楓君達を追いかけました。

楓 side

楓「ここなのか？」

アंक「ああ。間違いない。あれを見ろ。」

俺達は銀行へと着いた。すると包帯だらけの怪物がいた。

楓「あいつが・・・」

アंक「ああ。ヤミー、棒のないアイスだ。」

ヤミー・・・絶対止めないと！俺は変身しようとアंकに手を出した。

アंक「あ？なんだ？」

楓「いや、メダルだよ。変身しないと！」

するとアंकは俺の手をのけた。

アंक「まだあいつを倒しても一枚しかメダルを落とさない。」

は？そんな事言ってる場合じゃない。俺はアंकにこう言った。

楓「いや、けどあいつが食ってるのって銀行のお金じゃないか。みんな困るだろ！」

アंक「違う。欲望だ。」

楓「え？」

アंक「コアもセルもメダルの元は、人間の欲望。」

俺はヤミーを見る。

楓「人間の・・・欲望・・・あんなのが」

アंक「待つんだ。あいつが欲望をメダルにして溜め込むまで。」

するとヤミーは包帯を巻いた状態から昆虫のような姿へと変わった。そしてヤミーはビルを登って行く。そのビルはどんどん傾いていく。更にヤミーはどんどん巨大化している。

楓「おい！いい加減止めないと！」

アंक「奴がこのビルを食ってからな。」

楓「食うって、中にいる人達はどうなるんだよ。」

アंक「フン！どうでもいいだろ。」

楓「どうでもいいことあるか！死ぬかもしれないんだぞ！助けない

と！」

忍「楓君！」

アリス「カエデ！」

楓「え!?!しの達なんで？」

忍「楓君が心配だからですよ！」

昴「楓！」

楓「え!?!昴まで。」

昴「楓！なにしてんだよ！早く逃げろ！」

アंक「フン！関係ない奴は引っ込んでろ！」

昴「う、腕が赤い……」

フェイ「これは興味深いね。」

アリス「？誰？」

昴「ああ。こいつはフェイって言って……って説明は後な。つか、
これどうするよ。」

昴がこの状況をどうするか考えていると、アंकが俺に話しかけてきた。

アंक「おい楓。お前確か助かる命はないって言ったよな。」

楓「それがなんだよ？」

アंक「タダで助かる命もないんだよ。黙って俺の言うことを聞け
！」

楓「……」

俺はそんな時、今朝の夢を思い出した。あんな事が起こりかねない
状況で、じつとしてなんかいられない。手を伸ばさないと、あんな思
いはしたくない。俺はビルに走りだした。

アंक「おい！楓！」

忍「楓君！」

昴「なにする気だ！」

所々瓦礫が道を塞いでいて、俺は空いている階段を飛ばして行く。

そして、ヤミーがいる場所に着くと今にもヤミーによって外へと連
れて行かれて、そのまま放り出されてしまいそうな男性がいた。

楓「くっ！」

俺はその男性の手を掴み、ヤミーから離れた。

楓「早く逃げて！」

そう言っただけ逃げやすいような場所へと押しやった。

ヤミーはそれに気づいてるのか上へと移動する。

そのタイミングで床に亀裂が入り——そして、崩壊した。俺は落ちかけるが、残った部分をつかみなんとかあった。

それを落とすかのように建物が揺れ、片手を離してしまう。

マズイ、このままじゃ・・・

ガシッ

アंक「お前は本当にバカだな。」

上を見るとアंकが俺の片腕を掴んでいた。

楓「お前、兄さんから離れたら。」

アंक「人の心配してる場合か。さっさと変身しろ！」

そう言い、アंकは俺にベルトを見せてきた。だが、その前に言わないと！

楓「その前に約束しろ。俺が変身したい時は絶対変身させる。人の命よりメダルを優先するな。でなきゃもう二度と変身しない！」

アंक「チツ・・・」

ヤミーが移動したせいでビルが揺れる。すると掴んでいた場所が崩れ、俺は下に落下していく。

楓「うわぁー！」

忍「楓君！」

昴「楓！」

俺が落ちている時に、アंकは俺にベルトを着けた。

アंक「おら！」

俺にメダルを渡してきた。てことは・・・

楓「約束するのかわ！」

アंक「ああわかった！早くしろ！」

俺はアंकからメダルを三枚受けとる。そして・・・

楓「変身!!」

タトバ♪ タトバタトバ♪

俺は変身したと同時に腕のかぎ爪を倒壊していないビルに引っ掛ける。そして瓦礫にぶつかり、地面に着いた。

楓「つと、危ねえ。」

昴「・・・あれは？」

忍「オーズらしいです。」

俺が安堵していると、大きい箱と小さい箱を持つ黒い服を着た男性が来た。

??? 「ある方からの誕生日プレゼントだ。」

楓「え？誰か誕生日の人いた？」

??? 「これを使え。」

俺が小さい箱を開けると、バイクの免許証があつた。そこには俺の名前がある。

楓「あれ？何でバイクの免許証？確かにバイクの使い方は知ってるけど・・・こっちは？」

俺が大きい箱を開けると、セルメダル五枚と、剣が入っていた。

楓「剣だ。うわあ。かつこいい！」

??? 「メダルを、そこにある自販機に使え。」

その男性は黒い自販機を指差した。

楓「え？大丈夫です。喉乾いてないんで。」

??? 「早くしろ。」

楓「は、はあ。」

俺は自販機へと向かった。

楓「これ？」

俺は言われた通りにメダルを入れる。

楓「えつと、ここか。」

俺が黒いボタンを押すと、自販機が突然バイクに変形した。

楓「バイクじゃん。かつこいい！あ、この為の免許証か。」

何で免許証が渡されたか納得していると、

??? 「これもプレゼントだそうだ。」

男性はバイクだったそれを自動販売機に戻し、セルメダルを入れる。

それから青い缶を選ぶ。そうするとたくさん下から出てくる。その缶の一つが突然タコになり、大量の缶もそれへとかわり、空へ飛んでいく。

楓「わあすげえ！アंक！見て！ほら！タコだタコ！」

昴「あいつ、興奮してる場合か？」

忍「楓君、見たことない物を見るとああなるんですよね。」

昴「あんな楓初めてみた。」

しの達が何か言っているが今はそれよりタコが道を作ってくれたことに俺は興奮状態だった。

楓「うわあ！すげえ!!」

??? 「剣にもメダルを入れておけ。」

楓「剣？これか。」

これにもメダルを？覚えておこう。

楓「誰だか知らないけどありがとうございます。」

俺は男性にお礼を言い、タコが作った道をバイクで進む。ヤミーの元へ着き、ヤミーに攻撃を仕掛けた。するとヤミーは反撃し、バイクと剣が下へと落下した。

楓「あっ!!」

アंक「楓！チツ・・・舐めてんのか。」

そう言うとアंकがカマキリのコアメダルを投げた。

立ち上がり、投げられたメダルを受け取ると

楓「ごめん。ちよつと油断した。」

俺はトラのメダルをカマキリのメダルにかえ、オースキヤナーを通す。

タカカマキリバツタ

カマキリに変わったことを確認して、俺はデカイヤミーの脚一本に斬りかかる。その時に多少のセルメダルがばらまかれ、ヤミーは倒れこんだ。

楓「やっぱりこれいいな。気に入った。」

俺がカマキリのメダルを好評価していると、ヤミーが突然起き上がり、攻撃してきた。ってこれって・・・

楓「うわあー！」

ヤバいまた落ちるー！するとタコが足を使つて助けてくれた。

楓「ふう。助かった〜。」

死ぬかと思つた・・・あれ？近くに剣が

楓「ちよつと、タコ君、そのまま待つててそらっ！」

俺は勢い良く剣を引っこ抜いた。

アंक「おい！」

タト バ♪タトバタトバ♪

タコは俺を引つ張り、ヤミーの元へと飛ばしてくれた。

楓「このっ！」

俺は着いた勢いで剣をヤミーに刺した。

楓「ぬううう！」

するとヤミーが暴れて下へと落ちる。

タコが今度は一ヶ所に集まつてクツション代わりになつてくれた。

楓「よし！これならもう一回バイクで！」

アंक「おい！それ以上セルメダルを使うな！」

楓「いや、そんな事言つたつて！」

昴「・・・そういう事か。」

昴side

なるほどね。楓はああいう風に・・・じゃあ

昴「・・・フェイ。大体はわかつた。やってみる価値はある。」

フェイ「フフツ。」

忍「？昴君？」

俺は旭さんからもらつたダブルドライバーをつける。するとフェイにもベルトがついた。

フェイ「昴。君はこれを使いたまえ。」

そう言いフェイは俺に黒いメモリを渡してきた。

昴「オーケー。」

俺とフェイはメモリのボタンを押す。

サイクロン

ジョーカー

昴・フェイ「変身！」

フェイが右の差し込み口にメモリを差し込む。するとフェイのベルトから俺のベルトにメモリが送られた。

昴「え？うーん。これでいいのか？」

俺は送られたメモリを差し込み、俺が持つてるメモリを差し込むだ。

昴「それでこれを同時に開ける！」

俺がそれを開けると、

サイクロンジョーカー

♪

音楽が鳴ると同時に風が俺の周りに吹き始めた。そして姿が変わってることに気づいた。

楓「え!?!マジ!?!」

忍「昴君まで。」

アリス「変わった!?!」

昴「ふーん。これが変身か。悪くないな。ん？」

俺がフェイの方を見ると、フェイが倒れていた。

昴「え!?!フェイ!大丈夫か!?!」

フェイ「僕なら大丈夫だ。」

昴「えつと、どういう事？」

フェイ「説明は後だ。昴!君が差し込んだメモリを右腰に差し込み軽く押したまえ。終わらせるよ。」

昴「了解!楓!一気に決めるぞ！」

楓「わかった！」

俺の黒いメモリを右腰の差し込み口に差し込み、軽く押すと、ジョーカーマキシマムドライブ

すると俺の周りに再び風が吹き始め、俺を浮かす。

楓 side

楓「あ、そう言えば、これにもメダルを入れるんだっけ？」

俺はさっきの男性の言ってたことを思い出し、メダルを三枚程入れる。

楓「これを、こうか？」

そして手前にあるレバーを押すと、メダルが出て来た。

楓「こいつで行けるか？」

俺はオースキヤナーを取り出し、剣に通す。

トリプルスキヤニングチャージ

俺が剣を振り抜く体勢を取る。上をみたら昴が変身した姿が二つに分離し、こちらに勢い良く向かっていた。

昴・フエイ「おらあ!!」

昴がヤミーに蹴りを連続で入れる。そして昴が離れたタイミングで剣を握る手に力を込める。そして・・・

楓「はああ！せいやー!!」

俺が剣を振り抜くと、ヤミーだけじゃなく、ビルまでも斬ってしまった。斬ったはずが、なぜかビルだけが元に戻った。そして・・・怪物「ぐああああああ!!」

巨大な怪物は大量のセルメダルをばらまきながら爆発した。

楓「こんなにメダルがあつたんだ。」

俺がメダルの多さにビツクリしていると、

アंक「俺のだ！俺のものだ！」

アंकはお構い無しに、メダルを体内に取り込んでいた。

あ、昴は大丈夫かな？

昴「で、これメモリ抜けば戻るか？」

どうやら変身の解き方を考えてたらしいがあっさりとは変身を解いた。

昴「よし、戻った。」

すると昴は俺に近づいてきた。

昴「楓、さっきの奴何か説明できるか？」

まあ、そうなるよな。聞いた範囲で答えるか。あれ？

楓「まあ、聞いた程度でなら。・・・？」

昴「どうした？」

楓「いや、誰かに見られてたような。」

昴「誰もいないぞ。」

楓「気のせい・・・かな？」

海翔 side

海翔「そんな・・・まさか・・・」

俺はみた。見てしまった、楓達が変わ身を解いたのを。怪物を。心臓の鼓動が、呼吸が早くなってるのが分かる。これは楓達への興奮ではない。恐怖だ。自分のように楓達になってしまいかもしれない。このままじゃ・・・

海翔「どうしよう・・・」

——俺も戦う？

——駄目だ。

——もう俺に、そんな資格はない。

楓 side

昂と別れた俺達は家へと向かっていた。

忍「楓君、どうしたのですか？」

楓「いや、兄さんの事。一応手は打ったけど、いつまでもつかを考えたらな。」

俺は兄さんの携帯を見る。俺が打ったメールを見る。そこにはこう書かれていた。

『勇、今俺は大変な事件に関わっているんだ。しばらくは連絡できそうにない。』

俺はそれを送信した。

楓「さて、これがいつまでもつか。」

俺が兄さんの携帯をしまったと同時に、声が聞こえてきた

??? 「あれ？悠木？」

あれ？おかしいな。どこかで聞いたことのある声だ。ごく最近、しかも今の状況下でマズイ人の声が・・・

忍「お姉ちゃん。」

はい？勇さん？

勇「なにしてるのよ！心配したのよ！」
そう言い勇さんはアंकに抱きついた。
アंक「・・・」

楓「う、嘘だろー！？」

俺の打った手は一瞬で砕け散った。

グリード登場

ウソだろ!?俺の打った手がまさかの1日で砕け散ったとは。いや違う。そんな事はどうでもいい。今のこの状況下で一番アंकクに会わせたくない人が目の前にいる。

勇「悠木何してるの?仕事じゃなかったの?」

アंकク「(何だ。この女。)」

突然アंकクはこめかみに指を当てる。すぐ後に不敵に笑う。

アंकク「(そういう事か。)」

勇「悠木。どうしたのその手。」

するとアंकクは勇さんの首を絞めた。

勇「うつ・・・」

楓「やめろ!アंकク!」

俺が止めに入ると、勇さんは無意識なのかアंकクを背負い投げで飛ばした。そして飛ばされたのは兄さんの体だった。えっ?てことは・・・

勇「あ・・・あ・・・」

アंकクの腕だけが勇さんの手に掴まれた状態だった。勇さんの顔が青ざめている。

アंकク「お前・・・何なんだ。」

勇「キヤー!!」

勇さんは悲鳴を上げ気絶してしまった。

楓「ちよつ!勇さん!大丈夫ですか!」

アंकク「おい。こいつ人間か?」

楓「当たり前だろ!それよりお前なに考えてんだよ!付き合ってたぞこの二人!」

アंकク「だからだ。こいつに付きまとわれたら困る。だからその前に消したほうが面倒がない。」

平気でそんな事を口走るアंकク。そうか、そっちがそうならこっちはだって考えはあるんだぞ。俺はアंकクの案を否定すると同時にベルトを取り出した。

楓「駄目だ。もし、勇さんに手を出そうとしたら……このベルト、捨てるぞ?」

俺はそう言い川にベルトを落とそうとした。

アंक「チツ……」

どうやらアंकはあきらめたようだ。こいつは本当に物騒な考えしかないな。

とりあえず俺達は自宅へと帰ることにした。アंकは当然俺の家に入れた。母さんに事情を話すと、

「なんかよくわからないけどとりあえずようこそアंकちゃん。」

と言っていた。ホントにこの人軽いな。

さて……明日からどうしようかな?

翌日。結局俺は普通に学校へと向かった。ホームルームの時間になると、

フェイ「今日からこのクラスに入ることになりました。八神フェイです。よろしくお願いします。」

あれ?フェイって他の高校に行ってるんじゃないんだ。

さくら「ではフェイ君は八神君の隣に座ってください。」

フェイ「なぜ彼女は僕を名前で呼んだんだろうか?」

昴「どっちも八神だからこんがらがるんだろ。」

確かに両方名字が八神じゃどっかわからないからな。

そう思いながら俺は後ろを見ると、しのがとんでもないことを口にした。

忍「アリスは今年でいくつになるんですか?」

楓「おい。同い年に決ってるだろ。」

アリス「そうだよ!同じクラスでしょ!」

忍「そうでした。でもその割には地位さですね。私が155cmです
ので、アリスは50cmくらいですかね。」

アリス「それはないよ!」

授業の準備が終わった俺達は昴達のいる後ろの席に行った。因みに席の配置は教卓の目の前にしのとアリスが俺はしのの後ろ。窓側

の席の後ろに綾、陽子の順番、綾の隣に海翔、陽子の隣に昴、そしてその隣にフェイとなった。

陽子「背が低いのがコンプレックス？」

アリス「うん・・・」

陽子「何で？小さいのかわいいじゃん。」

海翔「成長期が来てないだけだろ。」

綾「そうよ。これから伸びるわ。」

アリス「でも私、小学生の時から3cmくらいしか伸びてなくて・・・アリスがそう言うのと、このグループに静寂が走る。俺達はあることを察し、顔を伏せた。

海翔「それはもう・・・」

忍「はい・・・」

陽子「ダメかも・・・」

アリス「そんなー！そんな事ないって言ってー！」

俺達が黙っているのを見てアリスはガクリと膝を崩した。俺はせめてもの励ましの為にこう言った。

楓「けどさ、そこまで気にするか？俺だって男子のなかじゃ中の下くらいだけど気にしないぞ。」

そう。俺はクラスの中なかじゃ中の下くらい。つまり低い方なのだ。

陽子「そうそう。気にしなくていいって。」

アリス「ヨーコ・・・」

するとアリスは陽子にゴニョゴニョと話している。すると陽子が、

陽子「ん？背が低いから胸も小さいって？」

アリス「(コクツ)」

おいおい。そんな事をこんな場所で口走るなよ。

昴「そんな事をここで言うな。」

どうやら昴も同じ事を考えていたようだ。

陽子「ハハハッ！それは身長関係ないって！」

綾「そうよ。それこそ気にしないで・・・」

陽子「いい例がここに！」

あくあ。綾を例えにしたか。見事に墓穴を掘ったな。

海翔「おいそれ、地雷だぞ。」

陽子「ん？なんで？」

綾「・・・いわよ。」

陽子「？」

綾はガシツと陽子の肩を掴んで思いっきり揺らした。やはりぶちギレたか。

綾「どうせないわよ！悪かったわねー！！」

陽子「冗談！冗談なのに！」

キーンコーンカーンコーン

フエイ「おや、授業が始まるようだ。」

忍「やった！一時間目英語です！」

アリス「シノブ、英語が好きなの？」

陽子「からすちゃんが好きなんだよねー。」

アリス「カラス？」

楓「烏丸先生だぞ。担任の。」

アリス「あのメガネの？」

忍「そうです。優しくて笑顔で、英語ペラペラで、大人でジャージで。あんな人になりたいです。」

昴「ジャージはよくないような。」

俺もそう思う。と心で思っていると、突然アリスが「あ・・・あ・・・」と言いながら震えている。どうかしたのか？俺がアリスに声を掛けようとした時アリスが突然叫んだ。

アリス「だ、ダメだよシノブ！カエデがいるのにそんな事したらー！」

忍「わぁー！アリスダメです！！／／／／」

そう叫んでアリスの口をふさいだ。俺がいるのに？どういう意味だ？しかも顔が赤い。熱あるのか？

楓「どうした？顔赤いぞ。」

忍「き、気にしないでください！／／／／」

フエイ「ニヤニヤ」

楓「何だよ。」

フエイ「楓は以外と鈍感なんだよね。」

楓「な！どういう事だよ！」

海翔「さあて授業の準備するか。」

楓「おい！・・・まあいいか。とりあえず席に戻ろう」

英語の授業。黒板に英語を書いている烏丸先生。

烏丸先生「つと、ここはこうなります。ん？」

アリスはずっと烏丸先生を見ていた。

烏丸先生「本場の方が居ると緊張しますね。先生の英語はどうかしら？」

忍「先生の英語は日本一です!!」

突然しのが立って高らかに言い放った。

さくら「まあ！ありがと！」

おいおい。さすがにそれは・・・しのつてホント烏丸先生好きだな。

アリス「(ラ、ライバル!) はい！」

突然アリスが挙手して立ち上がった。どうしたんだ？

烏丸先生「アリスさん。」

アリス「Miss Karasuma, Your English sounds Little awkward (ミス・カラスマ!

あなたの英語はちよつとだけ変です)!!」

・・・はい？

全員「おおお!!」

まさか英語を見せてきたとは、しかも少しドヤ顔だし。それに周りも歓喜していた。

昴「本場の人の英語、初めて聞いた。」

陽子「すげえ！」

と、アリスを称賛する声が多かった。

烏丸先生「凄いわアリスさん！皆さん、アリスさんがお手本を見せてくれますよ。」

アリス「え!?!」

周りから拍手されてアリスは赤面する。

さくら「それでは、40ページの最初から。」

アリス「あ、はい！」

そう返事するとアリスは教科書を持つ。

アリス「(な、何でこんな事に!?)」

なんて思ってるんだろうな。アリスって思ってる事が顔に出るタイプだな。アリスが教科書を読んでいる中、教室に赤い腕が入ってきた。ってマジ!?俺は驚いてるがそれ以外の人達は悲鳴を上げている。当然だよな。腕だけなんだし。

陽子「腕だけ!?すげえ！」

綾「陽子!感心してる場合じゃないでしょ!」

・・・どうやら例外がいるようだ。つと、その前にアंकを追い出

さない!

楓「なにしてんのお前！」

アंक「いいからこい!ヤミーだ。近くにいる。」

楓「え?・・・わかった。」

俺は昴にアイコンタクトでそれを伝えた。すると、

昴「オーケー。」

どやら昴は理解してくれたようだ。

楓「先生!ちよつとこいつを追い出してきます。」

昴「そういう訳で失礼します！」

さくら「桐生君!八神君！」

陽子「気になる。・・・行ってみよ！」

綾「駄目よ!授業中でしょ！」

アリス「シノブ、もしかして、」

忍「・・・」

俺達はアंकに案内され、とある倉庫へと来た。すると、食べ物を運ぶために用意してあった場所から食べ物を食べる体格のよい男がいた。

持ち運ぼうとした男は気づいてそれを止めようとする。

楓「アंक、あれがヤミーなのかよ?どう見ても人間だろ。」

その男を指差しながら困ったように笑う。

アंक「ああ、そうだ。しかもただのヤミーじゃない、人間に寄生するタイプだ」

そう言いながら3枚のコアメダルを上投げてたりキヤツチしたりしてあそんでいる。

昴「一般人が巻き込まれてるわけね。止めるぞ楓。」

楓「当然。」

アंक「いや、あれはもつと育てたほうがいいな。もつとメダルでぶくぶくに太らせて・・・」

と言うアंक。しかし、俺はそれを聞き捨てるわけもなく、もてあそばれてる3枚を手のひらの上に再び落ちる前に取り、俺はベルトを取り出す。

楓「そんなに待つてられないね。行こう昴。」

昴「よし。」

俺と昴がベルトを着け、俺はメダルをはめオースキャナーを通す、昴はガイアメモリ?を使うらしい。

ジョーカー

楓・昴「変身！」

タカトラバツタ タ ト バ♪タトバタトバ♪

サイクロンジョーカー

♪

楓「おい！その人から離れろ！」

昴「離れな・・・ってうわっ！」

そう言いながら駆け寄り、相手の近くへと行く。

しかし、炎のようなものを直線に3発自身へと放たれ、避ける暇もなくあたる。

昴「おい待て！こいつ火吹くぞ!？」

そのせいで後ろへと軽く下がってしまう。

楓「そうか、寄生つてことは、その人の状態で力が使えるかも。とりあえず引き剥がさない」と。

あの剣がちょうどいいと思い出すと即座にそれを取り出す。前に軽く構えるようにして前に進む。

その間もまた炎のようなものを放ってくる男。

剣のおかげで防げたはそれをその男と軽くもみあいになった。

それをなんとかしようとは男に剣を振りかざすが、相手が人間だと
言うことに躊躇いを感じ、切りつけることができなかった。

楓「こらっ！早く離れろ！戦えないだろ！」

そう男の中にいるヤミーに言ったつもりで叫ぶ。

それでなにもしなかったので飛ばされるが、そこは。

こけそうになるのをなんとか防いで後ろへと後退するかのよう
に動くだけに収めた。

アंक「チツ：・寄生してるヤミーはそう簡単には出てこない。や
るなら本体ごとやれ！」

楓「いや、そんな事言ったって！」

言った後に男が迫ってきたので避けるが、つかみかかられてしま
う。

それからある程度もめて後ろにバックステップして避けたりをし
ていた。

上からその様子を見ていたアंकは不満そうに顔をしかめ、右手を
赤い腕に変えるとそこから降りると俺と男性との間に入りその男の
あごを掴み、壁にぶつけた。

アंक「まだパワーは成長してないようだな」

と言った矢先に男性を軽く空中で回転させると男は背中から地面
に落ちた。

それになにかをしようとして近づくとアंकを俺が後ろから羽交い
絞めにしながらアंकにこう言った。

楓「言ったよな！メダルを命より優先するなって！」

アंक「そんなもん知るか！いい加減どっちが命令する立場なのか
覚えろ！」

に両肩を軽く押されながらもそう叫び返したアंक。

そうしている最中にも男が立ち上がり俺達に向けて炎のようなも
のを吐く。

男「うがあ！」

と叫びながら。

昴「マズイ！」

フェイ「任せたまえ。」

するとフェイ？は緑のメモリを抜き取り、黄色のメモリを取り出した。そしてそれを押すと、

ルナ

それをベルトの右側に差し込み、バックルを開けた。

ルナジョーカー

くく♪

音楽が鳴ると、右半身が緑から黄色に変わった。そして腕が突然延びだし、炎の攻撃を防いだ。

・・・だが、肝心のヤミーが逃げてしまった。

アंक「チツ、逃げたか。」

楓「サンキュー昴、助かったよ。」

昴「気にすんな。」

楓「にしても、どこに行った？」

と呟いた。そこへ1人、バイクに乗って現れる男性がいた。

近くに横になるように止めると2人に近づき、それからヘルメットを取った。

そしてそのバイクのとあるボタンを押すと自動販売機のようなものへとなった。

??? 「これを使え」

それを聞くとは、

楓「あ！そうか！バイクで！」

と言いながらそれに近づいき、セルメダルを入れ、バイクに変形させた。

??? 「何故戻す。タカでヤミーを追跡させる。」

楓「ああ。そういう事。」

その人に言われてもう一度自販機に戻す。

アंक「おい！それ以上メダルを使うな！今の取り消せ！無効だ。」

??? 「一回は一回だ。」

アंकが何か抗議している間に俺はセルメダルを入れて上のほうの赤い色の缶のボタンを試しに押した。

するとタカ・カンと言う機械に近い音声と共に赤い缶が出てきた。

楓「確か、この人こうやってたよな。」

それを手にし、開け逆さにする。

逆さにされた赤い缶はタカのようなメカ?になった。

楓「すげえな。悪いけど、ヤミー探してくれない?」

と言った。そのタカのようなアンドロイドは理解したらしく二度首を上下に動かすと飛んでいった。

アंक「お前なにもんだ!どうして人間がメダルの力を使える!」

そう言いながら男を睨みつけるようにして言う。

???「お前たちが眠っていたのは800年。その間に人間も進化したってわけだ。お前たちグリードに対抗できるほどにな!」

と言うと銃をアंकに向ける。え?あれって本物!?

アंक「フン!進化っていうのはデカ過ぎる自信のことか!」

皮肉のように聞こえたが、これはマズイ状況だな。

昴「一触即発ってこのことだな。」

その間に変身を解いた俺が入る。

楓「ち、ちよつと落ち着いてください。」

そう言うと2人は暫くにらみ合った。

男が銃を降ろすとバイクで走り去っていった。

昴「ふう。大事にならなくて済んだな。」

そう言い、昴は変身を解いた。

アंक「どうやらこつちにもそうする必要があるようだな。」

と言うアंक。またなんか企てんのか。

楓「てかさ、あの緑のメモリ、どこから?」

昴「ああそれは学校にいるフェイからだよ。これ二人で変身するんだ。」

楓「そういえば、昨日昴が変身した時、フェイ倒れてなかった?」

昴「・・・パニックになってなきやいいんだけど。」

俺達は学校へと戻る。

アリス「シノ！二人帰ってきたよ！」

綾「何してるのよ！もう授業終わったわよ！」

昴「悪い悪い。つてアリスいつから大宮さんの事しのつて呼んでるんだ？」

綾「ああ。それはね・・・」

綾が言うには、授業が終わった後、移動教室だったので、しの達が移動するとき烏丸先生がいたからアリスが「シノブの事をシノつて呼びます！」と言ったらしい。皆はほんわかしてアリスを見て、当の本人は顔を真っ赤にしていたらしい。どうやらアリスにとってライバル宣言だったようだ。

楓「にしても、かわいらしい宣言だな。」

アリス「だってシノが仲良しのあだ名だって！」

そこからは何事もなく授業が進み、放課後になった。俺はアंकに呼ばれ、とある場所に来た。

楓「なあアंक、ここつて。」

アंक「俺の家だ」

平然とそう語っているアंकだがこいつは何言ってるんだ。ここは・・・

楓「いや、どっからどう見ても兄さんが借りてるアパートだろうが。お前の家じゃねえよ。」

そう。兄さんは元々アパートを借りて一人暮らしをしているのだ。

アंक「こいつは俺だ。だから俺の家だ」

楓「別人だろうが。全く違いよ。つか何でここがわかったんだよ。」とアंकに問い掛けた。するとアंकはこう答える。

アंक「自由にできるのは体だけじゃない。頭の中身もだ。」

楓「なんとすごいことだか。」

もう凄くて呆れてきた。俺はアパートを改めて見上げたらアंकが追いかけた。

中にずけずけと入っていくと、

アंक「調べないと、セルメダル集めてる人間と封印されてる間に無くなったコアメダル。進化した方法で」

と言いながらその中であつたパソコンに目をつけた。

海翔 side

俺は瀬戸海翔。楓達と同じクラスだ。俺は今考え事をしている。それは昨日と今日の楓達の事。恐らく楓達が学校を出た理由はヤミー・・・あの怪物共だ。あんな事が起こりかねない。だから俺は・・・

綾「あれ？海翔？」

海翔「!・・・綾。」

綾「偶然ね。今帰り？」

海翔「まあ、ちよつと。」

できることなら綾達を巻き込みたくない。

けど、もう俺には・・・

綾「ちよつと！あれ！」

海翔「ん?・・・!?!」

俺が見たのは、楓が男と取っ組み合いになつてゐる場所だった。

楓 side

アंकは今パソコンをいじっている。というかどこで覚えたのが気になつて仕方ない。そのためアंकにこう聞いた。

楓「おい、なんでお前がそれ使えんだ？」

アंक「こいつの記憶を使えばすぐ覚える」

いや、そんな当たり前のように言われると一層困惑するんですけどアंक「趣味だったらいいな。昨日の女に説教されるくらいに。」

楓「確かにたまに勇さんが注意するけど。」

そう言うのと再び記憶を探るアंक。

アंक「なるほど・・・。最近貰つたもんがここにあるのか」

眩きながらタンスを漁る。奥の方に誰もいない部屋があるのを見ては違和感を覚える。

アंकはいつの間にかスマートフォンを取り出していた。そして箱から取り出し、眺めた。

それからタカが窓をつついていた。

楓「ヤミー、見つけた？」

俺はタカに案内されヤミーの元へ向かった。俺が見たら男性は缶を捕まえている。だが、男性が掴んだのはカンドロイドだったため、タコに変形する。なるとそこから墨をはく。目潰しされた男を羽交い締めをするとタカのアンドロイド（通称：カンドロイド）が食べ物を持ったまま動く。するとヤミーは寄生者から出てこようとした。

楓「いいぞ、このままっ・・・！」

中からヤミーが出てくるのをみてそう呟く。

しかし、アंकによって邪魔されたあげく、その食べ物を男に投げ渡してしまう。

男は受け取ると食べ始める。

楓「おい、なにしてんだよアंक！」

アंक「言っただろう？このヤミーはまだでかくなれる」とアंकが言った。

楓「まだそんなことを？」

呆れたように言うと

アंक「問題あるか？食ってるだけなら周りで誰も死なない。」説明するようにアंकが答える。

楓「この人はどうなるんだよ！」

俺は少しキレ気味でアंकに問い掛けた。

アंक「フン！これは自業自得だ。いいか、ヤミーのせいでこうなったんじゃない。この人間の持っている欲望のせいになっただ。欲望にまみれて死ねれば本望だろう」

当たり前のようにそう言った。

楓「だからって・・・」

男は腹部が更に膨れてうめき声を上げている。

楓「マズイ。いいからメダル出させて！」

と言いながらアंकの腕をつかんで言うが、アंकに離されたあげく突き飛ばされてしまう。

それから上半身を軽く起こすとアंकが近寄ってきて、

アंक「いい加減覚えろ！命令するのは俺だ！言っておくが、ベルトを捨てたらそれこそ人は助けられない！」

そう大きな声で叫ばれる。

俺はそそくさと立ち上がり、まだ食べようとしている男に近づいて止めようとした。

楓「やめろって！それ以上食ったら死ぬぞ！」

と言いながら食べ物を取り上げようとした。

しかし、反対側へと放り投げられてしまう。それから立ち上がるのと同時に男せも立ち上がった。俺はわき目もふらず男の方へと向かう。

アंक「馬鹿が・・・」

と独り言のように呟く。だが俺はヤミーを引き剥がそうと必死だった。

アंक「やめとけ！お前の方が先に死ぬぞ！」

と叫ばれ、忠告されるが、

楓「なにもしないで見殺しにするよりは全然マシだね！」

と叫び返した。すると男からヤミーが出てきて脱皮するかのよう

に姿が変化した。するとヤミーが襲いかかる。変身してないため、攻撃を避けるしかない。

海翔・綾「楓！」

楓「え？海翔と綾、何で・・・うわっ!？」

あいつらいつからここにいたんだ？というかこれ以上友人を巻き込む訳には・・・

アंक「チツ、またこのパターンか・・・おい楓！」

アंकは俺にメダルを投げてくる。俺はヤミーを蹴り飛ばし、メダルを受け取りベルトをつけた。そして左右に同時に、真ん中にメダルを入れた。ヤミーが攻撃するが、それを避ける。そしてオースキヤナーと手に取ると同時にバックルを傾け、メダルにオースキヤナーを通す。

楓「変身!!」

タカトラバツタ タ ト バ ♪タトバタトバ

綾「え!?!何あれ!?!」

海翔「・・・」

今度は最初から剣で行くか！俺は剣を取り出し、ヤミーに斬りかかったが弾力のよい肉体のせいで攻撃がはじかれる。

ヤミーの攻撃を避けてから切ろうと横にしてやってみるがそれではじき返されてしまう。

楓「はあ!?!こいつプオプオしてる!」

と思わず叫ぶ。そしてそれから再度切ろうとするがやはりはじきかえされる。

それを後ろに行きながら繰り返すが後ろのめりになったせいで剣を手放してしまう。

そのため、トラのかき爪を出してヤミーに向かった。

最初は避けられてしまいがそのあとは当てたが、なかなか通じない様子。

楓「もう!めんどくさいな!こいつの体!」

それを何度やっても無駄だったため、かき爪をそのままに少しうろたえた様子で叫ぶ。

それから突き飛ばすようにしてヤミーをつく。

ヤミーはそのまま突き飛ばされて建物の柱へとぶつかり、そのままの方に戻って来て俺にぶつかってきた。

楓「ぐあっ!」

こいつ・・・めんどくさい体だな。

すると、緑色のほうから足へと光が進んで行く。

それからジャンプし、軽く足をあてるとセルメダルが少量出てきた。

俺は何度もヤミーを蹴った。そのたびにそこからセルメダルが出てくる。

外の見晴らしのいいところまで進むと攻撃をしてくるが、それを簡単に避けてそのまま飛び蹴りをしようとするが軽く避けられてしまう。

俺は気にせずそのまま再び何度も蹴る。ヤミーはそれで軽く転がるようにして後ろへと移動する。

剣が行けたんなら、ベルトでもできるはず。俺はそう思い、オースキヤナーをもう一度メダルに通すと、

スキヤニングチャージ

メダルが突然光だし、光が足の方へと移動すると足の形がまるでバツタの後ろ足のように変化する。俺はそれを使って高く飛んだ。

楓「フツ、はあああ！はっ！」

俺の前に赤・黄・緑のリングが現れる。俺はそこを通り抜け、ヤミーを捕らえる。最初のリングを抜けた時、赤い羽が生える。あれ？柱が浮かんでる。けど構ってられるか！俺は柱を破壊しながら進んだ。

楓「はあああ!!せいやー!!」

俺が三つのリングを通り抜けると、オーズみたいにリングが並んだ。俺は地面に着いた。

楓「つと！やったか！」

セルメダルを多少落としていたがヤミーはまだ生きていた。

楓「嘘!?何で!?!」

海翔「マジかよ・・・」

綾「倒したんじや・・・」

アंक「お前を邪魔したやつがいたんだ。」

楓「え？」

アंक「カザリ、お前だな。」

カザリ「フフフツ。久しぶりだね。アंक。」

疑いと価値と救いの手

アंक「カザリ・・・お前だな？」

カザリ「久しぶりだね、アंक」

と言った。

アंक「こそこそ付きまとってるとは・・・お前らしいな。そういえば人間に寄生するヤミーはお前のお得意な手だったな。」

と腕を動かしながら言う。

ヤミーはその間にも倒れている男へと近づいていく。

そして、軽く振り返るとセルメダル状になって倒れている男の元へと戻った。

男はうめき声をあげながら立ち上がる。

男性「もつと、もつと食い物！」

楓「おい待て！」

と言って近づこうとするがカザリの攻撃によって妨害されてしまう。楓はその攻撃で吹き飛ばされてしまった。

アंक「気をつけろ！奴は取り戻しに来たんだ。お前のその1枚は奴のコアメダルだからな」

と楓が着けてるベルトのオーカテドラルを指差しながらそう言う。

楓「コアメダル・・・てことはグリード!？」

楓は驚き、アंकのそばによって軽く身構える。

カザリ「そんなに警戒しないでよ。戦う気はないんだから。」
そう言うカザリ。

アंक「なに？」

先に言ったのはアंकだった。

カザリ「聞いてよ。無くなつたコアメダルなんだけど、さすがに君が全部持つてるとは思ってないよ」

そう説明するように言ってから、

カザリ「なにしろ君自身がそんなだしね。」

と言った。

アंक「で？」

カザリ「オーズなんて捨てて、グリード同士で手を組まない？」
楓「え!?!」

一方戦いを見ていた綾は、忍に電話していた。

綾「しの！今楓が怪物と戦ってるの。」

忍「ええ!?!今どこですか？」

綾「場所は・・・」

綾は、忍にその場所を伝える。

3人に戻る。楓は今も警戒していた。

カザリ「分かつてると思うけど、オーズなんて元は僕達を封印した存在だよ。そんなのと組むのなんて無理がある。」

そう言いながらカザリは楓とアंकに近づく。

楓はアंकとカザリと呼ばれたグリードを交互に見つめる。

カザリ「アंक。僕は昔からグリードの中で君に注目していた。僕と組んだほうがメダル集めは効率的だよ。」

足を止めてなおも言うカザリ。

アंक「俺としても仕方なくオーズを使っているだけだ。」

呆れたようにも聞こえる声で言う。

アंक「なにしろ・・・これだけしか復活できていない。」

言いながら右手をあげる。

思い出したかのように首を動かすと、

アंक「・・・が、人間はやっぱり面倒くさい。お前の方がマシかもな」

楓「な!?!」

カザリ「決まりだ。オーズはもういらねえ」

そう言いながら楓の方へと歩き出すカザリ。楓は警戒しながら少し後ずさりをする。

アंक「待て！」

そう言うか楓とカザリの間へ歩くアंक。

アंक「グリードのお前と組むのもそれはそれでデメリットがある。少し考えさせろ」

と自身の額に赤い腕の方の手を動かして指差すように動かす。

カザリ「ふん。分かった。でも長くは駄目だよ。君は油断ならぬ
いい」

とカザリは言うのと、また黄色の竜巻のような物を出す。
それを楓はまともに受けてしまった。

楓「ぐうう！ぐあつ！」

それから姿は見えないが、カザリの声で「いい返事を期待してるよ。
頭のいい君ならいい答えが出せるはずだ」と聞こえた。

楓「これがアंकと同じグリードの力・・・」

ヤミーとは比べ物にならない。そう感じながら呟いた。

カザリがいなくなった後、楓は変身を解いた姿で多少おぼつかない
ような立ち方をしていた。

楓「グリードってヤミーとは全然違うんだな。強さというより、力
の質って言うの？」

はあ、はあ、と息を切らしながらそう言った。

と言った。アंकは楓に近づきこう言う。

アंक「当然だ。カザリのほかにもあと3人。緑のグリードウ
ヴァ、白のグリードガメル、青のグリードメズール。」

グリードは合計五人いることを伝え、こう続ける。

アंक「もし奴らのコアメダルが揃っていたとしたら・・・今頃ど
うなっていたか」

それを聞いて未だにはあ、はあと息を切らし、立っているのがやつ
との楓が、

楓「確か・・・世界を喰らうって・・・」

と言った。暫く間をおいてから、

アंक「さてと・・・カザリからのありがたい申し出で俺もオーズ
が必要ってわけじゃなくなった。どうする。黙ってメダル集めに協
力するなら考えてやるが。」

戦い慣れしてないせい或未だに息を切らしている楓に向けて言っ
た。

楓「それは無理。」

そう言いながらなんとか立てている体をアंकに向けて。
アंक「馬鹿か。お前も見たら。人間なんて一皮向けば欲望の塊だ。いくら助けてもきりがない。」

楓「そりゃ時には欲望に負ける事もあるけど、最後には、ちゃんと・・・」

そう言う楓を遮るように言う。

アंक「欲望に負けるか。よく考えろ。その間、俺はこれを勉強だ」

p r r r r

携帯の着信音が鳴っていた。

楓「え？」

楓は自分の携帯を取り出すが、自分の携帯からではないと気づく。
楓は違うポケットに入れてある悠木の携帯を取り出した。

楓「マジかよ・・・こんな時に・・・」

??? 「どうして？」

楓「!?!」

楓は後ろから人の声、聞き覚えのある声を聞き、振り向いた。

楓「勇さん・・・」

勇「それ、悠木の携帯よね。どうして楓君が？」

楓「いや・・・これ・・・」

楓は言葉を言い切る前その場に倒れこんでしまった。

勇「楓君!?!」

海翔「楓!大丈夫か!」

綾「え!?!どうなってるの!?!」

忍「楓君!大丈夫ですか!?!」

海翔「ひどい傷だ。手当てしないと。」

一方ヤミーにとりつかれた男性は別の場所で食べ物食べていた。
しかし男は

男性「苦しい、もう食べたくない。もうイヤだ!」

と言っていた。周りの引いている人々は気づいてる様子はあまりない。手を止められず口にしてしまう。その間にもセルメダルが増

えていく・・・。

その場所にはいないが、アंकはそれに気づく。

アंक「(いいぞ。もっと食べ！食って溜め込め!)」

内心でそう思った。

スマートフォンをいじりながら、

アंक「なるほど、面白いな」

と1人で呟いた。

アंक「ただ突っ立ってるだけで、大量のデータが手に入る。飛び回る必要もないってわけだ」

そう言ってからスマートフォンを見る。それを離れた場所から楓を時々たすけている男性がみていた。

それをどこか別の場所で見ている男性と女性は軽い会話を交わしていたのを楓達は気づいていない。

一方、カザリの攻撃で負傷した楓は自宅で手当てを受けていた。

海翔「よし！これでオーケー。」

海翔は楓の背中にシップを四枚程貼り付けた。楓は新しく服を着た。

海翔「あと、替えのシップな。」

そして、海翔は替え用のシップを二枚楓に手渡した。

楓「サンキュー。」

勇「それで、さっきの話本当なの?」

楓の方へと顔を向けてそう尋ねる勇。

勇「あの腕の怪物が、悠木に取り憑いてるって。」

と言った。楓はうなずき、

楓「すみません。巻き込みたくなって。」

そう申し訳なさそうに言った。

勇「なにか方法があるんじゃないの。警察とか?病院とか?」

と楓に向けて言った。

楓はその質問に首を振った。

楓「そこじゃどうにもならないと思いますし、アंकは平気で兄さ

んの体を捨てる。」

楓の言葉に勇はショックを受け、膝をついてしまった。

勇「そんな・・・」

楓「違うんですよ。いくら姿が一緒でも、中身が全然違う。今は俺の兄でも、勇さんの恋人でもない。」

そう平然と話した。

海翔「楓はこれからどうするんだ。」

楓「え？今タカちゃんにヤミー追って貰ってるから。見つかったら行くつもり。」

勇「ヤミーってあの腕の怪物みたいなやつ？」

楓「うーん。微妙に違うけど、似たようなものか。」

綾「本気!?!そんな怪我なのよ!」

綾はまた楓が戦いに行くつもりだったので、少し感情的になって止めに入った。

楓「でも、人も巻き込まれてるし、ヤミーどうにかできるのは、オーズ・・・俺のできることらしいし。」

海翔「・・・何で。」

楓「?」

海翔「何でそんな事が言えるんだよ!死ぬかもしれないんだぞ!怖くないのかよ!?!」

綾「海翔?」

余り感情的にならない海翔が珍しく表情を変えて止めた。

楓「確かに死ぬのは怖いけど、それで自分のできる事から逃げたくないんだ。」

感情的に止めに入った海翔に、楓は自分の思ってる事を伝えた。

楓「・・・誰もを助けられるわけじゃないし。」

忍「え?」

楓が一瞬表情を曇らせたのを忍は見てしまった。

楓「ただ、手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それがイヤだから手を伸ばすんだ。それだけ。」

真剣な表情でそう楓は語る。すると、タカカンドロイドが窓をつつ

いていた。

楓「あ、ヤミー見つかった？」

タカカンドロイドが案内しようとしてるので、楓は自宅は

忍「楓君！大丈夫ですか？怪我してるのに。」

楓「ああ。大分体動けるようになったし替えのシップだってあるから、大丈夫。」

そう言いながら懐よりその替えのシップのようなものを取り出して見せ、それをしまい走り出した。忍はそんな楓を心配そうに見送った。自販機にセルメダルを入れてボタンを押してバイクにする。ヘルメットをかぶり、バイクを走らせた。移動してから暫くするとその問題の店の前についた。ヘルメットを脱ぎ店に入ろうとした。

昴「楓！」

騒ぎを聞いて来たのか、昴も店に赴いていた。

楓「昴。」

昴「やっぱりヤミーか。」

楓「ああ。」

するとアंकが近くに現れる。

楓「・・・アंक」

落ち着いた様子で言う。

アंक「答えは出たのか楓。俺はすっかりこれをマスターしたぞ。」
スマートフォンをみせながら楓に近づくアंक。

楓「答えは同じだ。俺はお前の道具にならない。」

と平然と言い放つ。

アंक「お前は本当にバカだな。」

呆れたように言うアंकの後ろにカザリが出てきて、

カザリ「じゃあ・・・アंकの答えも決まりだね」

と言った。

昴「なんだ！またヤミー？」

楓「違う。グリードだ。アंकと同じ。」

カザリ「君はオーズなんか捨てて僕と組む」

それに対し、

アंक「そうなるなあ」

と言うアंक。

カザリ「お前は・・・ここで消える」

学校の制服の楓に向けてそう言い、カザリは近づく。

楓はバイクからメダジャリバーを取り、昴はダブルドライバーを取りだす。

カザリが楓達に向かってくる。アंकは右腕を戻し、それからカザリに攻撃した。

軽くセルメダルが出てくる。カザリはそのせいでそこから後ろの軽く突き飛ばされる。

カザリ「アंक・・・お前・・・！」

そう言う顔を見てアंकを見る。

アंक「お前は昔から疑い深かったが、復活しても同じだな。俺と楓が話し合わせて裏をかくんじゃないかと、うろろうかぎまわってたろ。」

カザリ「くっ・・・」

そう言うからスマートフォンを出して

アंक「最近の人間の道具だ。黙ってても情報が集まる。お前の行動は全部見られてたんだよ。人間に。」

と言った。

カザリ「まさか・・・人間がそんなこと・・・」

とうろたえるように言った。

アंक「変わったんだ。俺達が封印されてる間に。疑い深いグリードはその疑いから裏切る。メダルを狙う。バカでも面倒でも・・・人間の方がまだマシだな。」

楓を見ながらまんざらでもなさそうに言った。

カザリ「お前・・・！」

と言ってアंकに近寄るがアंकに抵抗されて後ろへと移動する。

アंक「楓!!」

楓はメダジャリバーを近くに投げ捨て、右手でオーズドライバーをつける。そして左手でメダルを受け取る。

オーカテドラルに両手で左右にメダルをはめ、右手で真ん中にはめ込む。

楓は入れ終わると左手でオーカテドラルを傾け、右手でオースキヤナーを手にする。

それから斜め上になるよう持ち上げてオーカテドラルに通す。

楓「変身！」

タカ トラ バツタ タ ト バ ♪タトバタ ト バ♪

カザリがその間にも襲い掛かってくる。カザリの攻撃を避けることしかできない楓。すると、

アंक「楓！これに変えろ！」

アंकの言葉と一緒にカマキリのコアメダルが投げられる。楓はそれを受け取ると真ん中のと取り替えそして相手の攻撃を再度避け、オースキヤナーで再びメダルに通す。

タカ カマキリ バツタ

そしてその腕でカザリと戦う。その腕でカザリを軽く後ろへとやるとカザリが砂嵐を起こし、楓を攻撃する。戦いに慣れていないせい、攻撃をまともにくらい、倒れ込んでしまった。

楓「くっ！」

カザリ「コアメダル・・・返してもらおうよ」

その様子を見ながら言い放つ。それから楓に近づく。楓はなんとかして立ち上がる。しかし、立ち上がってから少しふらついてしまう。

アंक「楓！死んでもとられるな！」

と楓に向けてアंकは叫んだ。

楓「死んでもね・・・フツ！」

それからお互いに飛んで攻撃し合うが相撃ちとなり、そのときに胸の辺りを攻撃されてしまったのでそれが原因で、オーカテドラルの真ん中からコアメダルが弾き飛ばされる。

それをキャッチしようとアंकは腕を体からはなし、飛んで行くが

先にカザリに奪われてしまう。

同時に地面に落ちた楓はそのまま変身が解けてしまう。

カザリ「・・・ウヴァのコアか」

と言いながらそのコアメダルを見つめるカザリ。

アंक「チツ、やっぱ人間を選んだのは失敗だったか」

多少怒りを感じる声でそう呟くアंक。

カザリ「僕のコアも返して・・・」

言いかけた瞬間、何故か肩の部分がセルメダルになって外れる。

カザリ「・・・なに!？」

楓「え？」

手に何か握ってるのに気づいた楓が右手を開くと・・・3枚のコアメダルを手にしていた。

カザリ「僕の・・・」

さっきの楓の行動を思い出す。実は楓は、カザリを切りつけたつもりが、無意識にカザリのコアメダルを抜き取っていた。

カザリ「僕のコアを・・・」

楓「切った感覚がないわけだ。」

アंकは楓からコアメダル三枚を半ば強引に奪い取り、こう言った。

アंक「ハハッ、上出来。」

コアメダルを抜き取られたカザリはふらつきながら、

カザリ「アंक・・・いつか後悔するよ」

と言い残し、ふらつきながら逃げるように去っていった。

昂「楓！今なんかおかしな状況なんだよ。」

楓「なんだあれ!？」

窓が割れる音でする。

男性「助けて・・・うがああああ!!」

とうめくように叫ぶ。

アंक「そろそろ寄生するのも限界だな。メダルの収穫だ」

そう言ってる間にも男はヤミーの中に取り込まれるように入っていくてしまった。

楓「え!?!あの人ヤミーの中に!」

軽く暴れるヤミーをみてアंकが先に移動する。楓と昂は急いで後を追う。それから人気の無いような場所で離れた場所にヤミーが見える。

アंक「欲望に飲み込まれたつてところだ。あの醜さが人間の本性だよ。あんなのに助ける価値があると思うのか。」

と言うアंक。前へ移動しながら、

楓「人の価値は俺が決めることじゃない。」

アंकに向けて楓はそう言った。

アंक「俺は決めるぞ。価値なしと決めたらすぐにお前を捨てる。」

昂「こいつ・・・」

平然と言い放つアंकにジト目で見ていた。

楓「俺は必ず隙を見つけて、絶対兄さんを取り戻す。お前を倒してもな。」

アंकの少し前で少し睨みながら言った。

アंक「やれたら褒めてやる」

言つてから3枚のメダルを放り投げる。

楓はそれをキャッチすると、再びオーズドライバーを腰に当ててオーカテドラルにしてそこにメダルをいれる。左手で傾け、右手にオースキヤナーをもってからメダルに通す。

同時に昂はダブルドライバーを付け、ジョーカーメモリを取り出し、メモリを押し。

ジョーカー

楓・昂「変身!」

タカ トラ バッタ タ ト バ タトバタ ト バ♪

サイクロンジョーカー

♪

先に走り出していた楓はメダジャリバーで切ろうとするがやはりはじかれる。それを繰り返しても切れなかった。

楓「やっぱり切れない・・・」

面倒くさそうに楓は呟いた。

上からみていたアंकが、

アंक「また妙な具合に成長したな。楓！もつと深く切り込め！」
アंकはそう叫んだ。

楓はヤミーの方を見ながらこういう。

楓「あんまり深い中の人が・・・うわっ！」

と叫び返してから相手の攻撃を受ける。それから攻撃を防ぎ、おなか辺りを何回かやや深めに切ると少しひらいてセルメダルが見えるようになる。そのときに一瞬だけだが、男性の顔が見えた。

楓「そうか！セルを押し退ければ！」

昴「来るぞ！」

昴がそう言と、ヤミーは口から火を放つ。楓と昴はそれを避ける。

アंक「なるほどな。楓！さつきとつたこいつバツタと変えろ！」

と黄色のコアメダルをに投げる。オーカテドラルからバツタを取り、黄色のメダルを入れる。その時、ヤミーが攻撃を仕掛けて来たのでそれをかわしながらオーカテドラルを傾け、オースキャナーを通す
タカ トラ チーター
すると、楓の脚が緑から黄色に変わる。

男性「助けて・・・」

楓「助ける。絶対！」

楓宅に残された忍達は楓の言葉を思い出していた。

『手が届くのに手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それがイヤだから手を伸ばすんだ。』

楓は連続で蹴りを入れながら男性に手を伸ばしている。男性も手を伸ばしている。楓はギリギリ腕を掴み、ヤミーから引きずり出した。

楓「よっしゃ！」

昴「楓。今回は俺に決めさせてもらうぞ。」

楓「え？いいけど。」

フェイ「昴。これを使いたまえ。」

昴は二本のガイアメモリを抜き取り、黄色のメモリ、青のメモリを取り出し、メモリを押しした。すると、

ルナ トリガー

と音がなり、ダブルドライバーにメモリを入れ、再びバツクルを開ける。

ルナ トリガー

♪

音楽が鳴り、右半分が黄色に、左半分が青色にかわる。左半分には銃らしきものがある。昴はその銃に青のメモリを入れると、

トリガーマキシマムドライブ

そう鳴ると、銃をヤミーに向けヤミーを撃つ。すると、その銃弾はヤミーの全方面へと拡散し、ヤミーを攻撃する。ヤミーは爆破し、セルメダルはその場に落ちる。

男「もう食べ物のドガ食いはしません。ちゃんと規制します。」
と言っていた。

楓「ね？一度欲望に負けたって、人間はもう一度やり直せる。あんな目にあつたんだし、もう大丈夫でしょ。」

アंक「フン！」

楓がそう言ってる間に男は上半身を起こすと、

男性「あ、できれば病院食が上手いところに。」

と言った。男達は呆れながらタンカに再度横にさせる。

楓は最早口を開け、絶句状態である。

アंक「そういうことだ。人間は欲望一つとしてコントロールできない。俺の言った通りだろ。」

そう言ってから楓の後ろを歩いていきながらこういい放った。

アंक「俺の勝ちだな！」

それを追いかけながら、

楓「別に勝ち負けとかじゃねえし。」

と半ばキレたように楓は言った。

昴「おい楓！」

それを昴は追いかけた。

それから2人で歩いていくと高級車があった。それをみていると中から女の人が出てきた。その女性はパネルを後ろの席から持つて出てくる。するとそこに男性の姿が出て来た。

??? 「やあ、桐生楓くん、八神昴君。それとグリードの1人のアंकくんだったね?」

もちろん昴と楓とアंकは戸惑った。

楓 「え?」

アंक 「なんだ?」

と言う三人。それに対し

??? 「まずは我々の出会いの祝って」

と言ってからクラッカーを鳴らす。

??? 「人と人との出会いはなにかが生まれる新しい前触れでもある」
昴 「は?」

セレブと転校生と鬼ごっこ

???「やあ、桐生楓君、八神昴君。それにグリードの一人アंक君だったね。」

楓「え？」

アंक「何だ？」

???「人と人との出会いは何かが誕生する前触れでもある。」

昴「は？」

???「それは一体なにか。そしてその為に私が作るケーキは一体どれ程の物か・・・期待で胸が膨らまないかい？」

その男性はそう言いながらケーキを作っていた。

里中「では改めて、こちらは鴻上フアウンデーション会長、鴻上光成。それから・・・」

女性は車にモニターを置き、黒い箱に、白いリボンがついていた。

里中「これはつまらない物ですが、ご挨拶代わりに。」

女性は箱を開けると、赤、青、緑のカンドロイドがそれぞれ3つ入っていた。

楓「あつそれ！」

楓はカンドロイドを見て、その女性に駆け寄った。

楓「じゃあ今まで助けてくれてたのって。」

里中「どうぞ。」

楓「ありがとうございます。いやーこれホントにスゴいですよね。」

楓「あ、この色は初めてだな。」

楓はカンドロイドを起動させる。するとバツタに変わった。そのバツタは楓の周りを走り回った。

アंक「お前か。人間のクセにメダルを集めてるのは。」

鴻上「そう！実は今日は商談を持ってきた。」

アंक「商談？」

時を同じくして、金髪の男が楽しそうに街を歩いていた。スケートボードに乗って酒瓶や雑誌などが散らかっている建物の中に入って

行った。そこには、黒いTシャツにジーンズ、緑の上着を着ている男性、灰色の服にジーンズを着ている男性がいた。

「フフツいいじゃん。似合うよウヴァ、ガメル。」

「良くはないが、いちいち人間に騒がれないのは面倒がなくていい。」

緑の上着を着た男性はそういう。

「そつ。動きやすいよね。」

金髪の男性が突然メダルに包まれ、怪物へと変わった。その怪物は以前、楓が戦ったグリード、カザリだった。

カザリ「気に食わないけど、アंकが言ってた事は正しいよ。この800年で人間は進化した。僕達も変わらないと。」

ウヴァ「アंकか・・・」

緑の上着を着てる男性もメダルに包まれて怪物へと変わる。そして灰色の服の男性も。

ガメル「メズールはまだ戻らない。何故だ？」

カザリ「彼女の事だし、まだ気に入った人間がいらないんだよ。それともとくに手に入れて遊んでるか。でしょ？」

そして、高級車が高層マンションに着いた。そこから大量の袋をもった女性が出て来て、そのマンションに入って行った。女性がエレベーターを待っていると、制服を着た中学生くらいの背丈の少女がこう女性に問い掛けた。

「それ・・・全部買ったの？」

「フン。」

その少女の問い掛けに、女性は息一つで返す。

「たくさん買うのが好きなの？」

「たくさん？これっぽっちで。」

中学生くらいの背丈の少女から少量のセルメダルが落ちる。すると突然少女の体が怪物に変わった。

「その悲しいまでに大きな欲望・・・気に入ったわ。」

その怪物は女性にセルメダルを入れた。

突然彼女の意識が戻ると、自分の部屋にいた。

??? 「あれ？何してたんだろ。私。」

女性の部屋は服やカバン、雑誌などで散らかっていた。すると突然、彼女の部屋の片隅に蒼い卵が出て来た。

彼女は気配を感じたのか後ろに振り向くが、何もなかった。

??? 「ま、いつか。」

そう言うのと女性は先程買ったカバンや服を取り出していた。そんな彼女を見てさっきの少女は笑みを浮かべ、その場を立ち去った。

アंक 「メダルの分け前をよこせたと？」

鴻上 「そう。我が財団は君達にバイクや武器など、貴重な装備を提供する。その代わりに君達は戦いで得たメダルを我が財団に提供する。フツ。単純な取引だよ。」

そして鴻上は続ける

鴻上 「全部とは言わない。回収した分の70%だよ。」

アंक 「ふざけんな！」

そう叫びアंकは右腕を戻し、女性に歩み寄る。すると、拳銃の音が響く。するとアंकの足元に銃弾がとんでいた。

??? 「次は外さない。」

発砲したのは、時々楓を助けてくれた男性がいた。

昴 「あ、あの時の。」

アंक 「お前……！」

鴻上 「氷室君。あまり無礼な態度はよしたまえ。」

楓 「アंक！すごいよこれ！通信機になる！な？いいよこれ！もしもーしー！」

楓は完全にカンドロイドを気に入っていた。

アंक 「楓……」

その楓の姿にアंकは呆れていた。

鴻上 「桐生楓君。君なら分かるだろう。我々のメダルシステムの素晴らしさが。グリードとの戦いには必要だろうか？」

楓 「そうですね。あ、そういうえば、あの人って……」

鴻上 「ああ。彼は氷室翔琉君。君と同一年で同じ高校に通ってるは

ずだよ。」

楓「え？じゃあ。」

翔琉「俺も最近、県立もえぎ高校に入学した。まさか違うクラスの奴がオーズだったとはな。」

楓「へえ。あ、それから、メダルを集めて何するんですか？」

鴻上「秘密だ。」

楓「なるほど。」

鴻上「里中君。今日はここまでにしよう。アंक君。答えはまた後日改めて。」

そう言うとモニターからの映像が消え、里中という女性は車を走らせた。すると、後ろから氷室翔琉がバイクで走り去って行った。

時を同じくして、セルメダルを入れられた女性は紅茶を飲みながら、服やカバンなどが載ってる雑誌を眺めると、

女性「あー！これ絶対欲しい。明日買いに行こう。」

するとどこかからメダルが溜まっていく音が響き、それを遠くから女性にメダルを入れた少女はそれを見ながら

???「ゆっくり・・・じっくりとね・・・子供達。」

そう呟いた。

休日、アंकはアイスを食べながら鴻上ファウンデーションについてスマートフォンで調べていた。

アंक「(鴻上か・・・人間がメダルに手を出すとどうなるか・・・教えてやる。)」

楓「ヤバイ！ホントにバイトしようかな。」

楓は財布を見ながら、焦りを見せていた。アंकが食べてるアイスのお金は楓が払っているからである。

楓「アंक！お前アイス食いすぎ！まだ夏にもなってないんだぞ！どうすんだよ！」

アंकに少し自重するように言うと、

アंक「邪魔だな。気が散る！」

アंकはそう返した。

楓「おい！少しは俺の・・・」

アंक「お前じゃない。」

楓ではないと伝え、こう続ける。

アंक「この気配・・・ヤミーか・・・あるいは。」

楓「??」

楓達は海が近くにある橋まできた。そしてアंकはそこを見渡すと、突然アंकはメダルを楓に投げた。

アंक「楓。変身しとけ！」

楓「え？」

アंक「急げ！」

アंकがそう叫んだ瞬間、海から怪物が出て来た。

そこから少し離れ、オースキャナーを通す。

楓「変身！」

タカ トラ バツタ ♪タ ト バ タトバタ トバ♪

???「まったく、そんな程度の復活なのに、めざときは変わらないのねアंक。」

アंक「お前のじめじめした気配もな。楓、気をつける。そいつはグリードの一人、メズールだ。」

メズール「よろしく。オーズの坊や。」

楓「俺は坊やじゃないぞ。」

アंक「メズール。俺の側をうろうろするな。邪魔だ。」

メズール「フツ、あなた達こそ目障りよ。散歩もできやしない。」

メズールから攻撃を仕掛けてきた。楓はギリギリそれを回避して、メダジャリバーを取り出した。そして攻撃に出るが、ことごとく避けられてしまう。メズールは楓がメダジャリバーを振った瞬間を突き、脚をかけ楓を転倒させる。楓はメダジャリバーでメズールを突きで攻撃しようとするが、それに脚を寄せ、楓の背中を使い高く飛んだ。

メズール「オーズの坊や。またね。」

そう言い、メズールは立ち去った。

楓「グリードが散歩ねえ。ヤミー仕掛けたのかな？」

そう言いながら、楓は変身を解いた。

アंक「だとしても、メズールのヤミーはそう簡単に出てこない。どこかに巣を作って、人間の欲望を食ってるかもな。」

楓「何だよそれ。どこにあるかわかるか。」

アंक「さあな。」

アंकはメズールが出て来た場所辺りを見渡す。そして少し遠い高層マンションに目を付けた。

アंक「とにかく、今はこれの勉強だ。」

アंकはスマートフォンを取り出し、操作しながら歩き出した。

楓「アंक！お前またヤミーがメダル増やすの待つ気か！」

楓はアंकにそう叫んだ。そしてこう続ける。

楓「おい！教えろって！」

楓の言葉にアंकは無視した。だが、楓は気づいていた。ここから離れる前に少しだけ凝視した場所があった事に。

楓「フフ、なーんてね。今あいつあそこ見たよな。」

楓はアंकが凝視していた高層マンションを見た。

時を同じくして、グリード達のアジトにメズールが戻っていた。

ウヴァ「なに!?オーズとアंकが!？」

メズール「ええ。さつさと引き上げてきたけど、せつかく仕掛けたヤミーに気づいたかもしれない。うまく育てば、あなた達にもたつぷりセルメダルを分けられるのに。横取りされたんじやたまらないわ。」

メズールの言葉に緑のグリード、ウヴァが激昂した。

ウヴァ「俺が行く！オーズもアंकもこの手で叩き潰す！」

そう言いウヴァはアジトを出た。

ガメル「ウヴァ・・・怒ってる。」

白のグリード、ガメルがそう言った。

それに続き黄色のグリード、カザリが、

カザリ「メダルを取られてるからね。僕も同じだから、気持ちはいよくわかる。」

メズール「あら、あなたがそんな同情的な事を言うなんて、珍しいわねカザリ。」

カザリの言葉に青のグリード、メズールはそう言った。それに続けて、

メズール「その悲しい姿のせいかしら?」

その言葉にカザリは少し離れて

カザリ「かもね。」

と言う。

一方、メダルを入れられた女性は今、高級な店に訪れていた。そして服を着比べしながら店員にこう言う。

女性「雑誌に載ってたバックとワンピース、それとブーツ、やっぱり欲しくなったから買ってきて。」

翌日、いつも通り学校に向かうアリスと忍、その時、駅前で友達と会ってから一緒に行っている。だが、今日は少し違っていた。

陽子「おつはよう!アリス、しの!あれ?楓は?」

陽子はいつもなら忍達と一緒に来ているはずの楓の姿が見当たらなかったのを不思議に思ったのかそう聞いた。

アリス「行くところがあるから先に行ってって。」

綾「行くところ?」

綾が疑問を持っていると、

???「アリス!」

アリスはどこからか自分の名前を呼んでるのを聞いて、辺りを見渡す。

アリス「?」

???「アリス!アリス!」

アリスの名前を呼んでた金髪の少女はアリスに抱き付いた。

アリス「カレン!」

と、アリスは驚きの表情をみせる。

???「誰?」

と、何故か関係ない忍が二人に抱きついてた。

陽子「おい！しのは関係ないだろ！」

と、陽子は忍を引き剥がすと、金髪の少女自己紹介を始めた。

カレン「九条カレンと申すデス。」

忍「金髪の美少女です！」

アリス「カレン。何で日本に？制服まで……」

カレン「ブーンブーン！」

と、両手を広げて走り出した。

アリス「乗って来た乗り物じゃなくて！」

後でカレンに聞くと、旅行から帰って来たときに、アリスは日本に行ったと聞き、追って来たらしい。

綾「そんな簡単に!?!」

後でカレンはいわゆるお嬢様だとしる。

一方、先日ヤミーがいそうなマンションに高校生の制服を着た男性がいた。

楓「寝坊って事にしとけば問題ないし、放課後にまたきて、ヤミーが出て来ても迷わないようにちゃんと覚えとかないと。」

そこにいたのは、用事だと言って遅れると言った楓だった。少し下調べをしようと思っに入ろうとしたら、黒いTシャツにジーンズ、緑の上着を着ている男性、グリードウヴァがいた。

ウヴァ「オーズだな。」

と言った。当然、グリードだと気づいていない楓は少々戸惑い、こう問いかける。

楓「え？えつと、どこかで会いました？」

ウヴァ「初めてだ。どっちの顔も。」

楓「？」

ますます訳がわからなくなる楓。すると、とうとうウヴァはグリードとしての姿を見せた。

楓「まさか……グリード!?!」

ウヴァ「返してもらどうぞ。俺のコアメダル。」

そう言うと、ウヴァは楓に襲いかかった。楓はそれをよけ、オーズドライバーをつける。だが、コアメダルが手元に三枚ないので変身が

できない。

楓「あ、あれ？」

ウヴァ「どうした？メダルを出せ。アंकはどこだ！」

楓「へ？えーっと。あいつどこだ？」

ウヴァ「貴様・・・ふざけてるのか。」

そう言うとうヴァは右腕の爪らしきもので、楓に襲いかかる。楓は変身できない為ギリギリで回避するのが精一杯だった。その時、楓はポケットの中にカンドロイドがあることを思い出した。

ウヴァ「まずはお前を潰す。オーズをなくしたアंकなど、どうにでもできる。」

再びウヴァは楓に攻撃を仕掛ける。それを回避し、カンドロイドを起動させた。

楓がグリードに襲われている中、アंकは鴻上が何処にいるのかを探っていた。

アंक「ここじゃない。さすがに鴻上の居場所は早々漏れてこないな。」

そう言いアंकはスマートフォンで情報を得ようとしていた。そこへ、タカのカンドロイドがバッタのカンドロイドを持ってアंकの元へ飛んで来た。

楓「アंक!？」

その二つのカンドロイドはウヴァに襲われてる時に、楓が起動させたカンドロイドだった。

アंक「お前遊ぶのもいい加減にしろよ。」

それを知らずにアंकはまた遊んでると思ったのか少し強めに言葉を放った。

楓「グリードとの鬼ごっこが遊びなんて笑えねえよ！」

アंक「なに？」

楓「うわあ！こっち来た！」

楓の悲鳴にアंकは大体の状況を把握し、こう言う。

アंक「楓。俺が行くまでとにかく逃げろ。」

そう言いアंकは近くにあった自販機にセルメダルを入れ、バイク

に変形させた。それに乗ろうとした時、

鴻上「アंक君。」

アंकのいた建物のモニターに鴻上光生の姿が映った。

鴻上「我々のシステムはかなり役立っているようだが。」

その言葉を無視し、アंकはバイクを走らせた。

アリス「なるほどー。」

綾「アリス、何メモしてるの？」

アリス「学校で聞いた難しい日本語。後で忘れないように書いておくんだよー。」

綾「なるほど。メモしてたら忘れないわね。」

アリス「ところでアヤ、何持ってるの？」

綾が持っているカバンが気になったのか、アリスはそう問い掛け
た。

綾「ジャージだけど、一時間目体育よ。」

アリス「忘れた！」

と、アリスは言っているが、メモ帳にはジャージと書かれていた。

綾「ぼつちりメモしているけど。」

アリス「忘れないように玄関の目のつく所に置いておいたのに！」
そう言い、アリスはガクリと膝をついた。

綾「アリスも結構ドジなのね・・・」

陽子「しのは気づかなかったの？一緒に住んでるのに。」

忍「そう言えば、アリス、体育なのにジャージ持ってないなーとは思いました。」

陽子「確信犯!？」

知ってて黙ってた事に陽子は驚きを隠せなかった。

忍「でも中に着てるのかもと思いました。」

陽子「水着じゃないんだから。」

陽子はそうツツコムと、何か閃いたのか、陽子はアリスに近づいた。

陽子「アリス！大丈夫だ！」

そう言いながら、何故か烏丸先生を連れてきた。

陽子「こう言う時の為にカラスちゃんのジャージがあるんだ！」
アリス「えー!?」

さすがに先生から貸りるのはマズイと言うように叫んだ。

アリス「で……でも先生だし……」

さくら「大丈夫よ。デザインはほぼ当時のままだから、バレないバレない！」

アリス「え……いや、先生!？」

先生も貸す気満々だった事にアリスは驚いてしまった。

そして、更衣室で着替えるのだが、当然アリスは上のジャージだけだった。

アリス「上は貸してもらったけど、下がないよ……」

陽子「大丈夫！無くても行ける！シャツ一枚的な！」

綾「ええ。違和感0だわ。」

陽子と綾は大丈夫だと言っている。

アリス「ええええ！大丈夫じゃないよ！」

忍「あつ、私、夏用の短パン持ってますよー。」

陽子「それだ！」

結果、上はジャージ、下は短パンという、格好になってしまった。

アリス「(さ、寒い……)」

まだ、寒さが少し残っているせいか、アリスは全身が身震いしていた。

綾「体育なんて科目、この世から無くなればいいんだわ。」

陽子「何言ってるんだよ。見学すんな。」

陽子は、体育座りをしながら変な事を口走る綾に参加するように言う。

綾「痛い……痛い……やめて……!」

柔軟体操で何故か綾は、変な声を出していた。

陽子「変な声出すな。」

綾「私体硬いんだから、あんまり力入れないで！」

背中伸ばしをするがこれでも綾は痛がる。

綾「痛たたたた!!」

柔軟体操のはすが、陽子は関係ない関節技を綾に食らわせる。

綾「ギブギブ！これ柔軟じゃないー！」

陽子「うるさい。」

昴「陽子、程々にな。」

そう言いながら、昴は海翔と体操をしていた。こちらはどちらも柔軟は人並み、それ以上なので、スムーズに進んでいた。

一方、楓はウヴァから逃げ続けていた。その時、フェンスを飛び越え撒こうとしたが、すぐに見つかってしまった。ウヴァはフェンスを蹴飛ばして向かってくる。なんとか走っている楓は自販機を見つけ、バイクに変形させる。その間にウヴァは走って攻撃を仕掛けようとする。

楓「来るなー！」

するとウヴァはとてつもないジャンプ力で、車の上に飛び乗る。楓は出来る限りの速さで、距離を開けようとするが、ウヴァは車に飛び移って行く。そして、頭から緑の雷らしき物を放った。楓はそれを回避しながらバイクを走らせる。すると、前にアंकがいた。

楓「アंक！それにここ・・・」

偶然か、楓が走ってた場所は楓が通ってる高校の近くだった。とうとうウヴァは楓が乗ってるバイクに飛び乗り、首を絞める

楓「ぐっ！」

楓は職員用の門が開いていることに気づき、スピードがついた状態で飛び降り、学校に入った。

陽子「あれ？楓だ！」

アリス「ホントだ！」

体操中に楓が来たことに、クラスの人達は困惑を見せていた。

アंकはウヴァをバイクで吹き飛ばし、楓に続いてバイクに乗ったまま学校へと入った。

綾「ちよっと！バイクで入ってきたわよ!？」

当然、それは常識的には考えられない事なので、楓のクラスの人達は更にパニックになっていた。

楓「あいつ・・・言ってる場合じゃないか。アंक、メダル！」

楓がそう言うと、アंकはすれ違い様にメダルを渡した。楓はもう一度オーズドライバーを付け、オーカテドラルにタカトラバツタのメダルを入れ、オーカテドラルを傾ける。そしてオースキャナーを取り、メダルに通す。

楓「変身！」

タカ　トラ　バツタ　タ　ト　バ　♪タトバタ　ト　バ♪

陽子「なんだあれ!？」

楓が変身したことに、陽子だけじゃなく、クラスの人達も驚いていた。

そして、ウヴァが学校に入って来て、楓にこう言う。

ウヴァ「俺のメダルを勝手に使うな。」

その言葉を楓は聞かず、バツタの部分を光らせ、跳躍力を高める。そして楓は攻撃を仕掛ける為に高く飛び上がる。と同時にウヴァもジャンプし、互いに攻撃を仕掛けるが、ウヴァの攻撃が通り、楓が落ちてしまう。

それをすかさずウヴァが攻撃を仕掛ける。

ウヴァ「俺のメダル！俺のメダルを！返せ！」

そう叫び、オーカテドラルに攻撃を仕掛けるウヴァ。それを防ぎつつ、攻撃を仕掛ける楓だが、中々攻撃は通らない。だが、その中アंकの中で一つ疑問を浮かんだ。

アंक「(ウヴァの奴、もしかして知らないのか。)」

その中、楓はどんどん追い込まれる。すると、

アंक「ウヴァ！お前のメダル一枚はカザリが持ってたって聞いてるか！」

アंकがそう言うと、ウヴァはアंकの方を見た。

ウヴァ「なんだと！」

アंक「やつぱりな。あのカザリが言うはずもないか。持ってたんだよ。俺達は一枚取られた！」

そう。以前のカザリとの戦いで、カマキリのメダルを失った代わりに、カザリのメダル三枚を奪ったのだ。本当なら、それはウヴァの手

に渡っているはずが、それをウヴァは知らなかった。

ウヴァ「まさか、カザリの奴が・・・カザリの奴が・・・」

アंकの言葉に、ウヴァは動揺を隠せずに行った。その状況を見て、アंक「楓！今だ！」

と言い、チーターのメダルを楓に投げた。楓はそれを受け取る。

楓「なんかやり方がよろしくないような。」

オーカテドラルにチーターメダルとバツタメダルと入れ替えて再びオースキャナーを通す。

タカ トラ チーター

脚がチーターに変わったのに気づいたウヴァは再び楓の方を見る。楓は攻撃を仕掛ける体勢をとっていた。

ウヴァはもう一度楓に攻撃を仕掛ける。だが、チーターの足の速さを利用して、連続で蹴りを入れる。ウヴァはそれにより、軽く飛ばされる。そして楓は高速でウヴァとの距離を詰め、今度は勢い良く蹴りを入れる。するとウヴァの体から多少のセルメダルと二枚のコアメダルが出てきた。

アंक「!!」

それに気づいたアंकは腕と体を切り離し、コアメダルのみを掴んだ。そして体に戻って行った。

ウヴァはコアメダルを失った事で、カザリ同様肩の部分がセルメダルになって外れた。

そしてアंकはウヴァから奪ったコアメダルを見てこう呟いた。

アंक「揃ったな。三枚。」

ヤキモチと契約と昆虫コンボ

アंकはバイクに乗り、その場を去るかと思っただらアंकは楓にコアメダルを三枚投げてきた。

アंक「楓！」

楓はアंकが投げたコアメダルを受け取り、困惑の表情をみせた。

楓「え？これ・・・」

アंक「気は進まないが、お前一人でも変身できなきゃ面倒な事もあるってわかったからな。」

楓「確かに。てかお前どこ行くんだよ。」

楓はアंकの言葉に納得するが、アंकが何処かに行くつもりなのか聞いた。

アंक「わかったのはもう一つ、この装備もあった方がいい。」
バイクを叩きながらそう言うアंक。

楓「だろ？」

アंक「が・・・」

アंकは少し言葉を詰める。何故なら、この装備を使う代わりに回収したメダルの70%を渡せと言ったからだ。その条件にアंकは不満を抱いていた。

アंक「メダル70%も持っていかれてたまるか。タダで使えるようにしてきてやる。」

楓「おい！お前また物騒なことやらかすつもりじゃ・・・」

楓がまた物騒な事をするつもりではないかと思ひ、アंकを止めようとするが、

アंक「放課後つてやつになったらあのマンションに行け。そこにヤミーがいる。」

その言葉に遮られる。

楓「やっぱり知ってたんだな。」

その言葉を聞き、楓に放課後にもう一度あのマンションに行けとアंकが言う。楓は教室に戻る時、アंकにこう言う。

楓「とにかく無茶だけはするなよ！分かったな！」

そう言い、楓は教室に、アंकは鴻上の居場所を探しに行った。

一方、ウヴァはカザリの胸ぐらを掴んでいた。

ウヴァ「カザリ！お前よくも俺のコアメダルを！アंकから聞いたぞ！」

カザリ「何の事かわからないな。」

ウヴァ「とぼけるな！」

その状況に目もくれず、ガメルは椅子を使ってなにかを作っていた。ウヴァの激昂にカザリは冷静にこう言う。

カザリ「ウヴァ。アंकが昔からウソが上手いのを忘れた？騙されただよ君は。どっちを信じるのかは自由だけどね。」

カザリの言葉にウヴァの怒りは増す。カザリを投げ飛ばし、ウヴァ「俺のコアは何処だ!？」

そう叫びながらガメルが作った物を蹴飛ばした。

ガメル「俺の城が・・・」

メズール「落ち着きなさい。完全に復活するまで、私達に争つて暇はないはずよ。今私のヤミーが沢山のメダルを作ってるから、それを仲良く分けましょ。」

ウヴァ「フン・・・」

メズールの言葉にウヴァの怒りは少し収まる。

メズール「大丈夫。私の選んだ人間に間違いはないわ。」

視点はメダルを入られた女性に移す。

女性「もう買えない・・・これも全部なくなつて・・・この部屋にも住めなくなつて・・・それで・・・」

女性は自分が貧乏生活を送る事になると考えにたどり着き、

女性「そんな・・・そうなら・・・」

そう思うと女性は自分が買った服を守るかのように抱き抱えた。

時を同じくして、楓はクラスでも質問攻めを受けていた。

生徒A「さっきの怪物なんだよ!？」

生徒B「桐生君、攻撃受けてたけど大丈夫なの!？」

と、クラスメイト達はそう言う質問を出していた。

楓「大丈夫大丈夫！それに、関わったら皆も危ない目に遭うと思うし、ね？」

楓が深入りはダメだと伝えていると、

カレン「アリスー！」

楓「？」

カレン「アリスーキター！」

と言いながら笑顔で手を振っているカレンを見て、楓は、

楓「・・・誰？」

と思った。

綾「楓は初めてよね。彼女はアリスの友達のカレンよ。」

カレン「九条カレンと申すデス！」

楓「俺は桐生楓、楓でいいよ。よろしくカレン。」

カレン「よろしくデス！カエデ！」

綾「え？ちよつと、それ馴れ馴れしくない？」

楓とカレンのやり取りに、綾がそう言った。

楓「そうか？でも、下の名前で呼ぶのが普通になってるからな。」

アリス「カレン日本語上達したね。」

カレン「毎日勉強頑張ったデスよー。」

綾「カレンはイギリスで育ったの？ハーフにしては片言だけど。」

カレン「うん。普段はパパも英語で喋ってたから、アリスみたいに日本語ペラペラになりたいデス。」

忍「片言が良いんですよ！可愛いじゃないですか！」

アリス「わたしもまだまだデス。日本語難しいデスネ。」

昴「(わざとらしいよアリス。)」

陽子「そう言えばさ、ハーフの子って、日本名でも外国名でも通じる名前の子が多いよね。リサとかナオミとか。」

楓「ああ、確かに。」

カレン「パパが名付けてくれマシタ。漢字では、可憐な花の可憐と書くデス。」

ノートに可憐の漢字を書く綾。

綾「綺麗な名前。」

海翔「確かにピッタリだな。」

カレン「パパがつけてくれました。」

忍「きつと可憐な女の子に育つようにつて願いを込めて付けたのですよ。」

アリス「シノ！私は？」

忍「アリスは、リスのように小さく可愛らしくと言う意味ですね。」

アリス「リスかあ。そっかー！」

綾「あ、リス！じゃないわよ。」

楓「それとアリスはハーフじゃないだろ。」

するとカレンは、忍達を指差した。

カレン「カエデ、スバル、カイト、ヨーコ、シノブに、えつと……」

綾「綾よ。」

カレン「アヤヤ？」

綾「一文字多いわよ。綾よ。」

カレン「……アヤヤー！アヤヤー！」

パァーと明るくなったカレンはアヤヤと連呼した。

陽子「アヤヤー!!」

カレン・陽子「アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤー！」

綾「や、やめて……」

カレンと悪のりした陽子により、綾はやや顔を青ざめている。

忍「カレン、私の事はしのと呼んで下さい。仲良しのあだ名です。」

アリス「あ……」

急にアリスが落ち込んだ。

カレン「シノはニンジャ？壁歩ける？」

陽子「あー、忍（しのび）な。」

忍「それはちよつと……」

カレン「えー？出来ないデスカ？」

アリス「そんな事無いよ！シノは凄いから何でも出来るよ！」

全員「え？」

突然のアリスの言葉に楓達は驚いた。

アリス「さあシノ！壁を歩いて！」

忍「無茶振り!?!」

綾「どうしたのよアリス？さっきから様子が変よ？」

アリス「え？変ってどんな風に？」

陽子「アリスはカレンに妬いてるんだよなー。」

アリス「あ！」

忍「そうなんですか？」

アリスの心情を聞いた忍はアリスにそつと微笑んだ。

忍「確かにカレンは身長が平均的ですし、アリスより喋り方が外国人らしくて魅力的です。でも、アリスにはアリスの良い所がいっぱいありますよ！自身持つて下さい！」

だが忍はアリスの良い所を一言も言っていない為アリスは落ち込んだ。

綾「全くフオローになって無いわしの。」

楓「アリスの魅力もちゃんと言わないと。」

そして、放課後になり、楓はヤミーがいるマンションに向かった。

楓「さてと、これだけ大きいと、何処から仕掛ければいいのかやら。」

楓はマンションの大きさを見て、そうボヤいていた。すると楓は、近くに時々助けってくれる氷室翔琉がいた。

楓「あれ？えつと、氷室君？」

楓の言葉に翔琉は手招きで、楓を呼んだ。

翔琉「ここの上層階のリアルタイム映像だ。」

そう言いながら翔琉はモニターの映像を変える。

翔琉「場所は2805号室。住人は山野春だ。こんな化け物がはびこっていいわけない。」

すると、空からタカカンドロイドがバツタカンドロイドを翔琉の手元に落とす。そしてバツタカンドロイドは缶の状態になり、翔琉はそれをポケットにしまった。

翔琉「止める為にも、素直に我々の協力を受け入れろ。」

楓「いや、俺はそのつもりだけど・・・」

自分は協力するが、アंकがその気にならないからか、少し言葉を

詰まらせる。すると翔琉が、

翔琉「アंक・・・だったか。あんなグリードに口を押さえ込まれるなんて。この街を守れるか。」

その翔琉の言葉に楓は驚きの表情を見せた。その言葉だけを放ち、翔琉はその場をバイクで走り去った。

楓「この街・・・かあ。大きく出るねえ。ま、俺は、目の前の事から。」

楓はそう言い、マンションの中へと入っていった。その時、見る限りセレブの人とすれ違った。その人がヤミーの親だとは知らない楓はそのまま通り過ぎ、目的の部屋へと着く。

楓「2805号室・・・ここか。」

ピンポーン

楓「・・・留守？」

反応がなかったため、そう呟いた。そのあと楓は、

楓「マジかよ。」

とだけ言い、その場を後にした。

楓「どうしよう。このままじゃ。」

楓がそう言い、これからどうするか考えていると、

忍「楓君！」

楓「え？」

そこには、楓を追いかけていた忍達がいた。

楓「なんで・・・」

陽子「当然だろ！楓、この前、怪我してたのにあんな怪物と戦ったんだろ？」

楓「え？陽子がなんでそれ知ってるの？」

陽子「しのに教えてもらった。」

アリス「それで、なんでカエデはここに？」

楓「まあいいか。実は・・・」

楓はあそこにヤミーがいることを話した。そして、降りる瞬間、すれ違った女性がヤミーの親だと降りた瞬間気づいた。そして、その手には大量の買い物袋が握られていた。

カレン「その人、買いすぎだと思ひマス！」

状況を聞いたカレンは楓にそう言った。

楓「仕方ないよ。彼女はそれが欲しいんだろうし。」

綾「でも・・・」

楓「誰だつてそうでしょ。」

時を同じくして、鴻上はケーキを箱に隠し、それをリボンでくくつた。そんな時、

里中「会長、お客様が・・・」

その客とは遂に鴻上の居場所を突き止めたアंकだった。それに気づいた鴻上はこう言う。

鴻上「ようこそアंक君。ここは非公開とはいえ秘密ではない。遅かれ早かれ情報は掴むと思つていたよ。」

鴻上はハハツ、と笑い言葉を続けた。

鴻上「で、今日はいい返事を持って来てくれたんだね？」

アंक「そう見えるか。」

そう言いアंकは右腕を戻していた。

一方、楓は忍達に話をしていた。

楓「俺、父さんから色々聞いてきたけど、何も欲しくない人なんていないよ。お金じゃなくても、物とか色々。そう思うのが、生きるのに必要な国もあるつて。だから、欲しいって思うのは、そこはいいんじゃないかな。」

楓のその言葉に、忍達は楓を不思議そうにみる。

そして、鴻上達の方は契約の事を話していた。

鴻上「いいかねアंक君。私も君も欲しいのはメダルだ。その為の

give and take! 何処に問題がある。」

アंक「致命的だ。俺はtakeは好きだが、giveは嫌いだからな。」

アंकは右腕を動かしながらそう言う。

一方、その言葉の後に楓は続ける。

楓「大切なのは、その欲しいって気持ちはどうするかだと思う。」

と、楓は近くに流れている川を見つめながら言う。

その時、ヤミーの親の女性はパソコンでネットショッピングをしていた。

女性「これ・・・」

カチツカチツと、商品を購入していた。

女性「これも・・・これも」

その女性の欲でセルメダルが貯まっていく。そして買える限界が来たことに気づいた女性は不満気にパソコンを閉じる。

すると、ヤミーの卵は女性のすぐそこまで迫っていた。

女性「キヤーー!!」

その悲鳴と同時にヤミーの卵が孵化し、大量のヤミーが出て来てしまった。そのヤミーは女性の部屋の窓を割って下へと降りていた。

楓「!?!」

窓が割れた音に気づいた楓はマンションの方を見て、

楓「しの達はここに」

とだけ言い、楓はオーズドライバーを着け、アंकから貰ったタカメダル、トラメダル、バツタメダルをはめる。そして、オーカテドラを傾け、オースキャナーを通す。

楓「変身!」

タカ トラ バツタ タ ト バ♪ タトバタ ト バ♪

楓は女性の部屋の元へと走り出した。

一方の女性はヤミーの大群から逃げようとしていたが、上手く走れていなかった。

楓「大丈夫? さあ早く!」

そこに楓が駆けつけ、女性をなんとか立たせそこから離れる。

視点はアंक達に変わる。

鴻上「なるほど・・・つまり君は私を消して、メダルシステムを奪う。takeだけしたいというわけか。」

アंक「それが一番手っ取り早い。」

鴻上の言葉にアंकは肯定する。

鴻上「分かってないなあ君は。そうだろ里中君。」

里中「はい。それは無理ですから。」

アंक「ハツタリなら無駄だぞ。」

アंक「ハツタリなら無駄だぞ。」

翔琉『会長、ヤミーです。オーズが既に戦闘に入りました。』

翔琉の報告に鴻上は、

鴻上「ほう・・・これは・・・ちょうどいいアंक君。実戦で説明しよう。」

と言い、鴻上はモニターに映るヤミーの大群をアंकにみせた。

それを知らずに楓は女性を救出し、忍達の元へと戻り、こう言った。

楓「しの。悪いんだけど、この人よろしく。」

カレン「え!?カエデデスか!?!」

楓「ん?ああ、そうそう。じゃあその人頼むね。」

驚いた様子のカレンに楓は肯定しながら女性の身を忍達に任せた。

楓「うわあ。多いなあ。」

ヤミーの大群を見て、楓はそう呟く。すると、楓の近くに自販機があった。

楓「よし!バイクで蹴散らしますか!」

そう言い楓は自販機の元へと走る。そして、セルメダルを入れ、バイクに変形させようとするが、

楓「ん?あれ?なんで?え?何で変形しないんだよ!」

それに反応しなかった事に驚き、楓は何度もボタンを押すが、全く反応がない。

楓「あれ?ちよつと!おい!」

それをモニターで見ていたアंकはこう言った。

アंक「なにやっつてんだ。」

鴻上「私の意思だ。」

アंक「なに?」

鴻上「私の意思一つで全てのメダルシステムはさせれば作動しなくなる。私が死ねば、その途端に、全ては屑鉄だ。」

鴻上のその言葉にアंकは少し目を見開く。それを見た鴻上は笑

いながらこう言う。

鴻上「さあ、道は一つだ。今後手に入れたメダルの70%を渡す事、そうすればメダルシステムは使い放題だ。」

アंकは少し黙り、こう言った。

アंक「・・・40だ。」

鴻上「70。」

アंक「そんなに渡せるか。」

アंकはセルメダルを渡す事を決めたが、こちらが得になるようにそう言うが、鴻上は首を振り、

鴻上「70。」

と言った。

鴻上「オーズの戦いが有利になれば、得をするのは君だ。」

と続けてアंकに言う。それに対しアंकは、

アंक「50。」

と言うが、

鴻上「70♪」

と、体を後ろに向けながら言った。その行動にアंकは拳を握りしめる。

そして、楓は自販機の上に跨がり、それを叩きながら叫んでいた。

楓「おい！変わって！はい変わった。うう・・・おい！変われよ！もう！」

楓のその言葉に遂にアंकは、こう言った。

アंक「60だ！これ以上はない！」

鴻上「ハッピーバースデー！」

アंक「クツ・・・」

無理かと思いいアंकは歯を食いしばる。

鴻上「私達の契約。」

そう言い鴻上は箱の紐を解き、箱を開ける。すると、そこにあるケーキには、60%と書かれていた。

アंक「貴様・・・最初から。」

それを見てアंकは鴻上を睨みながらそう言う。

鴻上「では手付け用に前払いとして、セルメダル100枚。」
アंक「持ってけ！」

そう叫びアंकは鴻上の要求通りセルメダル100枚を渡した。
それを確認した鴻上は指を鳴らす。

一方の楓はバイクに変形しない自販機に乗っていた。すると突然、
自販機はバイクに変形する。

楓「うおっ!？」

それを確認した楓は、

楓「良かった。」

と、安堵の声を漏らしながらバイクを走らせる。

その近くで翔琉は自販機をリモコンで操作していた。こちらも操
作ができることに安堵の息をついた。

一方、女性は忍達にこう問い掛けた。

女性「あれ何？」

忍「よく分かりませんが、人の欲望から生まれるらしいです。」

女性「人の・・・じゃあ、あれは私の？」

女性は自分の部屋から飛んでいく服を見ながらこう呟いた。

女性「私・・・あんなのにすがってんだ。・・・うちはお金持ち

だけど、セレブなんて言えない家で、だから自分に自信が持てなく
て・・・高い物を買ってればって思っ、それでもつとつとて・・・」

忍「・・・少し分かります。」

女性「・・・え?」

忍「私、小さい頃から、ずっと一緒にいた男の子がいるんです。そ
の人は、いつも私の面倒を見てくれていて。その人が急に・・・こう
言う事に関わる事になって・・・」

忍は楓の名前を言わずに、そう言う。それに続けて、

忍「あなたがお洋服なら、私は彼にすがってました・・・」

綾「しの・・・」

忍はバイクで走り去って行くアंकを見つめる。それをしばらく
見つめた後、

忍「欲しいって思うのは悪くないです。大切なのは、その気持ちを

どうするかです。」

忍「もうすがつてるままじゃダメだと思えます。」

そう言い、女性の手を握り、こう言った。

忍「少しずつでも、ちゃんとしていかないとダメだと思えます。」

女性「・・・うん。」

忍の言葉に女性は手を握り返しながらそう言った。

女性「・・・私は大丈夫だから、あなた達は行って。」

忍「え？」

女性の言葉に忍は少し戸惑いを見せる。

女性「あの人、あなた達のお友達なんですよ？」

忍「・・・分かりました。行きましょう。」

陽子「よし！」

カレン「イエス！」

忍達は楓の元へと向かった。

アंकがヤミーの元へとバイクで向かっている間、楓はバイクでヤミーを地上へ落としていたが、途中でバイクから落ちてしまう。ヤミーが所々噛みついていたので、楓は脚と腕でそれを引き剥がす。楓はアंकを見つけたので、アंकに近づきこう言う。

楓「これ、キリがない。ねえアंक。コアメダル三枚揃う。コンボってやつ?どうなんの?」

アंक「とんでもない力だ。お前、タダじゃ済まないかもな。」

楓「へえ・・・」

そう言い、楓はヤミーの大群を見る。そして、こう言った。

楓「じゃあ・・・やってみますか。」

そう言った楓にアंकはメダルを取り出し、楓に渡した。

アंक「吹っ飛ばされてメダルなくすなよ。」

楓はアंकにそう言われ、二枚の緑のコアメダルを受け取る。

楓「わかった。」

その言葉を了承した楓は走り出し、オーカテドラルのタカメダルとトラメダルを抜き、右にクワガタメダル、真ん中にカマキリメダル

を入れる。すると、三枚のメダルが光出した。そして、もう一度オー
スキャナーを通した。すると、今までのメダルチェンジとは違った現
象が起きた。

クワガタ カマキリ バッタ

♪ガ タ ガタガタキリバ ガタキリバ♪

その現象とは、タトバコンボと似たような歌が流れ、クワガタの頭、
カマキリの腕、バッタの脚の、ガタキリバコンボが完成した。

綾「あれが、コンボ・・・」

忍達は楓の元へとたどり着き、綾は緑一色になったオーズをみてそ
う言った。

すると突然、

楓「うおおー!!」

楓が雄叫び?を上げる。すると、その衝撃波がアंक達にも届く。
アंकはたじろぎ、忍達は少し後退りをする。

その間にも大量のヤミーが楓達へと向かっていた。

対する楓はヤミーの大群の元へ走り出す。すると、大量のオーズの
分身が現れた。

一人はカマキリの腕の力を使い、一人は足で蹴飛ばしたりと、次々
とヤミーの大群の数を減らしていく。

陽子「スゲエ・・・」

その光景に陽子は呆気にとられながらもそう言う。

ヤミーの大群は集結し、巨大な怪物へとなる。

楓（本体）はオースキャナーを取り出す。すると、分身も続けて取
り出し、オーカテドラルに通した。

スキャニングチャージ

楓「はあああああ!!」

分身「はあああああ!!」

ヤミーは楓へ光線を繰り出す。楓と分身は高くジャンプしてそれ
を回避し、巨大なヤミーの中へ入って行く。一人は腕で切り裂き、一
人は足で蹴りを入れたりしている。そして、それを受け続けたヤミー

は所々膨張？し、爆発した。その時、大量のセルメダルが落ちる。そして楓はヤミーの爆発と共に落下し、なんとか着地し、オーカテドラを変身解除の位置まで戻し、変身を解く。楓は息を切らし、アंकクを見ていた。

楓「俺、戻った？ちゃんと一人になっ・・・」

そう言う前に楓はその場に倒れてしまった。

アリス「カエデ!？」

忍「大丈夫ですか!？」

忍達が驚いている中、楓を見てアंकクはこう呟く。

アंकク「さすがにとんでもなかったなあ。」

ヤミーの親だった女性は今はアルバイトをして、少しずつ自立しようとしていた。

一方、楓は学校に行く準備をしていた。

楓「アंकク！今から学校行くから、留守番よろしく！」

アंकク「フン！」

楓の言葉にアंकクは鼻息一つで返す。クワガタとカマキリのメダルを見る。

アंकク「(少しヤバいか・・・コンボは・・・)」

そう思っていると知らない楓はいつも通り 学校へと向かった。

おつかいと悩みと慣れ始め

その後リビングで朝食を食べる2人。アリスは和食、忍は洋食の朝食を食べてている。

アリス『大宮 忍 あだ名はシノ。シノはおっとり優しくして大和撫子の鑑だよ。』

すると誰かがアリスの頬を突つついた。

勇「良いなく。色白もち肌。」

忍「お姉ちゃん今日仕事でしたっけ？」

勇「そー。午後から。」

アリス『イサミはモデル。二人は姉妹だけど、あんまり似てない。こんな感じ!』

アリスは勇と忍を尾山人形とこけしに見立ててニコニコしている。

アリス・忍「行ってきます。」

楓「おはよう。しの、アリス。」

アリス「おはようカエデ。」

忍「おはようございます。」

楓「じゃ、行きますか。」

アリス『桐生楓。あだ名はカエデ。カエデは色んな人に優しい。シノとは幼馴染。たまに・・・』

楓「なあしの。休日どっか遊びに行く?久しぶりに。」

忍「え?でもこの前行きましたよね?」

楓「ヤミーとか出てきたからノーカンみたいなものだよ。それに、色々心配させたお詫びとして、な?」

忍「／／／」プシュー

楓の行動と言動に忍は顔を真っ赤にしている。

アリス『ちよいちよいシノを口説いてる。あれって無自覚なのかな?』

いつもの場所に楓達が向かう。

忍「おはようございます綾ちゃん。」

そこには綾がいた。

アリス「おはようアヤ。」

綾「おはよう。」

忍「陽子ちゃんは？」

綾「日直で先行ったわ。」

忍「昴君達は？」

綾「昴達も先に行ったわ。」

忍「すみませんお待たせして。」

綾「早く行きましょ？遅刻しちゃう。」

アリス『小路綾。あだ名はアヤ。アヤは頭も良くてしつかり者。だ
けど・・・』

忍「綾ちゃん！タイツ履き忘れてますよ!？」

綾「え?・・・あ!!」

下を見ると、綾はタイツを履いてなかった。

忍「わ、私の靴下を!」

綾「しのが裸足になっちゃうじゃない!あ!確か・・・あった!」
カバンの中を探ると、中に運良くタイツが入ってた。

アリス『時々すぐくおつちよこちよい。』

昴「来た来た。遅いよ。」

アリス『八神昴。あだ名はスバル。スバルはクールでしつかり者。
面倒見がいい。』

楓「おはよう、今日早いな。」

昴「フェイに手こずったから。もう行ってるかなって思ったけど。
フェイ「だから焦らなくていいって言ったのに。」

アリス『八神フェイ。あだ名はフェイ。フェイは好奇心旺盛。いつ
も本を持ってきている』

海翔「遅かったな。」

アリス『瀬戸海翔。あだ名はカイト。カイトはいつも無表情だけ
ど、周りをよく見てる優しい人。』

陽子「おっはよー!」

アリス『猪熊陽子。あだ名はヨーコ。ヨーコは明るくて元気。』
海翔「朝食ってこなかったのか？」

陽子「え？食べたけど？」

昴「食べたのに？」

陽子「？」コテン

楓「いや、その「何か？」みたいな顔されても。」

アリス『いっぱい食べるのはいいことだよね。』

さくら「進路希望の紙、明日までですよ。」

アリス『ミス・カラスマは担任で、英語の先生。シノの憧れの人。』

さくら「昨日のテスト返します。」

忍「先生コツチ見て下さい！」

アリス「憧れ？」

楓「もはやファン的一种だな。」

さくら「アリスさんすごいわ。100点よ。」

アリス「フツ。ドヤア」

さくら「見てここ、特別に花丸上げちゃいましたー。しかも旗付き
！」

アリス『ちよいちよい子供扱います。』

忍「質問です。先生はどうして教師になろうと思ったんですか？」

さくら「先生は・・・そうねえ。気づいたらなってたわあ。その場のノリ？」

全員「(参考にならない・・・)」

さくら「でも、学生時代が一番楽しいわよ。学生で大変な事と言え
ば、睡魔との戦いくらいだものね・・・」

そう言ったさくらだが、本人も目が虚になっていて、いかにも眠そ
うだった。

楓「先生今も眠そうに見えますけど。」

さくら「(眠いわあ)」

陽子「んー。学校の先生って頭が良くないとなれないよね。」

綾「まあね。」

アリス「あっ！シノもう書いてるよ！」

楓「まあしのだし。当然か。」

忍「はい。私、小さい頃からの夢があるので。」

アリス「何て書いたの？」

忍「通訳者です！」

陽子「ああ、宇宙人の？」

忍「外国人ですよ！」

海翔「宇宙人の通訳なんて無理だろ。」

楓「いや、そこを真面目に返すのは。あそーいや、しの最近アリスに英語習ってるんだっけ？」

忍「はい！心配ご無用ですよっ！」

陽子「おーっ！それじゃ、アリスの英語通訳してみて！」

忍「いいですよー。」

アリス「It、s been a few weeks since I arrived in Japan. And I am getting used to the life here.」

忍「えつと・・・私は・・・」

アリス「It、s great I could come to Japan. Japan is such a suitable place for...」

忍「略す前にどんどん喋らないで下さいー！」

アリスの口を抑えながら忍はそう言った。

5人「えー!?!」

驚きの声を上げる中、楓は少し考えた後、

楓「アリス、今言おうとしたこともう1回全部言ってみて。」

アリス「うん。It、s been a few weeks since I arrived in Japan. And I am getting used to the life here. It、s great I could come to Japan. Japan is such a suitable place for living. And everything is just so kind.」

アリスはもう一度英語で喋った。すると、

楓「オーケー。『日本に来て数週間が経ちました。生活にも慣れて

きました。私は日本に來られてとても嬉しいです。日本はとても住みやすいです。周りの皆は優しいです。』で合ってる?」

アリス「凄いよカエデ!全部合ってるよ!」

見事に通訳した楓である。本人は少し満足気だった。

陽子「楓英語分かるの!?!」

楓「まあ、父さんから色々聞いてきたし。外国関連なら少し自信はあるよ。」

忍「そんな・・・」

シヨックを受けている忍。

昴「まあそう落ち込まないで。けど、楓のお父さん関連で覚えたなら納得だね。」

アリス「?どういうこと?」

昴「楓のお父さんは今世界の色々な国をまわってるんだよ。」

アリス「え!?!すごいよ!」

楓「まあ将来俺もまわりたかって思ってるけどね。さすがにこれには書けないよ。」

と、楓は言った。

アリス「進路なんて考えたこともないよ。」

忍「そんなに悩まなくても大丈夫ですよ。自分がどうなりたいか考えればいいんです。」

アリス「(シノすごい)」

アリスは忍に憧れの視線を送り、忍にこう言った。

アリス「はつきりとは決まってるけど、人の役に立てる人間になりたいな。」

忍「なるほど。少し貸して下さい。」

アリス「うん。」

忍「つまりこういうことですね。」

紙には「人間」と書かれていた。

アリス「大事な部分か抜けてるよ!?!」

楓「アリスは今も人間だからな。」

アリス「ヨークは決まってるの?」

陽子「んー、そうだなあ。私は、アイドルになって武道館でライブかな。」

昴「おい。」

アリス「(すごいーそんな大きな夢を)」

またもや憧れの視線を送るアリス。

アリス「ヨーコならきつと叶うよ！わたしも応援するからね！」

陽子「え？嘘だよージャパニーズジョーク！そこは「むりやろー！」って突っ込むところ。」

アリス『日本のジョークレベル高いよ。』

陽子「綾は「お嫁さん」とか書きそうだな。」

綾「かつ、書かないわよ。」

といいながら消しゴムを使う綾。

陽子「消してんじゃん。」

綾「消すわよ消しゴムだもの！誤字を消すための道具だもの！」
といいながら綾はダンツと机を強く叩きながらこう叫んだ。

綾「もうっ！だつたらなんて書けばいいの!?!」

海翔「開き直った。」

綾「はあ…理想のプロポーズとかなら悩まずに書けそうなのに。」

陽子「どうした？乙女モード全開だな。」

綾「私は男らしくストレートに言うのがいいと思うのよ！」

陽子「(どうしよ…絡みづらい) あ、だつたら。」

すると陽子は綾の顎をクイツと少し上げ、

陽子「俺の嫁になれ！」とか？」

と、いつもと違う声で言った

綾「やめてよバカ！」

陽子「いてえ！」

海翔「ハア」

顔を真っ赤にして慌てる綾に海翔はため息をついた。

綾「しのの髪って綺麗なストレートよね。」

楓「確かに。」

アリス「サラサラだよねー。」

忍「そうですかー？アリスの髪の方が素敵ですよー。」

フェイ「確かに、地毛が金髪なのは興味深い。」

と、フェイは興味ありげな視線を向ける。

綾「あ、でも会った時から思ってたけど、ちよつとトイプードルの垂れ耳に似てるわよね。」

海翔「なんでトイプードル？」

忍「黒かったら昆布っぽくないですか？」

綾「そんなヌメつとしてないわ！もふもふよ！」

アリス「シユン」

それに対し少しアリスはテンションが下がってしまう。

昴「当の本人はサラサラがいいみたいだけど。」

アリスの気持ちに察した昴であった。

授業中、

生徒A「はい、陽子から。」

『さつき髪の話してたじゃん。言いそびれたんだけど、綾、今日後ろの寝グセすごいよ！』

先生「次の問題を小路さん……」

綾「寝グセを直してからでいいですか！」

海翔「いや、何故今直す。」

髪をほどいてくしを取り出す綾に突っ込みをいれる海翔。

先生「で、では桐生君に……」

楓「スースー」

フェイ「寝てるね。」

授業が終わった後、いつものグループで集まっていた。

陽子「楓が寝るなんて珍しいな。」

楓「なんかさつき異常に眠くなって。」

綾「(もしかして……)楓、何か心当たりない？体力を使いすぎたとか。」

楓「うーん……もしかしてコンボ？」

腕を組み、少し考えると、その結論にたどり着いた。楓はヤミーとの戦いで、ガタキリバコンボを使用した後、その場に倒れてしまった

のだ。

綾「やっぱりね。」

昴「コンボ?」

陽子「ああ!あの分身使ったやつか!」

フェイ「すまないが、僕らは何か分からない。説明してもらえないかな?」

楓「ああ、コンボは・・・」

楓は昴達に同じメダル三枚を集めることで発動するコンボ、それによつて強力な力が発揮されることを説明した。

昴「なるほど・・・で、楓は大丈夫なのか?」

楓「うん。いまのところは。」

そして放課後になった。

陽子「かーえろ。」

忍「あ、帰りにスーパーに寄つてもいいですか?夕飯のおつかいを頼まれているんです。」

陽子「いいよー。今日のご飯はなに?」

アリス「林さんのご飯だよー!」

とアリスはニコニコしながら答えた。

楓「それつてハヤシライス?」

アリス「そうだよー。」

陽子「なんで訳した?」

忍「しかも今日のご飯はカレーライスですしね。」

そしてスーパーに向かっている時、

松木「あら、忍ちゃん、楓君こんにちは。」

楓「こんにちは。」

忍「こんにちはー。」

陽子「誰?」

忍「お向かいの松木さんです。」

松木「アリスちゃんもこんにちは。」

アリス「コニチハ。」

と、アリスはカタコトで挨拶した。

忍「アリスはああ見えて人見知りですので、慣れてないと日本語を話せないフリをします。」

楓「特に大人の人には顕著なんだよ。」

綾「まだ日本に慣れてないのね。」

陽子「こういうのは経験がものを言うんだ。よしっ、今日のおつかいはアリスに任せよう！」

アリス「えっ!？」

陽子の提案にアリスは驚いた。

忍「いいですね!では、私達は通行人のフリをして見守りしましょう。」

アリス「なにこの距離感!？」

少し距離を空けられたことに動揺するアリス。

アリス「わー!日本のスーパーは初めて入るよ。」

忍「そうでしたっけ？」

陽子「何が初めてだっけ？」

忍「アリスが・・・大きな声では言えませんが。ゴニョゴニョ」

陽子「アリスがまさか!」

忍「まさかの。」

アリス「なんで言いよどむの!？」

楓「何の話してるんだろ？」

忍「これが買い物メモです。書いてあるものをカゴに入れてくださいいね。ちよっと読みにくかったので、アリス用に書き直しておきました。」

アリス「あ、ありがとう。(シノ優しいなあ)」

アリスはメモを見るが、それには字ではなく絵で書かれていた。

陽子「あれっからすちゃん!学校は?」

さくら「見つかっっちゃった。まだ仕事が残ってるんだけど、ちよっとおやつをね。」

陽子「こんな時間に食べたら太るぞー!」

さくら「大丈夫よ。お豆腐だから!」

陽子「(豆腐って、おやつ・・・?)」

綾「(わざわざ醤油まで……)」

さくらの言動に疑問を抱く陽子と綾。その後、綾もカゴを手に持っていた。

陽子「綾も買い物？」

綾「今日当番だし、ついでに買って帰るわ。」

陽子「すげーなー。あ、今日はハンバーグがいいなー！」

綾「あのねえ。」

買い物をする綾は陽子の言葉に呆れるが、

女性「今日何にするー？」

男性「そうだなあ。」

夫婦が買い物をしているのを見た綾は

綾「私とあなたはただのお友達だからっ！」

陽子「なんだ突然!？」

奇妙な言動を取り、陽子は完全に戸惑っていた。

そして、

海翔「ジーー」

昂「海翔？」

海翔「……なんでもない。」

昂「(そういうことか。)」

海翔が少し不機嫌そうに歩いて行くのを見て、昂は何かを察した。

一方、

楓「えーつと。」

忍「楓君もお買い物ですか？」

楓「うん。今日母さん帰り遅いし。あとコンビニでアイス買わない

と。」

忍「アंकさんですか？」

楓「うん。……勇さん大丈夫だった？」

忍「はい。今日はいつも通りでした。」

楓「……そっか。よかった。」

安堵の表情を見せる楓だが、

忍「ムスウ」

楓「どうかした？」

忍「なんでもないです。」

楓「？」

忍が頬を膨らましていたのを見た楓は彼女に問い掛けるが、不満気に返されたので、余計わからなくなる楓だった。

アリス「無事に全部買えたよー！」

忍「やりましたねアリス！」

陽子「今日の買い物で随分経験値あがったぞ！もうなんでも買えるな！」

アリス「例えば？」

陽子「株!!」

昂「こら。」

陽子「あははは、言ってみただけー。」

アリス「かぶ・・・？」

楓「アリスにはまだ早いことかな・・・」

食べ物の方を持ってきたアリスに若干呆れながらそう言う楓であつた。

忍「せっかくの日本です。一人で好きな所に遊びに行つていいんですよ。」

アリス「えーっ、シノと一緒にいいよー。」

忍「アリス・・・」

完全に喜んでいる忍。

昂「そういえば、アリスさんの留学理由聞いてないような。」

海翔「確かに。なんでだ？」

アリス「シノと同じ高校に行きたかったからに決まってるYO！」

綾「そんなお手軽な理由でいいの!？」

陽子「どんだけ愛されてるんだよしの！」

二人はその言葉に驚きを隠せなかった。

アリス「今日はおつかいさせてくれてありがとう。大分日本に慣れた気がするよ！」

綾「(おつかいで・・・?)」

アリス「実は日本に来てから苦手なものあつたけど、今なら心を開けそう。」

陽子「苦手な人でもいるのか？」

楓「あ、もしかしてあのワンちゃん？」

楓が言うワンちゃんとは学校へ向かう途中にいる柴犬でかなり凶暴なのだ。アリスはその犬と対峙？する。

忍「アリスいけません！その犬はいくら日本に慣れても、飼い主以外に慣れることはありませんよ！」

楓「え？俺なつかれてるけど？」

忍「へ？」

犬「ヴーッ」

楓「おおよしよし。よーしよし。いい子いい子。」

犬「クーンクーン。」

アリス『カエデはやっぱいろいろすごいなー。』

忍「ただいまー。」

忍母「アリスちゃんどうしたの!？」

アリスは先程の戦い？でぼろぼろになっていた。

忍「ちよつと不毛な戦いを・・・あ、これおつかいです。」

忍母「ありがとう。あら？これってシチューのルー？」

アリス「言い忘れてただけどわたしカレー得意じゃないんだよ。辛くて・・・」

忍「買い慣れてる!!」

やはり色々と子供なことに驚いた忍である。

アリス「あ、そういえば、カエデもおつかいしてたけど。」

忍母「ああ、また紫音さんがいないのね。大丈夫よ。楓君色々できるから。ホントに早くくつついてくれないかしら〜♪」

忍「お母さん!!」

忍母「あらあら。」

そんなこんなで大宮家が騒がしい中、

楓「フーンフーンフーン♪」

鼻歌を歌いながら料理を作っている楓であった。

ある日、カレンは忍達にある相談をしていた。

カレン「実は、クラスの子と仲良くしたいけど、上手く出来ないのデス・・・」

カレンはA組で、忍達がB組のため、カレンはクラスに友達がいな
い状況だった。

海翔「それはまあ、しょうがないだろ。」

陽子「まだ転校して来たばかりだしな。」

忍「外国の方ってだけで、話し掛け辛いのかもかもしれません。カレンはハーフですけど、見た目は外国人オーラがバンバン出てますし。」

アリス「あれ？シノ、私は？」

忍「動物に例えると、鹿の群れの中にライオンが居るみたいで」

忍「に、逃げなきゃ・・・」

綾「しの、その例えは間違ってる。」

楓「もつといい例えがあるだろうに。」

忍「あ！そう言えば、綾ちゃんも転校経験者なんですよ。」

陽子「中一の時にこっちに引っ越して来たんだよな。」

綾「う、うん・・・」

カレン「Oh！先輩デース！クラスの子と仲良くなれるアドバイス
お願いシマース！」

綾「そ、そうね・・・一番大切なのは、空気を読む事！」

カレン「カザミドリデスね！明日持ってマス！」

綾「風じゃないわ。空気よ。」

中学の頃、綾は席に座って終始無言だった。

忍『大宮忍って言います。』

そんな綾に最初話し掛けて来たのは忍だった。

忍『綾ちゃんって呼んでも良いですか？』

綾『え、ええ、お好きにどうぞ。』

ギクシヤクしながら答える綾。

忍『学校、案内させて下さい！一緒に行きましょう！』

綾『お、お気遣いなく！先生に校内の地図貰ってますので！』
この場が静まり返ってしまった。

綾『あ、あの、別に嫌だとかでは無くて・・・』

綾「うゝつ、古傷が・・・」

その事を思い出した綾は少し顔が青ざめていた。

忍「綾ちゃん、どうしたのですか？」

綾「ごめんなさい、全然参考にならなくて。」

陽子「そうそう。学校に慣れるまで、ずっと私の側に居てさ。」

陽子「何かもう、捨てられた子犬状態で。」

綾「嘘よ！デタラメ言わないで！」

陽子「本当だろ？」

忍「2人は仲良しさんなんですよ。」

カレン「分かりマース。」

昴「今考えたら、海翔だつて似たようなものだったよな？」

海翔「・・・なんで今俺の話題になる。」

カレン「カイトも転校生デス？」

海翔「いや違う。」

昴「海翔つて普段表情を顔に出さないタイプだから、中学の時、色んな人から毛嫌いされてたんだよ。」

生徒A『あの人、いつも無表情だから嫌よね。』

生徒B『なんでいつもあんななんだよ。』

海翔『・・・フン！』

くだらないと言わんばかりの鼻息を出す。

楓『ああいうの気にしなくていいから。』

そこに寄ってきたのは楓だった。

海翔『は？どうした？』

楓『ん？だって、ああいうのは・・・』

海翔『そこじゃない。』

楓『？』

海翔『お前、なんで俺みたいなの奴に話しかけるんだよ。ほっとけばいいだろ。』

海翔は自分みたいなのに話しかけるのかという雰囲気でも問いつける。

楓『うくん。そうだなあ。なんか君とは仲良くなれそうだったからかな。』

海翔『・・・！』

その言葉に海翔は少し驚いた表情を見せる。

楓『まあ、俺の勘だけ。』

昴『楓。』

楓『ああ、昴。』

二人の元に来たのは昴だった。

昴『ん？その人誰？』

楓『あつ！えつと・・・』

海翔『・・・瀬戸海翔。海翔でいい。』

軽い自己紹介をする海翔だった。

陽子『なんか楓らしいな。』

海翔『お節介つてもんじゃなかったがな。』

アリス『でも、カエデは昔から色んな人に優しくかったんだね。』

楓『そうでもないよ。』

その後、カレンは烏丸先生を観察していた。周りには女子生徒達が先生に質問していた。次は忍を観察忍は綾と陽子と三人で会話をしていた。

忍『うっかり12時間寝ちゃいました。』

綾『寝過ぎよ。』

その後カレンは中庭のベンチに座って鏡で自分の顔を映してた。

忍「何してるんですかカレン？」

そこに忍が声を掛けた。

カレン「ああ、シノ。」

そこでカレンは忍に悩みを言った。

忍「そうですか、クラスの子とまだ打ち解けてないのですね。」

カレン「釣り目だから話し掛け辛いのかな？つて、シノは穏やかで話し掛けやすくて良いデスね。」

忍「人と人が分かり合うには時間が掛かりますよ。カレンは笑顔がとっても素敵です。友達100人も夢じゃないですよ！」

カレン「皆優しくて大好きだけど、シノは特別な感じするです。」

忍「えへへ、照れますね。」

そんな2人をアリスはショックを受けていた。

陽子「そういや、カレンは部活入らないの？」

カレン「部活デスカ・・・アリスは何処か入ってマスか？」

忍「私達は帰宅・・・」

アリス「シノ部だよ!!」

綾「え？何それ!？」

アリス「シノとお話したり、お弁当食べたりする部活だよ!!」

カレン「うわー！それ私も入りたーい!!」

アリス「部長は私だからね!!」

忍「そうなんですかー。」

綾「えつと・・・つまり単なるファンクラブ？」

昴「いつから出来たの？それ。」

放課後のホームルームの時間になり、カレンはどうすれば仲良くなれるかを考えていた。

先生「以上です。他に委員会からの連絡など、伝えたい事はありますか？」

その時、カレンはある事を閃き、

カレン「ハイハイハイ！」

そこにカレンが挙手した。

先生「え？九条さん？どうぞ。何かしら？」

指名されたカレンは立ち上がって皆の前に立った。

カレン「え？」

周りは皆カレンを見てちよつと驚いてた。

カレン「大丈夫デス！丸腰でゴザル！」

その言動にクラスの人達は戸惑いを見せるが気を取り直してカレンはこう言った。

カレン「私はイギリスから来マシタけど、皆と同じ高校生デス！皆と仲良くなりたいデス！お気軽に話して下サイ！私も頑張るデス！」

満足したかのように一息。周りは拍手をしていた。

忍「カレンってすごいですね。」

アリス「カレン・・・」

そして放課後、カレンが皆と帰ろうとしていると。

生徒「カレンちゃん。バイバイ。」

カレン「バイバイ！また明日！皆話し掛けてくれました！良かったデス！」

陽子「良かったな！」

昴「有言実行とはこの事だな。」

アリス「カレンは昔からハツキリした性格なんだよ。でもそこがカレンの良い所で好きな所だよ。」

カレン「ありがとう！私もアリス大好き！」

嬉しくなりアリスに抱き付いた。

カレン「勿論シノも大好きー！」

今度は忍に抱き付いた。

アリス「ハツキリしすぎー！」

陽子「あ！アリスがまたやきもち妬いちやっただぞー！」

海翔「おい、煽るな。」

アリス「やきもちなんて妬いてないよー！」

陽子「分かった分かったー！」

その後の帰り道。

アリス「バイバイ！」

昴「じゃあまた明日！」

海翔は昴とアリスの言葉に手を上げ返した。そして、海翔と綾は二人で帰っている。

綾「ねえ海翔。私も中学生の時もう少しハッキリしていたら、カレンみたいに皆とすぐ仲良くなれたかしら？」

海翔「さあ、俺も人の事は言えないけど、後からでもそうやって反省出来るのは綾の良い所だと思うぞ。」

綾「え？私の・・・」

綾は海翔の言葉で顔を赤らめている。

海翔「こう言うはハッキリしてるな。」

綾「う、うるさい！」

それは中学の頃、海翔と綾が知り合って数週間のこと、家までの道がほぼ同じだったので、こういった感じで帰っていた。

綾「なんでいつもここまで？」

海翔「いや、俺家コッチだし。それに・・・」

綾「？」

海翔「猪熊と大宮には連れがいるけど、お前だけいないだろ。一人で帰るのも危ないし。」

綾「！」

海翔「じゃ。」

綾は周りをちゃんと見てることに驚き海翔の背中を見つめ続けていた。

番外編 フェイの1日とキャラ変更事項

フェイ「ふう。これも読み終えたか。」

僕の名前は八神フェイ。本当は別の名前があるのだが、それはまた別の機会に。僕はいつも家で本を読んでいるのだが、なんと言うことか、全ての本を読み終えてしまった。

フェイ「うーむ。」

僕はどうするか考えていると、昴の言葉を思い出した。確か「やることがないなら、一度外に出て気分転換をしたらどうだ。」だったか？

フェイ「そういうのもありか。」

僕は着替えて外へと足を踏み出した。

フェイ「とは言ったものの、何をしようか。」

ぶらぶらと歩いていたら、あるものが目に入った。

フェイ「まじよっ子ぶりずむ?」

そう言えば、ああいうのを旭さんも見ていたような気がする。あれが世に聞く着ぐるみショーというやつか。

フェイ「せっかくだし、見てみようか。」

僕はそこへと歩き出した。

すると・・・

「香奈ちゃん、ちよつと恥ずかしいよ。」

「ちびっこに変装してるから浮いてないはず!」

「無理があるよ〜!」

栗色の髪のツインテール?の子とショートの子がいた。彼女達は変装して見ているのか。ということは高校生くらいなのか?僕はそう思い、彼女達の元へと歩み寄る。

「穂乃花、子供の心を取り戻して!」

「でも高校生なんて周りには私達しか・・・」

フェイ「おや、やはり君達も高校生なのかい?」

二人「いた——!?!」

突然彼女達は叫んだ。やめたまえ。鼓膜が破れてしまう。

シヨーを見終えた後、僕と彼女達はその場で会話を始めた。

フェイ「あの番組は子供から大人にまで人気だと聞いたのだが、本当のようだね。」

??? 「えっと・・・オタクとか言わないの？君。」

彼女はそんなことを言った。なんだ、そんなことを気にしていたのか。

フェイ「僕をああいいう人達と一緒にしないでくれたまえ。僕は興味が沸いたものしか手をつけない。君達だって興味があるからこれを見に来たのだろう？興味を持つ人を笑う人達なんて気にしなくてもいいんじゃないかな？」

二人「・・・」

彼女達は豆鉄砲を食らったかのような顔をしていた。

フェイ「おや、少し長かったかな？」

??? 「えっと・・・結構大人な事言うね。君。」

フェイ「僕は高校生だ。」

香奈「私は日暮香奈。香奈でいいよ。で、コッチは友達の松原穂乃花。」

穂乃花「よろしく。私も穂乃花って呼んでね。えっと・・・」

フェイ「八神フェイだ。フェイでいい。」

穂乃花「あ、フェイ君つてもえぎ高校に転校してきた子？」

フェイ「ああそうだが、ということは君達もそうなのかい？」

香奈「うん。ところで、フェイ君はどうしてここに？」

フェイ「なに。単なる暇つぶしさ。」

香奈「暇つぶしで？」

フェイ「というよりは気分転換かな？だが、あれは中々面白かったね。」

穂乃花「暇つぶしで・・・すごいなー。」

フェイ「じゃあ僕はこれで。」

香奈「あ、フェイ・・・」

フェイ「なんだい？」

香奈「えっと・・・ありがとう。」ニコツ

フエイ「……」

なんだ？彼女の笑みを見た瞬間、何かがかみ上げて……それに、顔の辺りに熱を感じる。

香奈「あれ、どうかした？」

フエイ「な、なんでもない。気にしないでくれたまえ。」

僕はなんとかこの場をしのごう。

フエイ「……しかし、あれには少し興味が沸いた。香奈と言ったかな？あれについて説明してもらえないかい？」

香奈「え？興味が沸いた？……ホントに!？」

フエイ「ああ。」

香奈「わかった！色々と教えるよ！任せて！」

目をギラギラさせながら香奈は説明を始めた。

穂乃花「(か、香奈ちゃんがアツい!)」

それから僕達は穂乃花のレストランに行く事になる。

そして、

香奈「つて感じなんだけど、それで！」

香奈は説明に夢中になっている。それを見た僕は少し彼女は子供みたいだと思った。

けれど――

フエイ「なるほど。とても興味深いね。」

――少し、香奈にも興味が沸いたようだ。

昴「あれ？フエイいないのか。ん？これ。」

昴は玄関の書き置きに目が入った。そして、そこにはこう書かれていた。

『少し気分転換に行ってくる。少ししたら戻る。』

昴「少し変わったな。あいつ。」

それを見た昴は少し笑みを浮かべた。

男子会と女子会と新たなベルト

とある休日、桐生家で男子だけの入学パーティーをしていた。今更なのは気にしない。

楓「え？好きな人？」

昴「そ、楓いんの？」

楓「いないけど。」

そして、男子達での恋バナが始まる。楓は即答でいないと答える。

昴「マジか・・・海翔。どう見る。」

海翔「なんの動揺もないからあれはガチだな。・・・ここまできたら大宮が可哀想になってきた。」

海翔は楓もあまりの鈍感さに頭を抱える。

楓「？なんでしのが出てくんの？」

昴「ああ、気にしないでいい。コッチの話だから。」

海翔「そういや、昴も聞いたことないな。こういうの。」

昴「俺？いるよ。」

楓「え？いたんだ。」

海翔「言いたくないと思うが・・・誰だ？」

昴「陽子。」

海翔「・・・え？」

戸惑いを見せる海翔。

昴「だから陽子だって。」

楓同様、昴は見事な即答で答える。それもいると。名前まで出して。

海翔「・・・以外だ。」

昴「お父さんからも言われた。」

どうやら以外だと昴も自覚わしていたらしい。

楓「ねえ海翔。一ついい？」

海翔「・・・なんだ。」

楓「海翔の好きな人つてさ・・・」

そこに静寂が走る。そして、楓は海翔に質問をする。

楓「もしかして綾？」

海翔「!?な、なんでそうなる。」

まさに、なぜわかった!?と言わんばかりの表情を見せる海翔。普段顔に出さないせいとか、二人は納得がいる。

楓「いやーだつて、海翔中3の時チラチラ見てたし。そうかなつて思ってたんだけど。」

海翔「・・・」

明らかに目をそらす海翔。

昴「あれは凶星だね。・・・それがわかるんだつたらなんで大宮さんの気づかないんだろうね。不思議だ。」

楓「ん？」

海翔「・・・楓つて、鋭い時と鈍い時があるよな。」

楓「な！俺だつて気にしてるんだぞ！」

昴「気にしてたんだ。」

海翔「また、なんでだ？」

楓「実は母さんに『お前はもうちよつと恋愛に気を配れ。鈍感すぎる』つて・・・」

楓は少ししよんぼりする。

昴「紫音さん。中々容赦ないな。」

海翔「いや、こいつの場合、容赦なく言つても無駄だと思っただが。」

楓「ちよつと！そんなに俺をいじめて楽しいか!?さすがに傷つくぞ！」

昴「いや、なんかこういふ楓は珍しいなつて。」

楓「ひどいにも程があるぞ！」

二人はマシンガントークをしていると、

海翔「・・・フツ」

昴「ん?・・・海翔笑つた？」

海翔は一瞬笑顔を見せた。だが、すぐ無表情に戻ってしまう。

海翔「・・・気のせいだ。」

海翔「すごいな楓達は。自分の事をちゃんとわかつて、それだなお、駄目な場所と向き合っている。」

海翔「(・・・俺も、向き合わないとな)」

窓を見て海翔はそう考えていた。

一方、女性陣もパーティーをしていた。彼女達もどういいうわけか、恋ばなの話題になっている。

綾「しのつて結構わかりやすいのに、楓には全然届いてないみたいね。」

忍「はあ・・・」

ため息をつく忍。

陽子「まあまあしの。絶対楓でもいつかは気づくよ。さすがの楓でも、卒業までには。多分・・・きつと・・・」

アリス「ヨーコ。全然フォローになってないよ!」

カレン「大丈夫デス!シノの想いは、きつとかえでカエデに届きマス!」

忍「カレン・・・」

陽子「うーん。にしても、綾って海翔をチラチラ見てるよな。」

綾「え!?!ななな、なんで今その事になるのよ!」

アリス「そっか。アヤはカイトが好きなんだね。」

綾「そ、そういうのじゃないわ!ただ・・・」

陽子「ただ?」

綾「なんとというか・・・海翔って、いつも無表情じゃない?それがなんとなく心配で。」

アリス「確かに。それで中学の時も嫌われてたって。」

忍「昔なにかあったのでしょうか?」

カレン「カイトはいつも無表情なんデスか?」

陽子「そっか。カレンは違うクラスだからな。」

アリス「そうだよ。私達もちよつと心配してるんだよ。」

その場は少し暗い雰囲気に含まれる。それを紛らわすように、カレンは話題を変えた。

カレン「ところで、ヨーコも好きな人いますか?」

陽子「そうだなあ。私ってそういうのはあんまりわかんないし。」

アリス「スバルは?」

陽子「うーん。昴が彼氏かぁ。・・・アリかも！」

綾「そんな簡単に決めちゃダメよ！」

陽子「えー？けど、昴といると楽しいし。」

カレン「シノ！これはまさか！」

忍「陽子ちゃん。無意識に楽しいと思えるのは、きつといいことですよ。」

陽子「う、うん？」

忍「ですので、今度昴君と話す時に、少し意識してみてくださいはどうでしょうか？」

陽子「意識かぁ。やってみるよ。ありがとうしの。」

忍「いえいえ。」

かくして、彼ら彼女らは、自分達の楽しい日常を送っていた。

一方、その裏で、彼らは・・・

旭「よーし！できたぞ！」

亜美「旭さん。気持ちわかりますが、もう少し慎んで下さい。」

旭「おや、ごめんごめん。さて、これを誰に使ってもらうか。」

亜美「旭さんの親戚とかに使っていたのはどうでしょうか。彼も一応関わっているんでしょう？」

旭「うーん。けど、彼、結構プライド高いからねえ。メダル関係、特にオーズ以外になるつもりはない！とか言いそうだし。・・・おや？」

亜美「旭さん？」

人物リストを見て、旭は真顔になる。

旭「・・・亜美君。車を出すから、少し付き合ってくれないかな？」

亜美「・・・見つけたんですね。」

旭「ああ。彼ならきつとこれを・・・」

彼の手には4つのスイッチ、赤いボタン、レバーがついているベルトを手に取る。

そして彼が見ていたリストには一人の名前に丸がついていた。

瀬戸海翔と。

スカウトと条件と記憶喪失

休日、海翔は一人で小説を読んでいた。その時、ピンポン

海翔「・・・誰だ？楓達ではないはず。」

彼らには自分の家は教えていないため、訪問者ではないと考えた。そして、海翔はドアを開ける。

そこにいたのは・・・

旭「やあ、君が瀬戸海翔君かい？」

海翔「・・・あんたは？」

望月旭と氷室亜美だった。

旭「なーに。しがない科学者さ。」

紳士の如く礼をする旭。

亜美「旭さん。彼があれを渡すのにふさわしいと？」

海翔「あれ？」

旭「そう。そのあれとは、これだ！」

ババーンと音が出るかのように堂々とベルトを取り出した。

海翔「・・・なんだ？」

旭「そう！名付けて！フォーゼドライバー！」

海翔「フォーゼドライバー？」

旭「そう！」

「なに言ってるんだこいつ」海翔はそんな目を向けた。

亜美「すいません。旭さんがこれなので私が代わりに説明をします。」

旭「そういうわけで亜美く・・・あれ？今さらつと毒はかなかった？」

亜美「このフォーゼドライバーはあなたのご友人、八神昴君や桐生楓君が使う物をベースに作ったものです。これを使って、怪物を倒して下さい。」

海翔「なんで俺がそんなことを・・・」

旭「・・・瀬戸心咲。」

海翔「!？」

旭「君ならわかるよね。この名前。」

海翔「・・・だったらなんだ。」

少し海翔の表情は暗くなる。

海翔「もう。その名前の人は・・・俺の姉は、もういない。」

そう。旭が口にした瀬戸心咲とは、瀬戸海翔の実の姉である。心咲はいつも自分よりも海翔中心で動いているため、いつも海翔と一緒にいた。海翔本人も、それを嫌っていたわけではなく、ごく普通の日常を送っていた。だが、7年前の交通事故で、姉は亡くなった。海翔はそう伝えられ、ひどくショックを受けた。彼が無表情になったのもこの事故が原因である。

旭「・・・そつか。確か君にはそう伝えられたんだっけ。彼女は今生きている。」

海翔「は？」

旭「僕、実は色んな資格を持っててね。それに、悪友に頼まれたんだ。断るわけにはいかないしね。」

海翔「悪友？」

旭「僕と君のお父さんは、大学時代に知り合ってたね。あまりに意気が合ったからね。」

父親の知り合い、姉を救った人が目の前にいる。海翔は旭にこう頼んだ。

海翔「・・・じゃあ、俺を会わせてくれるか。」

旭「・・・」

少しマズイと目をそらす旭だが、すぐに海翔に目を戻す。

海翔「？」

旭「・・・そうだね。ちゃんと受け止めてもらわないと。」

海翔「・・・姉ちゃん。何してたんだよ、心配したんだぞ！」

心咲「・・・？」

彼女はロボットののように首を傾げた。

海翔「姉ちゃん？」

心咲「・・・君、誰？」

その場に静寂が走る。それは今の海翔には受け止められない状況だった。

海翔「・・・は？な、何言つて・・・俺だよ！瀬戸海翔！あんたの弟だ。」

心咲「・・・わからない。私には、何も・・・」

海翔「・・・」

彼女の悲しげな顔を見て、海翔は血の気が引いていた。

旭と海翔は心咲がいた部屋から離れ、会話をしている。

海翔「記憶喪失・・・」

旭「なんとか一命はとりとめた。だが・・・君が見た通り、彼女は記憶喪失、自分の過去を忘れている。」

海翔「・・・」

旭「こんな言い方は酷いのは承知だが、君と取引をしたい。」
海翔「取引？」

旭「ああ。彼女を君と一緒に暮らせるようにする。支給するべきものは支給しよう。その代わり、君はこれを使って昴君達と戦わなければならないかな？」

海翔「・・・俺にその資格はない。なんで俺なんだ。」

旭「・・・じゃあ、君に質問するよ。」

海翔「？」

旭「もし、君の友達が怪物に襲われてたとしたら、どうする？」

海翔「そんなの、助けるに決まって・・・」

旭「そう、それでいいんだよ。」

海翔「は？」

旭「資格なんて御大層なもの、僕が作った物に求めたくないしね。それに、資格あるなしじゃない

・・・君に使って欲しいんだ。」

旭の真剣な顔を見た海翔は少し動揺する。

海翔「・・・少し、考えさせてくれ。」

旭「・・・ふむ。確かに急かすすぎたね。気持ちが悪かったらいい。ここに連絡を。」

連絡先が書かれたメモを受け取る海翔。

旭「じゃあ、今から君達を車で送るから。」

海翔「たち？」

旭「おや？決まっているだろう？心咲君と君だよ。」

心咲「・・・あの、瀬戸さん。」

海翔「・・・海翔。」

心咲「え？」

海翔「海翔って呼んでくれ。家族に名字で呼ばれたくない。」

心咲「か、海翔。」

海翔「ここが姉ちゃん部屋の。ちよつと埃っぽいけど。」

心咲「埃っぽい・・・これは？」

一冊の本を手取る心咲。

海翔「それはアルバム。昔の写真とか置いてる。」

心咲「アルバム・・・？私の昔？」

彼女は興味を抱いたのか、アルバムを開く。そこには自分と海翔が写っている写真がたくさんあった。

心咲「昔の私ってこういう人なのかな？」

海翔「まあ、そうだな。」

心咲「・・・戻れるかな？」

海翔「！」

心咲の笑顔を海翔はみる。そして、こう思った。

彼女は記憶がなくなっても自分の姉なんだと。

海翔「・・・ちよつと風呂沸かしてくる。一人で入れるだろう？先に入る。」

少し早歩きで部屋を出ていく。そこには心咲だけが取り残された。

心咲「(あの子にとって、今の私は・・・)」

きつと今の自分は見ていられない存在なんだろう。そう思っ
てしまふ。その時、

心咲「(この写真・・・)」

一枚の写真を見つける。

亜美「いいんですか？旭さん。彼の方のメリットを先に与えて。」

旭「こうすれば、なるべくオーケーを出してくれるだろう。」

亜美「・・・やっぱり、質が悪いですね。」

旭「言うな。自覚している。それに・・・」

彼は笑みを浮かべる。それはまるで、勝利を確信したかのような。

旭「彼ならやるさ。僕の目に狂いはない。」

亜美「はあ・・・旭さんがそういうなら、きっとそうなんでしょうね。」

なんだかんだ言いながらも、旭を信用している亜美である。

一方その頃、

海翔「はあ・・・」

海翔は湯船に浸かって、考え事をしていた。

それは、車で送ってもらっているときの旭の言葉。

旭『彼女は記憶を失っている。だが、もちろん取り戻せない訳じゃない。だから、君には、彼女とともに生活をして、彼女の記憶を取り戻す手伝いをしてもらいたい。』

海翔はこれを了承したが、まだ実感がわいていない。自分には死んだと言われた姉が生きており、記憶喪失になっていたのだから受け止めようにもできない状況である。

海翔「せっかく・・・生きてたのに・・・」

海翔は一人、ただ涙を浮かべていた。

手助けと少女と恋模様

多国籍料理店クスクシエ。ここで一人の少年が次のフェアの準備をしていた。

楓「さて、こんなところか。」

そう。その少年とは楓の事である。楓はアंकの件もあり、バイトをすることを決心したのである。

知世子「ありがとうね楓君。助かったわ。」

楓「いえいえ、バイトさせてもらってるわけですし、これくらい当然ですよ。」

知世子「じゃあ、気をつけて帰ってね。」

楓「はい。」

帰り道、楓は財布を見る。

楓「帰りにまたアイス買わないと。」

そんな一人言をしていると、

キヤー

楓「!？」

悲鳴が聞こえたので楓はすぐさまその場所へと向かった。

??? 「やめて下さい！」

チンピラ1 「いいじゃねえか。」

楓 「やめろ！嫌がってるだろ！」

絡まっている女子の前に立つ。当然チンピラ達は黙っていない。

チンピラ1 「なんだお前。」

チンピラ2 「兄貴に口出ししようってか!？」

チンピラ3 「兄貴はケンカ強えんだぞ！」

楓 「ふーん。じゃあ、やってみれば。」

楓は左手で来いと相手を挑発する。

チンピラ1 「ガキが。調子に・・・!？」

チンピラの言葉は最後まで言われることはなかった。楓の見事な背負い投げが炸裂したからである。

楓「こっちは柔道黒帯の母に教えてもらったんだけど・・・やる？」
チンピラ達「ひ、ヒイロー！」

一睨みした瞬間、チンピラ達は手のひらを返して逃げ出した。

楓「ふう。大丈夫だった？」

???「は、はい。ありがとうございま・・・す。」

少女は楓の顔を見た瞬間、顔を赤くしはじめた。

楓「？」

それに対し楓は首を傾げる。

???「き、桐生君!？」

楓「え？俺の事知ってるの？」

???「知ってるよ！私、同じクラスだし、中学の時も同じクラスになったでしょ？」

首を傾げるが、すぐに思い出す楓。

楓「・・・あ！もしかして、篠原さん？」

舞「そう！篠原舞！」

篠原舞。彼女は中学二年の時に楓と知り合って以降度々話しているが、高校に入ってから話す機会が減っていたのである。

楓「久しぶり！こうして話すの中2以来だっけ？」

舞「うん。」

舞「桐生君、今帰りなの？」

楓「うん。バイト帰り。」

舞「バイトしてたんだ。どこ？」

楓「クスクシエってとこ。篠原さんは？」

舞「私はお店の材料の買い出し帰りで。」

楓「和菓子屋だっけ？」

舞「うん。」

p r r r r

舞「あ、ごめんね。」

舞「もしもし、お母さん。うん。うん。え!?!それどこで！ちよつとお母さん！」

楓「どうかした？」

舞「うん。何でもないよ。じゃあ、帰るね。」

楓「あ、送ろうか？さつきみたいになるのもアレでしょ？」

舞「うん。ありがとう。」

舞「(うう。なんでお母さんが知ってるの?)」

楓「じゃあね。」

舞「うん。じゃあね。」

舞「お母さん！」

「およ？どうした舞。」

舞「な、なんでお母さんが！」

「ああ。あんたがあの子の事好きだってことでしょ？大丈夫よ。誰にも言いふらしたりしないから。」

舞「うう・・・」

舞「(私は今、ある男の子に恋をしている。)」

写真立てを見つめる舞。そこには柔道の授業時の楓が写っていた。

舞「(桐生楓君。誰にでも優しく、色んなことを知って、柔道が強い男の子。)」

p r r r r

舞「?誰だろ?もしもし。」

???「あー舞?私だけど。」

舞「は、華ちゃん!」

藤咲華。舞と同じ高校に通っていて、同じクラスの女の子である

華「あんたね、いい加減桐生君と進展しなさいよ。せっかくあんたの親御さんに伝えてその気にさせようとしてるのに。」

舞「あれやつぱり華ちゃんだったの!」

身近に犯人がいたことに驚く舞。

華「にしても舞。あんた意外とヤバイ状況なのわかってる?」

舞「?どういうこと?」

華「大宮忍って女の子いるでしょ?」

舞「うん。中学の時少しか話したけど。」

華「その子、桐生君のお隣さん、つまり幼馴染よ。」

舞「え・・・えー!?!」

驚きの声を上げる舞。

華「ね？ヤバイ状況でしょ？あんたは結構不利なわけ。」

舞「けど、忍ちゃん桐生の事・・・」

華「多分好きよ。」

舞「え？」

華「あんたと同じくらいバレバレだったもの。それでも気づかないなんて彼なんなんだろうね？」

舞「・・・華ちゃん。」

少しの沈黙の末、舞は一つの決心をする。

華「？」

舞「私・・・やるよ。桐生君に伝えて見せるから。」

華「舞・・・」

感激した華だが・・・

舞「ボンツ／／／」

華「!？」

舞「どうしよう・・・想像したら段々恥ずかしくなってきた。／／

／

華「いやいやあんたね・・・覚悟決めたんでしょう？なら頑張んな。」

舞「うん。」

一方の楓は

楓「ただいまー。ん？」

紫音「あー楓？今忍ちゃん達でご飯食べてるから、楓も混ざる？」

楓「えーと。話に入るくらいは。ご飯食べて来たし。」

アリス「カエデー！お帰り！」

忍「お帰りなさい。」

紫音「ニヤニヤ」

楓「？どうしたの？」

紫音「いや、将来こんな事が起こるのかと思うと・・・笑いが・・・ククツ」

この光景が紫音のツボに入ったらしい。

忍母「そうよねー。いつになったらコツチにも報告がくるか楽しみ

でー。」

忍「もー！／＼／＼何を言ってるんですかー！／＼／＼顔を赤らめながら叫ぶ忍。その中、

勇「ねえ楓君。」

楓「はい？」

勇「ちよつといい？」

楓と勇は外に出ていた。

勇「あのアネクって腕の事。考えたのよ。」

楓「・・・絶対取り返します。」

勇「うん。それは楓君しかできなさそうだし。だから、出来ることがあつたら言つてね。協力するから。」

楓「・・・ありがとうございます。」

再び家に戻った二人。

アリス「カエデ！イサミ！どこ行つてたの？」

楓「うん。ちよつとね。」

忍「・・・アネクさんの事ですか？」

楓「うん・・・出来ることがあつたら協力するって。」

海翔「なんだかんだでもらつてしまった。ご丁寧にマニュアルまで。」

パラパラマニュアルを捲りながら戸惑っている。

海翔「俺に使つて欲しい・・・か。」

フォーゼドライバーを手取る海翔。

海翔「もし・・・もし俺でも誰かを助けられるなら、誰かの手を掴めるのなら・・・！」

鋼鉄と猛獣と宇宙戦士

そして、この日を楽しもうとしている少女達がいる。

綾「ムウー」

内のツインテールの少女、小路綾は友達が来るのが遅すぎてご立腹である。

陽子「ごめーん。遅れちゃったー。」

綾「遅い!!」

八神昴と猪熊陽子が遅れてやってくる。

陽子「え？10分だけじゃん。」

綾「だけ!? だけって何よ！私なんて1時間も前からここにいるのに！」

昴「真面目だな。」

綾「あれ？フェイは？」

昴「なんでも今日は一人でぶらぶらしたいって。」

陽子「珍しいな。」

物珍しそうに話しているが、昴は笑みを浮かべる。

昴「確かに。」

どうやら何か知っているようだ。

その中、

香奈「お待たせ！じゃあ、行こっか。」

フェイ「コクリ」

八神フェイと一緒にいるのは日暮香奈。表は普通の女子高生だが、本当はアニメ好きでオタクと言われたくないために普通というレッテルを貼っている。

視点は昴達へと戻す。

陽子「というか、しの達もまだ来てないじゃん。」

綾「そうなのよ。心配だわ。どこかで事故に遭っていたら・・・」

陽子「この差はなんだ？」

忍「お待たせしましたー。」

陽子「あつ、来た・・・」

昴達は驚愕した。何故なら、はたから見ればまさにゴスロリみたいな格好をしていたからだ。

陽子「なんだあれ!?しの、それ私服か?」

忍「はい。似合いますか?」

アリス「シノは何かのモノマネをしてるんだよー。」

陽子「なるほど、コスプレか。えつと・・・メイド?」

綾「ゴスロリとか?」

忍「ブブー!正解は、外国人でしたー。」

綾・陽子「ぎっくり!」

同時に突つ込む二人。

陽子「あれ?楓もないのか?」

アリス「今日用事あるって。」

だが、忍達は知らないだろう。楓と海翔の二人と偶然鉢合わせることに。

時刻は昼頃となり、昼食をとる場所をさがしていた。

陽子「お昼どこで食べる?」

忍「そうですねえ。あ、ここはどうでしょう?」

アリス「?」「ラビットハウス」?

綾「喫茶店のようね。」

忍「入ってみましょう。」

???「いらつしやいませー。」

女性陣「・・・」

???「?」

少年は首を傾げるが、女性陣は硬直していた。何故なら、その少年は。

陽子「楓じゃねえか!」

忍「なにしてるのですか!」

桐生楓だからである。

楓「まあまあとにかく座って座って。」

アリス「ところで、カエデはなにしてるの？」

楓「んー。バイト。体験だけだね。」

昂「でもどうして急に。」

楓「ああ。それは今朝・・・」

紫音「楓ー！そろそろ起きなさい！」

楓「今日バイトもないし学校も休みだからいいでしょ。」

今日はのんびりしようとする楓だが、突然。

??? 「早く起きないとCQCかけちゃうぞ。お兄ちゃん。」

楓「あんた柔道だったろ。CQCなんて出来るならやってみてよ。」

??? 「そうか。じゃあ遠慮なく。」

楓「え・・・？」

紫髪の少女が、楓に跨がっていた。

楓「誰ー！?!」

桐生家に楓の叫び声が響いた。

楓「母さんの知り合いの娘さんか。泊めてるんなら一言言つといてよ！」

紫音「言うの忘れてた。この娘は天々座理世ちゃん。今高2だったっけ？」

リゼ「そうだが、すまない、家出に巻き込んで。」

申し訳なさそうにリゼは言う。

楓「それはいいんだけど、進路でケンカってどんな道に・・・」

リゼ「・・・小学校の先生・・・って言ったら笑われた。からケンカした。」

楓「ニヘラー」

リゼ「ほらー!! やっぱり笑う！」

楓「いいんじゃない? 似合ってるよー。」

リゼ「やっぱり私が先生なんて怖いかな。鬼軍曹先生なんて呼ばれてしまうかも。」

楓「いや、それはそれで慕われてるような) あ! だったらリゼちゃん。今日は一緒に出かけない?」

リゼ「なんでだ？」

楓「リフレツシユだよ。それと、ここにいる間はリゼちゃんの事先生って呼ぶから。ここで経験を積んで鬼？を倒そう！」

リゼ「上等だ！かかって来い!!ゴゴゴゴゴゴ」

楓「先生のオーラじゃないけど!？」

そして、楓達は喫茶店へと着く。

リゼ「ここが、私のバイト先のラビットハウスだ。」

楓「じゃあ、入ろう。」

???「いらつしやいま・・・あ、リゼさん・・・と、えと・・・どなたでしょう・・・？」

楓「俺は桐生楓、リゼちゃんの付き添いできたんだよ。楓でいいよ。」

楓は簡単な挨拶をした。

チノ「私は香風 智乃です。よろしくお願いします。」

楓「頭に乗ってるもじやもじやは何？」

チノ「これですか？これはティツピーです。一応うさぎです。」

楓「うさぎっ!?!えこれが？」

チノ「はい。これがうさぎです」

楓「さ、触ってもいい？」

目をキラキラさせる楓。楓は見たことのないものをみると気分が高ぶってしまうのである。

チノ「楓さん。ちよつと怖いです。あと、コーヒー一杯で一回です。」

楓「分かった。じゃあ一杯お願い。」

チノ「かしこまりました。」

???「ごめーん！遅れちゃった!・・・てあれ？」

なんて賑やかな声が登場した。

???「だ、誰！もしかしてリゼちゃんの彼氏!？」

リゼ「ち、違う！そんなわけあるか！」

楓「すごいこと言うなこの子。俺は桐生楓。今は高1で、今日はリゼちゃんの付き添いみたいなものだ。気軽な楓で呼んで。」

ココア「私は保登 心愛！私も高校一年生で最近こっちに来たんだ！今はチノちゃんの家で下宿してるの！よろしく楓君！」

楓「よろしく。」

チノ「ところで、どうして付き添いを？」

楓「ああ、実は・・・カクカクシカジカ」

ココア「家出!？」

チノ「小学校の先生ですか。」

リゼ「やっぱり似合わないかな。」

チノ「とりあえず銃の携帯をやめた方がいいと思います。」

楓「銃!？」

リゼ「おいチノ!・・・親父が軍人だから幼い時から・・・」

楓「だから鬼軍曹って言ってたんだ。気にしなくていいよ。リゼちゃん十分かわいいし。」

すると突然リゼは顔を真っ赤にしモデルガンを突きつける。

リゼ「な、何を言ってるんだお前はー!!／／／」

ココア「リゼちゃん落ち着いてー!」

楓「これがバイトでのリゼちゃんかあ。これキリマンジャロ？」

チノ「正解です。楓さん。ティツピーどうぞ。」

ティツピーを受け取り、少しもふもふする楓。

楓「わあ！ティツピーって見た目通りもふもふなんだね。」

しばし堪能したあと、ティツピーをチノに返す。

楓「ありがとうチノちゃん。」

チノ「いえいえ。それより、よくコーヒーの銘柄を当てられましたね。」

楓「ん？ああ、両親がよく飲んでるから。その影響かな？」

そんな他愛のない話をしているなか、鴻上ファンデーションでは、ガタキリパソコンボの映像が流れていた。

鴻上「コアメダルグリーンのコンボ。それを見るだけでも、コアメダルの力がどれ程のものかわかる。しかもそれをオーズはいとも簡単に使った。」

ケーキを作りながら嬉々と鴻上は言う。

鴻上「素晴らしいよー。全く素晴らしい。ハハッ。そこで私はプレゼントを考えた。里中君。」

里中は一個の箱を持っていく。

鴻上「このケーキ。それにふさわしいとは思わないかね？」

だが、一人の少年が抗議する。

翔琉「自分は反対です。オーズにはグリードの1人もついているんですから、これ以上危険な……」

鴻上「氷室君！君が監視の目を光らせていればいい。」

翔琉「しかし！会長！自分がここにいるのは、この街を守る為であつて。」

彼、氷室翔琉は街を守る為に

鴻上「そう！この街を守る為だよ。」

里中「よろしく。傾けないようにしてください。」

スマホをいじっているときにメダルを見つけたとネットにかかっていた。

アंक「緑色のメダル？まさか。コアメダルか。確かめるか！」

そして、メズールとカザリは拠点にいた。

メズール「アंकを狙うのはいいけど、うまくいくかしら。彼にはオーズがついているのよ？」

カザリ「大丈夫。ガメルが上手くやればね。」

視点はラビットハウスに戻る。そして、コアはあることを口にする。

コア「ねえチノちゃん。会いたくない？噂の謎のヒーローに！」

チノ「まだ言ってるんですか。仕事をしてください。」

楓「謎のヒーロー？」

リゼ「ああ。最近怪物が出てくるようになって、それと同時に怪物と戦うヒーローが出てきたって噂がたってるんだよ。『仮面ライダー』って周りじゃ言ってるよ。」

楓「仮面ライダーかあ……」

それを聞いた楓は少しにやついていた。

リゼ「なんでそんなに笑ってるんだ？」

楓「え？笑ってた？」

昴「なんかちよつと嬉しそうだったよ。」

ガシヤーン

楓「？」

昴「なんだ？」

楓「行ってみよう。」

昴「そうだね。」

場所に向かうと、ヤミーが暴れていた。

楓「ちよつとちよつと。これのどこが欲望に関係あるのさ。」

するとヤミーが瓦礫を、楓達へとぶつけようとする。

ココア「リゼちゃん！」

リゼを抱え、それを楓は回避する。

リゼ「か、楓。」

楓「つて、聞いても無駄っぽい。行くよ昴。」

昴「はいはい。」

リゼを離れた後、楓と昴はオーズドライバーとダブルドライバーをつける。

昴がベルトをつければ、当然彼にも。

香奈「この話いいよねー！」

フェイ「確かにね。・・・？」

ダブルドライバーが出てきたことにより、大体の事を察するフェイ。

香奈「なにそれ？」

フェイ「出たか。」

Cyclone

香奈「メモリ？」

Joker

昴がメモリを出してる間にオーカテドラルにタカ　トラ　バツタのメダルをはめ、オースキャナーを通す。

楓・昴・フェイ「変身!!」

香奈「変身!？」

フエイはサイクロンメモリを差し込むと同時に気を失う。
香奈「ちよつと！フエイ！大丈夫!?!どうしよう！」

タカ トラ バツタ

タ ト バ タトバタ ト バ♪

Cyclone Joker

♪

ココア「あー！あれ！噂のヒーローだよ！」

陽子「楓はともかく昴まで!？」

リゼ「あれが・・・仮面ライダー。」

一方のアंकはメダルの情報提供者に会いに行っていた。

アंक「ここか。メダル拾ったって場所は。」

そこには、緑のコートを着た一人座っていた。アंकは気づいていないみたいだが、グリードウヴァである。

アंक「なんとなく妙だな。」

違和感を抱いたアंकは楓を呼ぶ為にバツタカンドロイドを起動し、楓の元へと向かわせた。

その楓と昴はヤミーに少し苦戦していた。

楓「硬い。」

昴「これはまた面倒な。」

そこにバツタカンドロイドが来た。

アंक「楓。運河沿いの工場跡地へ来い。コアメダルを拾ったらしい人間がいる。一応用心して。」

楓「今ヤミーと取り込み中！メダルは後！」

アंक「あいつまた勝手に戦ってんのか！」

カンドロイドをしまい、一人で接触することにしたアंक。ウヴァは笑みを浮かべていた。

海翔「ご丁寧にバイクをもらったが、案外運転は簡単だな。」

海翔「なんだあれ。」

アंक「おい！メダル拾ったって流したのお前か！」

ウヴァ「ああ。」

アंक「ほう！そのメダル見せろ。」

ウヴァ「フフツ、フハハハハ！この姿だとお前でもわからないらしいな！」

アंक「あ？」

ウヴァ「俺だよ。」

グリードの姿を見せるウヴァ、それに対しアंकは腕を元に戻すが、なすすべがなく掴まれる。

アंक「なるほど。メダルの情報は俺を誘き出すための餌か！」

ウヴァ「フン！貴様だけが進化してると思うな！自惚れて墓穴を掘ったな！オーズのいないお前など、赤ん坊のようなものだ！」

アंकを投げ飛ばすウヴァ。アंकは策にぶつかってしまふ。ウヴァはそれを無理矢理立たせる。

ウヴァ「立て！」

アंक「手が込んでるな。が、お前の石頭じゃ考えられるはずわけがない！カザリだろ？カザリに手取り足取り教えてもらったんだろ？なあウヴァ。」

ウヴァ「貴様！黙れ!!」

激昂したウヴァはアंकに蹴りを入れる。アंकは腕が悠木から離れてしまった。

ウヴァ「貴様のコアメダル、全部渡してもらおう。」

こちらにも不利な状況だった。近づいても体が硬いため、簡単には攻撃が通らない。

楓「どうしよう。」

対策を練っていると、ヤミーが近くの瓦礫を浮かばせ、楓達にぶつける。楓と昴はそれをかわしたが。

陽子「綾！危ない！」

綾に直撃するところだったが、一台のバイクと少年がそれを助けた。その少年とは。

海翔「ギリギリってどこか。」

綾「海翔？」

瀬戸海翔だった。

海翔「やっぱりお前らも絡んでるのか。」

海翔は奥のヤミーをみる。そして、周りを見て大体の事を察した。

海翔「こいつか。なら！」

フォーゼドライバーを取り出して装置する。

楓「あれ？」

昴「まさか・・・」

先程教えてもらったボタンを右二つを左で、左二つを右で押すそして右手でレバーを握り、左手を前に置いた。

Three

Two

One

海翔「変身。」

レバーを入れ、変身を遂げる。

海翔「しゃあ！宇宙キター！」

楓「うっそ！」

昴「旭さんまた。」

誰が渡したのか察した昴は頭を抱える。

一方の海翔はヤミーに攻撃を仕掛ける。攻撃を受ける時には後ろのブースターでそれを回避、攻撃して回避を繰り返した。ヤミーは激昂して、また瓦礫をぶつける。

楓「瓦礫が！」

海翔「問題ない！」

右二つ目の青いスイッチを入れる。

Launcher On

すると右足にランチャー砲が出てきた。

海翔「おら！」

ランチャーのミサイルを発射し、正確に瓦礫を破壊した。

昴「うわあ、すごいな。」

楓「でもなんでそんなに使いこなしてるの!？」

海翔「一回使えば慣れる。」

次に右端のオレンジのスイッチを入れる。

R o c k e t O n

すると右腕にロケットが出てきた。それを噴射させ、海翔は攻撃を与えず後ろに下がる。

海翔「じゃあ、こいつで。」

今度は左から二つ目の黄色のスイッチを入れる。

D r i l l O n

すると、左足にドリルが出てきた、

海翔「確か、こうだったか！」

p r r r r

海翔「あ？」

同時に左端の黒いスイッチをいれる。

R a d a r O n

すると左腕にレーダーが出てきた。

亜美「瀬戸君！今グリードが・・・」

海翔「だったらまとめてやるだけだろ。」

レーダースイッチを切り、もう一度レバーを入れる。すると、

R o c k e t D r i l l

L i m i t B r e a k

ロケットは勢いよく噴射し、ドリルが相当のスピードで回転している。これでヤミーを倒すつもりらしい。

海翔「取った！」

だが、ヤミーに届かず、

海翔「あ!？」

ガメル「俺のヤミー、いじめるな！」

楓「海翔！こいつがグリード！」

海翔「だったらこいつで！」

C h a i n s a w

C h a i n s a w O n

海翔「あ!?!こいつ硬い！」

すぐさまドリルスイッチを外し、レーダースイッチとは違う黒いス

スイッチをはめる。

S p i k e

そして、すぐにスイッチを押す。

S p i k e O n

すると左足から無数のトゲが出てくる。

海翔「おら！」

それをぶつけるとそのトゲが伸び、少しダメージを与える。

楓「はあ！」

すかさず楓もメダジャリバーで仕掛けるが、あっけなく返されてしまふ。

海翔「さつき硬いつたろうが。」

昴「硬さには、硬さで勝負するか。」

銀色のメモリを取り出し、昴はそれを押す。

M e t a l

フェイ「そのメモリには、これが一番相性がいい。」

右半分のフェイも赤いメモリを取り出し、それを押した。

H e a t

昴「ふーん。じゃ、これで！」

ダブルドライバーのメモリを入れ替え、バツクルを開く。

H e a t M e t a l

♪

すると右半分が赤く、左半分が銀色のダブルに変わった。後ろには棍棒らしき武器がある。

昴「さあて。・・・？誰かいる？」

海翔「誰だ？」

楓「氷室君。」

翔琉はケーキの箱を取り出すと、楓は

楓「あ！もしかしてまたプレゼント!？」

翔琉「また？俺はお前の配達屋じゃない！」

翔琉はそれを楓から離す。

翔琉「やっぱり、これをお前に渡す訳には。」

ヤミーが二人に襲いかかる。

楓「あ、危ない！」

翔琉を突飛ばし、回避させ、ヤミーを突き放す楓。

楓「氷室君、大丈夫!？」

当然、突飛ばされた翔琉はケーキが顔にぶつかり、クリームだらけとなる。

楓「ん？」

だが、そこに楓は違和感を覚えた。

翔琉「お前な・・・」

楓「あ、ちよつと！失礼しまーす。」

右頬についてた物を外すと、そこにはライオンの絵が描かれたメダルがあつた。

楓「プレゼントつてこれ？え、これってコアメダル!?なんで？」

翔琉「俺が聞きたい。なんでそんな貴重なものを。」

楓「とにかく、使わせてもらうね。」

オーカテドラルのタカメダルをライオンメダルに変え、オースキヤナーを通す。

ライオン トラ バツタ

すると頭がタカからライオンに変わり、光を放った

ガメル「眩しい！目が!!」

グリードガメルとヤミーが苦し右出した。

海翔「光に弱いのか。」

楓「おお！すごい！氷室君、鴻上さんによろしくね！」

お辞儀をし、楓はヤミーの元へと向かう。

翔琉「俺は・・・この街を守る為に・・・」

翔琉はケーキをはたき飛ばした。

三人は攻撃を始める。昂と海翔はガメルに、楓はヤミーに攻撃する。するとヤミーは瓦礫をぶつけた時と同じように、トラックをぶつけようとする。

楓「はあ！」

それに対しメダジャリバーでトラックを斬りつける。するとト

ラックが爆発し、ヤミーとガメルは姿を消していた。

海翔「逃がしたか。」

4つの赤いボタンを同時に上に上げ、変身を解除する海翔。
昂「そのようだね。」

そして、バツクルからメタルメモリを外し変身解除する昂。

楓「また現れるでしょ？」

オーカテドラルを解除の位置まで戻す楓。

そして、それを傍観していた彼女達はすぐさま駆け寄った。

ココア「ねえねえ！あなた達が仮面ライダーなの!?話聞きたい！」

ココアは目をキラキラさせているが、リゼは少し目を睨ませている。

リゼ「確かに・・・話が必要かもな。」

だが、ココア達とは初対面の為、海翔はポカンとしている。

海翔「・・・誰だ？」

楓「説明がいるかもね。」

そしてこちらも。

メモリが戻って来たことにより、目を覚ますフェイ。

香奈「ちよつとフェイ！大丈夫!?!」

フェイ「うん。大丈夫だよ。」

香奈「変身って言ってたけど、ホントに変身できるの!?!」

フェイ「正確には、僕の意識をこのメモリと一緒に転送してるって
言ったほうがいいかな？」

香奈「倒したの？怪物。」

フェイ「逃してしまった。最も、すぐに現れるだろうから、心配い
らないさ。」

そして、ウヴァとアंकは。

ウヴァ「もういい。コアメダルを渡してもらおうぞ。」

アंकはウヴァに飛びかかるが、鉤爪で攻撃される。その時にコア
メダルが二枚飛び散ってしまった。

電撃と自覚と仲直り

ウヴァ「コアメダル!!」

アंकからコアメダルを奪ったウヴァ。そこには自分のメダルもあつた。

ウヴァ「アंक!出し惜しみせず、全部吐き出して!・・・いない!」
アंक「ウヴァ!お前のその目先の事にとらわれる性格はどうかした方がいいぞ!」

ウヴァ「貴様!わざとメダルを飛ばしたのか!」

アंक「カザリによりしく言っとけ!じゃあな!」

ウヴァ「待てアंक!!」

ジャンプ力を使ってその場を去るウヴァ。アंकはバツタカンドロイドを使ってなんとかこの場をしのいだ。

ラビットハウスで海翔達とも自己紹介を終え、リゼが話を切り出した。

リゼ「さあ、説明してもらおうか。」

楓「いや、でもあれが事実なわけだし。」

綾「まさか海翔まで変身するなんて。」

海翔「仮面ライダーって呼ばれてたのか?あれ。」

昴「それ今聞く?こっちはカクカクシカジカで。」

陽子「なるほどなあ。そういえば、楓がオーズになった経緯は知らないな。」

昴「あのアंकってグリードでしょ。悠木さんに取りついてる」

陽子「悠木兄に!」

昴と陽子は勇とも顔見知りなため、自然と悠木とも面識がある。

楓「うん。それもあるけど・・・」

一つ楓の中で疑問があつた。オーズになったあの日、全ての物がセルメダルとなつて消えていく夢がどうしても頭から離れなかった。

忍「どうかしたのですか?」

楓「いや、なんでもない。」

そこに目をキラキラさせココアが楓達を褒め称える。

ココア「でも、変身して戦ってる時カツコよかったよ！ねえリゼちゃん！・・・リゼちゃん？」

リゼ「え？あ、ああそうだな。」

楓「リゼちゃん、大丈夫？」

リゼ「だ、大丈夫だ！気にするな！」

楓「？」

ずっとぼーっとしているリゼの顔を見るがすぐにそらされてしま
う。

リゼ「・・・何故だ？楓を正面から見れない。見るとなんだかドキ
ドキする／＼／。」

楓「あれ？そう言えばアंक来なかったな。」

その頃アंकはその場に倒れこんでいた。

アंक「・・・仕方ない。」

バッタカンドロイドを起動させようとしているが、少し躊躇いが
あった。

アंक「(こんなところを見せたら、調子に乗るだけか)あいつバカの
くせに、時々くえない。」

海翔は綾をバイクで送っている。

綾「ありがとう海翔。送ってくれて。」

海翔「別に家が近いし、危ないだろ。こんな時間に一人って。」

綾「・・・ホントに、海翔って優しいのね。中学の時から変わらな
い。」

海翔「・・・別にそんなんじゃない。」

綾「ううん。私、海翔と会うまではずっと陽子について行ってたか
ら。けど、二年になって海翔と知り合ってから、少し変わった気がす
る。だから・・・」

綾は後ろから抱きしめる力を少し強めた。

綾「ありがとう。」

それに海翔は綾に見えずとも顔が赤くなっていた。

海翔「・・・まあ、そう言うことはそうなんだろうな／＼／」
綾「海翔？顔赤・・・」

海翔「ほら、着いたぞ。」

綾「あ、うん。」

海翔と別れ、部屋に入った綾。ベッドに横になり考える。

綾「(やつぱり、何か変。海翔と二人きりの時・・・皆といるときとは別の感じになる。)」

その時忍の言葉を思い出す。

忍『人を好きになることは良いことだと思えますよ?』

綾「私・・・好きなのかな?」

一方、鴻上フアンデーションでは。

翔琉「会長、失礼します。」

氷室翔琉が帰宅しようとしていた。

楓「あ、氷室君。今日はライオンのメダルありがとうね。」

そこに楓が訪れていた。

鴻上「これは意外な客だね。で、用件は?」

楓「ちよつとお願いが。」

海翔「よし。」

準備を整え、ヤミーを倒しに向かう海翔。そこへ昴がやって来た。

昴「やつぱりここだったんだ。」

海翔「なんでここに。」

昴「ま、こつちも聞きたい事があるしね。それに、ヤミーの居場所も特定してる。」

海翔「・・・はあ。ヤミーを倒したらな。」

観念したのか、海翔はため息をついて、ヤミーの元へと向かった。その中。

アंक「ヤミーか。あいつからメダルを取れば。」

アंकは立つこともやつとで、足がおぼつかなかった。

楓「ずいぶん面白い絵面だな。」

そこへ楓がきた。

アंक「ほつとけ!なにしに来た!」

楓「鴻上さんから前借りしてきた。多分なんかあつたらうと思つて。」

鴻上の元へと向かったのは、セルメダルを借りるためだったのである。

アंक「条件は？」

楓「別に。」

アंक「そんなわけあるか！」

楓「お前と約束したところで無駄でしょ？ま、今日で死ねないだろうから。な？」

セルメダルをアंकへ落とす楓。するとアंकの腕が少し回復したようである。

アंक「意味わからんが、お前が使えるバカだと言うことは間違いないなあ。」

楓「いやあお前も結構使えるグリードだと思うよ？」

アंक「フン！」

楓「おい、どこ行くんだよ！」

海翔「見つけた！」

ヤミーを見つけた海翔と昴。

昴「ま、事情を聞くのは後回し。先にこつちを片付けよう。」

海翔「言われなくても。」

ベルトをつける二人。そこへ楓も着いた。

楓「こんな所にいたんだ。」

オーズドライバーをつけ、オーカテドラルにメダルをはめる。が、ヤミーが攻撃を仕掛けてくる。それをアंकはバイクで弾き飛ばした。

アंक「ガメルのヤミーか。あれは能力を使う度に自分のメダルを消費するんだ。倒してもたいしてメダルは落ちない。」

楓「ああそう。」

メダルを三枚はめる。

アंक「チツ・・・」

J o k e r

この日、香奈はフェイの家へときていた。これは俗に言うお家デートと呼ばれるものだが、フェイは気にしていない。だが、

香奈「ここがフェイの部屋・・・」

そこへフェイが来る。それと同時にダブルドライバーが装着される。

フェイ「待たせたね。・・・早いね。もう見つけたか。」

香奈「事情はわかった。さあ！どーんと来て！」

フェイ「・・・そんな構えられると、こつちもねえ。」

c y c l o n e

昴とフェイはメモリを押し、

T h r e e

T w o

O n e

海翔はスイッチをいれ変身体制に。

そして、楓はオースキヤナーを通す。

四人「変身!!」

c y c l o n e J o k e r

♪

タカ トラ バツタ

タ トバ タトバタ ト バ♪

戦いを挑むが、また瓦礫を操られ、近づけないでいる。

昴「でも、あれをどうするか。」

海翔「簡単だ。」

すると海翔は黄色の10と書かれたスイッチを取り出し、フォーゼドライバーに差し込む。

E l e k

海翔「(あの時は逆流したが、今なら!)」

E l e k O n

すると右腕が金色になり、電流が発生する。

海翔「腕だけで無理なら、コイツの電気を全身を使って受け止める

！そうすれば！」

海翔の周囲に電気が発生し、黒いが現れる。それが海翔に纏われ。

くく♪

音楽がなり、全身が金色になった。所々に電気のマークがついている。

昴「なにそれ？」

海翔「仮面ライダーフォーゼ、エレキステイツってやつだ。」

海翔はエレキステイツに変わった時に出てきた剣、ビリーザロッドの左側にコンセントを差し込んだ。

海翔「よし！」

それをヤミーにぶつけると、そこに電撃が発生する。攻撃して回避、攻撃して回避を繰り返す。

楓「負けてられないね！アंक、こないだのコンボ行ってみよっか。

アंक？」

アंक「コンボは無闇に使うな。こいつだけにしとけ。」

昴「だったらこいつでけりをつける。」

h e a t m e t a l

h e a t m e t a l

くく♪

タカ カマキリ バツタ

その瞬間にヤミーが殴りかかってくる。

楓「やば！」

すると海翔はコンセントを右側に差し込んだ。

海翔「おら！」

すると電撃でヤミーを縛り付けた。

そして昴は棍棒のような武器、メタルシャフトを使い攻撃する。

アंक「楓、メダル変えろ。」

楓「ちよつと待って。どうせなら、こっちのほうがいい。」

アंक「なに!？」

ライオン カマキリ バツタ

頭をライオンに変え、光を放つ。するとまたヤミーは苦しみ出し

た。

楓「やっぱり光に弱いんだ。」

だがその中で、アंकは驚愕していた。

アंक「お前、そのメダルどうした!？」

楓「鴻上さんからプレゼント!」

アंक「またあいつか。」

楓「さあて、そろそろ決めますか。皆!」

昂「了解!」

海翔「コクリ」

スキヤニングチャージ

楓はカマキリとバツタの部分を同時に光らせ、高くジャンプする。

海翔はビリーザロッドにエレキスイッチを差し込むと、危険音に近いものが鳴り、電気かたまる。その後、この音がでる。

Limit Break

昂はメタルメモリをメタルシャフトに差し込む。

Metal Maximum Drive

その後、メタルシャフトの両端に炎が発生する。それは段々増幅する。

昂「そら!」

それを昂は遠距離でぶつける。

海翔「おら!」

強烈な電撃でヤミーを斬りつける。

そして楓はライオンで目をくらませた。

楓「せいやあ!」

カマキリで斬りつけ、ヤミーを倒した。

セルメダルが落ちたが、一枚だけだった。

楓「確かに前借り分には全然足りないなあ。」

アंकは機嫌を損ね去って行った。

そして、ラビットハウスでコーヒーを飲んでいる楓達。

昂「・・・なるほど。それが理由ね。」

海翔「ま、決めたのはそれだけじゃないがな。」

その中、楓とリゼは。

リゼ「仲直りするよ。親父と。」

楓「ちゃんと受け入れてくれるといいね。」

リゼ「ああ。・・・なあ楓。」

楓「ん？」

リゼ「・・・恋ってなんだと思う？／＼／」

顔を赤らめながら問いかけるリゼ。

楓「うーん。あんまりわからないけど、気持ちの問題じゃない？」

リゼ「え？」

楓「だって、自分の気持ちは人に決められないでしょ？だから自分が恋って言うんだったら、それが恋なんじゃないかな？」

リゼ「・・・」

楓「俺はわかんないけどね。でも、ということはリゼちゃんも初恋まだなんだね。リゼちゃんが初恋をしたらどんな顔するのか・・・な？」

リゼ「くく／＼／」

顔を下に向けているリゼ。だが顔が真っ赤になっているのを隠していた。

楓「？」

リゼ「べ、別にそう言うんじゃないからな！」

楓「え？何が？」

理解が出来ず首を傾げる楓だった。

その日の夜。

リゼ父「・・・リゼ！帰ってきたか。」

リゼ「ああ。すまない。勝手に出ていった。」

リゼ父「気にするな。それに、リゼの進路を笑ってしまった俺にも責任がある。」

リゼ「親父・・・」

リゼ父「紫音の所に泊まったんだらう？紫音の息子とも会ったのか？」

リゼ「ブフツ」

それを聞き、吹き出すリゼ。

リゼ父「ど、どうしたリゼ!?いきなり!」

リゼ「いや、なんでもない。」

そそくさに部屋を出ていき、部屋に入る。

リゼ「(・・・少しの間だが、楓といるとき何かを満たされていく。

温かい気持ちになる。

そうか・・・

これが・・・

【好き】なのか。】

後日、楓は忍の家で忍達と話していた。

楓「それで仲直りできたって。リゼちゃん。」

忍「良かったですね。ところで家出ていたって、何処に泊まっていたのですか?」

楓「ん?うち。」

忍「・・・へ?」

楓「だから、俺の家。」

忍「そ、そうですか・・・もしかしてリゼちゃんも。」

楓「リゼちゃんもどうかした?」

忍「な、なんでもないです!」

アリス「カエデって、本当に無自覚なのかな?」

楓「?」

ただ首を傾げるしかない楓だった。

事情と説明と誕生日

ヤミーを倒した後日。海翔はいつも通り学校へと向かう。

海翔「あ。」

綾「おはよう海翔。」

海翔「あ、ああ。おはよう。」

二人は待ち合わせ場所では他の皆を待っている、

綾「そういえば海翔。制服ちゃんを着たら？」

今夏服の為、海翔はワイシャツだけで、ボタンを一つ開けている状態だった。

海翔「今さらだな。別に式の日には着てるし、大丈夫だろ？」

綾「普段からビシツとするべきだと思ってる！」

すると綾はシャツのボタンを付けてネクタイを付け始めた。

海翔「いや、ボタン苦しいから外してんのに。」

綾「あーなんかこれって・・・／＼／＼）プイッ」

あることを察した綾は赤面し目を背けた。

海翔「どうした、お前？」

綾「・・・／＼／＼」

きちんとした服装になった海翔。

海翔「・・・で？これで満足か？」

綾は完全に顔が真っ赤になっている。

綾「／＼／＼」

海翔「大丈夫かお前。」

結局元に戻したが、その後二人には会話がない。というよりは話そうにも話しづらい状況だった。

綾「(やっぱり二人きりだと緊張する。前は全然大丈夫だったのに。)」

綾「・・・ねえ海翔。」

海翔「なんだ？」

綾「海翔って・・・好きな女の子っている？(・・・私なんて事を聞いて!?)」

海翔「ブフツ」

綾「だ、大丈夫!？」

海翔「お前、いきなりなんだよその質問。」

綾「(海翔が焦るところ初めて見た。)で、いるの?いないの?」

海翔「・・・一応いる。というよりは・・・チラツ」

少しだけ綾を見た海翔。だが、それが裏目にでてしまう。

綾「(え?海翔こっち見なかった!?というかいつもと違ってドキドキする!)」

綾「え?それって・・・」

昴「おはよう。」

そこに昴、陽子、フェイが来た。

海翔「・・・うす。」

綾「あ、おはよう。」

フェイ「二人とも顔赤いよ?」

昴「もしかして告白してたり?」

海翔・綾「違う!!」

楓「息ピッタリ!」

海翔「楓。」

忍「おはようございます。」

アリス「あ、ああ!」

回収したプリントを落としてしまったアリス。

アリス「ごめんなさいく・・・」

海翔「気にするな。日本にはドジっ子っていう言葉がある。」

アリス「ドジ・・・?」

陽子「ちよっとくらいドジった方が可愛いつてことだよ。」

綾「私もそう思うわ。」

海翔「?」

綾「誰だって失敗するわよね。完璧な人なんていないもの。」
海翔「ま、まあそうだな。」

綾「ドジっ子って可愛いわよね！」

海翔「そうなんじゃないの？」

綾「実はね、さつき海翔のノートをバケツに落としてしまったんだけど。」

海翔「ちよっ！俺のノート！」

綾「ドジっ子って可愛いわよね。」

海翔「ごまかすんじゃないわねえ！」

二人のやりとりを見ると皆が少し違和感が出ていた。

楓「・・・なんか。」

海翔「落としたならそう言えよ。・・・明日ノート見せてくれよな。」

綾「だ、大丈夫！ちゃんと見せるから。」

楓「海翔、叫ぶようになったよね。」

昴「感情が出るようになったって言ってやろうよ。」

忍「私って、何歳くらいに見えますか!？」

楓「16でしょ？」

アリス「そんなストレートに言っちゃダメだよ！」

陽子「15じゃなくて？」

楓「だって今日しのの誕生日だから。」

陽子「あ、そう言えば！」

全員がそれに気づくが、本人には問題があったようだ。

忍「見た目年齢の話です！制服を着てると思っちゃダメです！」

綾「最近まで高校生だったし、14、5歳？」

陽子「けど案外30歳って言われても違和感ないかもな！なんかこう落ち着き具合が・・・ってあれ!？」

アリス「ヨーコなんて事を!!」

忍「ダメですアリス。私にはやっぱり若さが無いのです・・・」

アリス「そんなことないよシノ！」

楓「何かあったよね？絶対勇さんが原因で。」

アリス「あ、うん。実は今朝・・・」

勇「そう言えば忍、あんた今日誕生日よね？」

忍「はい。」

勇「おめでとー。確か今年で36歳だったわね。」

忍「違いますよ！何ですかそのブラックジョーク！」

アリス「36!? シノ・・・そうだったの!？」

忍「違います!!」

忍「もーっ。姉妹でも言つていいことと悪いことがありますよっ。」

勇「ごめんねー。だって忍ったら若さが足りないから。」

アリス「教えてくれたらプレゼント用意したのにー。」

忍「私も忘れてました。」

勇「プレゼントかあ・・・私も忍にピッタリのものプレゼントするわ。」

忍「えっ、何ですか？」

勇「うーん。盆栽？」

忍「初老じゃないですか!!」

綾「そんなことが・・・」

陽子「盆栽はヒドいなー。」

アリス「でもら盆栽つてすごく高価なんだよ！うらやましいよー！」

忍「盆栽なんてもらっても困りますよ。ですが、同じ植物ならモミの木が欲しいです。」

昴「もらってどうするの？」

忍「そしたら毎日がクリスマスですよ！」

陽子「あー、なるほど。」

目を輝かせる忍に納得がいった陽子。

綾「これプレゼント、参考書。」

陽子「じゃあ私はジュースあげるよ。」

忍「ありがとうございます。チラツ」

楓「あ、俺のは帰ったらな？」

昴「もしかして、プレゼントは自分です！みたいな？ニヤニヤ」

楓「違うよー。そういうものやって誰が喜ぶ・・・」

忍「プシュー／／／」

当の本人は湯気が出るほど顔が赤くなっていた。

楓「ちよっ！どうしたしの！顔真っ赤になってるよ！熱!?大丈夫!?!」

陽子「あー！楓ストツープ!!」

楓「へ？」

綾「そんな事したら余計温度が上がるわよ？」

楓「？」

首を傾げる楓に昂がある質問をした。

昂「そういえばさ、なんで楓って人助けに迷いとかないの？率先してるっていうの？」

陽子「確かにー。いつから？」

楓「・・・わからない。」

全員「・・・え？」

皆が戸惑っているなか、楓は続ける。

楓「小さい頃からやってるっていうのは覚えてるんだけど、何が理由でとか、そこら辺の記憶がすっぽり抜けちゃって。」

綾「記憶喪失？」

海翔「・・・!」

不意に言った言葉は海翔には深くささった。

綾「海翔？」

海翔「いや、なんでもない。」

楓「それとは少し違うんだよねー。ま、そのうち思い出すと思うけど。アリスはプレゼントどうする？」

アリス「わたし何も上げられるもの無いから歌を歌うよ。」

忍「歌を？」

アリス「♪たんじょーびおめでとーたんじょーびおめでとー♪」

昂「なんだろうあれ。」

楓「ハッピーバースデーを和訳してるね。」

忍「どうして英語で歌ってくれないんですか!?!」

そして、アリスにはあることが引つ掛かっていた。

アリス「ところで若さが足りないってどういう意味？」

陽子「えーとねつまり、老けてるって意味だよ！」

忍「老けてないです!!」

アリス「わたしは若さ足りてるかなー？」

陽子「アリスは若いぞっ。とても高校生には見えない！」

アリス「わーいやったー。」

綾・海翔「(アリス・：そこは喜んじやいけないところ(だろ。)だわ。)」

綾「喋り方のせいじゃないかしら。しのって誰にでも敬語でしょ？」

忍「なるほど！ではもう少し崩して喋ってみます。女子高生っぽく！」

綾「うん。」

忍「エツフェル塔の高さって知ってるう？324メートルなんだってえ。うっそーましまでえ!?みたいなー？」

結果、

海翔「なにかが違う。」

忍「へ？」

陽子「勇姉と同じ血を引いてるんだから、しのにもモデルの素質あるかも。」

忍「ですが、お姉ちゃんは母親似、私は父親似で・・・」

楓「よしっ！一枚撮ってみよ！」

綾「しのちよつとここに座って。」

忍「あ、はい。どっこいしょ。」

これのせいで周りに気まずい空気がながれる。

忍「何か？」

陽子「でも写真撮るんなら、水着にならないと。」

昴「何で？」

陽子「だってグラビアってそうじゃん？」

忍「お姉ちゃんはファッションモデルです。水着は着ません。」

陽子「ちっ。」

楓「ちっ？」

陽子「体のラインを見るのが好きなんだよ私はっ。」

綾「何フェチ？それ。」

陽子「うーん。筋肉フェチ？肉付きフェチ？」

楓「アイドルとかって筋肉ないでしょ？」

陽子「全くない人間はいないって。綾だつて脱げば少しは〜。」

綾「こっつ、この・・・変態!!」

陽子「え？なんで？」

写真を撮った結果、どれも満面の笑みを浮かべていた。

陽子「いい笑顔だ。」

アリス「うん。」

綾「モデルは無理だけどね。」

楓「今更だけど、そんなならしさとか気にしなくていいと思うよ。

敬語とか全部合わせてしのだからさ。」

忍「そ、そうですか？／／／」

陽子「そうそう！関係なくしのはしのつてことだな！」

アリス「ハッピーバースデーシノ！」

皆で誕生日を祝った。

アリス「きつとイサミは大人っぽいつて言いたかったんだよ。」

忍「おおつ。言い回しで随分違って聞こえます！女子高生だけど、

盆栽の似合う大人になれというメッセージだったのですね。」

忍「ありがとうお姉ちゃん・・・」

綾「うわぁ。」

陽子「ポジティブシンキングすぎる・・・!!」

アリス「やっぱりわたしも何か形に残るものをプレゼントしたいな〜。」

忍「いいんですよ〜気持ちだけで。私にとってアリスと一緒にいられることが、最高のプレゼントですよ。」

アリス「シノ・・・」

忍「でもどうしても言うなら髪の毛一本欲しいんですけど・・・」

アリス「何か怖い！」

学校から帰っているなか、

忍「楓君。ぽっかり抜けちゃってるってどういう事ですか?」

楓「うーん。何と言うか、昔の記憶はあるけど、そこだけが覚えてないって言うのかな。」

忍「・・・それ以外事は覚えてるのですよね?」

楓「うん。覚えてるよ。」

忍「・・・良かったです。」

楓「?」

一方の海翔達。

綾「そういえば、海翔はなんで仮面ライダーになったの?」

海翔「は? いや・・・質の悪いやり方で頼まれたし。それに・・・」

綾「?」

海翔「・・・やらないといけないこともあるし。」

綾「それって・・・?」

海翔「実は・・・」

海翔は綾に自分の姉の事を話した。小さい頃に亡くなったと知らされた事、事実は生きていた事、そして記憶喪失になっていた事を話した。

綾「だからずっと表情を出さなかったの?」

海翔「・・・」

沈黙で肯定する海翔。すると

綾「・・・ごめんね。」

海翔「は?」

綾「気づいてあげられなくて。」

顔を俯けて謝罪する綾。

海翔「言っていないだし、気づかないのも当然だ。」

綾「じゃあ、せめてお姉さんに会わせて!」

海翔「え・・・」

綾「私も手伝いたいの!」

海翔「・・・分かった分かった。」

そして、初めて知り合いを自宅に呼んだ海翔。

心咲「海翔・・・お帰り。その子は？」

綾「あ、えつと海翔君の友達の小路綾です。」

心咲「海翔のお友達？ごめんね。私、あなたのこと覚えて・・・」
綾「あ！えつと、初対面です。海翔とは中学の時に。」

あわあわとしていると心咲が。

心咲「？ねえ、小路さん？」

綾「あ、はい。」

心咲「もしかして小路さんって、海翔の事好き？」

綾「え!?!ですから、海翔とは・・・／＼／＼」

否定しようとしたが、忍の言葉を思い出す。

忍『人を好きになるのはいいことですよ?』

綾「・・・／＼／＼」

海翔「・・・姉ちゃんもういいか？用事あるらしいし。」

綾「え？」

心咲「うん。小路さん。海翔の事よろしくね。」

綾「は、はい。」

また綾の家まで送る海翔。

綾「えつと・・・海翔？」

海翔「ああでもしないと追求されるだろ？」

綾「あ、ありがとう。・・・それと。」

海翔「？」

綾「朝のあれ、今度また聞かせて。」

海翔「・・・わ、わかった。」

そして、海翔は自宅へと戻るのだが、焦りがでていた。

海翔「（・・・まさか、勘づかれた!?!）」

一方、綾もベッドでゴロゴロしながら慌てていた。

綾「（・・・どうしよう!?!本当にどうしよう!?!海翔の好きな人つて。・・・私、どうしたらいいんだろう。」

その日の夜、

勇「プレゼント、買ってきた。」

忍「えっ、本当に!?!ありがとうございます!?!」

勇「開けてみて。」

プレゼントを買ってきた勇。

忍「わー。スノードーム。めちやくちや季節外れですけど、いいんですか？こんな高そうな物。」

勇「100均よ。それ。」

忍「よく出来てる!!」

勇「こんなのもあったからアリスに買ってきた。」

アリス「あつ盆栽!!（の置物。）」

盆栽に目が輝き出したアリス。

アリス「いいの？わたし誕生日じゃないのに。」

勇「アリスが喜ぶと思って買ってきただけだから。」

アリス「イサミ！ありがとう!!」

その中電話で

楓「え？アリスを取られた？」

忍「お姉ちゃんにはかないません。」

ラブレターと勉強会と夏休み

今日は雨で、傘をさしながら登校するメンバー。だが、そこに忍の姿がなかった。

昴「今日大宮さん、風邪で休みなんだね。」

楓「うん。調子悪そうだったから心配してたんだけど、まさか本当に風邪だったとは。」

アリス「休んで看病してあげたかったんだけど大丈夫だって。」

楓「しのお母さんもいるし、それに風邪なら1日寝ればよくなるよ。」

アリス「でででも学校にいる間もしもの事があつたらと思うと……！」

綾「心配しすぎよ。」

過保護なアリスに呆れる一同。

楓「まあでも、学校終わったらお見舞い行くけどね。皆も来る？」

陽子「もちろん！」

フェイ「うーむ。今日は用事もないし、それに友達ならお見舞いに行くのが普通だと思うしね。」

楓「決まりだね……？」

すると楓は下駄箱に違和感を覚えた。

海翔「……どうした？」

楓「いや、なんか手紙入ってた。」

アリス「……え？」

楓「ほら。」

綾「本当に手紙ね。……これが下駄箱に。」

楓「うん。奥に入ってた。」

陽子「まさか……」

全員「ラブレター!？」

楓「ラブレターって、あのラブレター!？」

海翔「それ以外に何があんだよ。」

カレン「WAO Love Letter?」

陽子「ナイス発音！」

アリス「大変！カエデがモチモチになったら……」

楓「え？なにかまずいことでもあるの？」

このままでは楓が忍から離れてしまおうと焦るアリス。だが、カレンには別の疑問があった。

カレン「(モチモチってどういう意味デス？モチモチと同じ種類の言葉デスカ？OH きつとそうデスね！)」

カレン「スゴイデスカエデ！モチモチデスね！」

楓「え？それ、褒めてるの？まあ中身を見ればすぐわかるけどね。」
アリス「でも、もしラブレターなら……」

楓「大丈夫。知らない人だったら断るし。えーと何々？」

『お久しぶりです。忍です。イギリスはどうですか？日本の天気は晴れです。アリスは元気に小さいです。ではまた。……を、英語に訳しなさい♪』

楓「……宿題かな？」

海翔「は？」

休み時間に一人綾はため息をついていた。

綾「はあ……」

陽子「最近、綾あんな風になるの多いよな。」

フェイ「なにかあったのだろうか。」

昴「(……そろそろ気づくべきだと思っけどね)」

この状態の原因が分かっていたのは昴だけだった。

綾「(なんか、海翔とまともに話せない。誰かに相談した方がいいのかな)……？」

屋上へ一人で行ってみると、そこには舞と華の姿があった。綾は二人に相談する。

舞「え？それって……」

綾「なにか分かる？篠原さん。」

舞「あ、いや、舞でいいよ。それでね、綾ちゃんの言ったそれね、端的に申し上げますと。」

綾「うん。」

舞「恋ではないかと思われます。」

綾「ボンツ／＼／＼ここに、恋!？」

あたふたと焦り出す綾。

華「一般的に考えてもそれで正解だと思うけど、舞もいま、その真っ最中だし、舞なら説得力あるわよ？」

舞「ちよっ、華ちゃん!」

綾「え!?!舞今恋してるの!?!だ、誰?」

舞「えーと、それは・・・」

華「ほら、同じクラスのき・・・」

舞「ビチイン!」

完全に話す気だった華の口を叩いて止める。

華「痛いんだけど・・・」

舞「ご、ごめん。でも今のは華ちゃんが悪いです!」

綾「(・・・恋つて言われて、顔が熱くなってた。やっぱり私。)はあ。分かっててもどうすればいいんだろう。」

海翔「なにがわかったって?」

綾「へ?」

自分がこうなった元凶もとい自分が片思いをしている海翔の姿があった。

綾「わあー!」

海翔「な、なんだよ。」

突然叫ぶ綾に困惑する海翔。

綾「ご、ごめん。」

海翔「はあ・・・なんかあったのか。」

綾「え?」

海翔「いつもより口数少かったからな。あんまり一人で考えすぎるなよ。」

綾「!(もう。そういうところが・・・／＼)プイッ」

海翔「?」

どうやら自覚をしたようだ。

舞「はあ・・・」

一方、舞はため息をついていた。

華「結局桐生君ともまともに話せないで、そろそろ夏休みだよ？なんかきつかけでも残さないとヤバイよ？」

舞「わかってるんだけど・・・そういえば、忍ちゃん今日いなかったね。」

華「風邪だつて・・・そういえば、これは大宮さんにも言える事なんだけど、桐生君のどこが好きなの？」

舞「え？」

華「いや、中学の時から見てきたけど、私にはさっぱりわからなくて。悪い奴ではないことはわかるんだけど。」

舞「それは・・・うーん。」

すると舞は考え出し、続けるにつれて顔が赤くなっていた。

舞「優しいところっていうか、いい人なところっていうか、分かってるのにいざ言葉にすると難しいっていうか。どう表現すればいいのかな？うーん。」

華「（私を知るか）」

楓「あれ？」

二人「？」

そこに楓が現れた。

楓「篠原さんと藤咲さん。なにしてるの？ここで。」

舞「桐生君。」

華「ピーン！ダツ」

なにかを閃いたのか、華は全力疾走でその場を離れる。

華「じゃーね、舞。私部員の人とご飯食べる約束してるの忘れてたからすぐ行かないとバイビー！」

舞「（は、華ちゃん！そ、そんな！）アワアワ」

楓「藤咲さんスゴイ勢いで行ったね。部員さんと仲良いのかな？」

舞「華ちゃんのバカ。そりゃ告白はするって行ったけど、いきなりなんて・・・ん？」

華「逃げるなよ。」

目で訴えてその場を去った華。

舞「(ええええ!?華ちゃん、そんな・・・)」

楓「あれ?なんか戻って来なかった?」

舞「(どうしよう!?いきなり二人きりなんて。どうしよう!?心臓が

壊れそう!ごめん!いきなり今日は無理だよ!華ちゃん!)」

楓「篠原さん。なんか顔赤くない?」

舞「え?」

楓「大丈夫?真っ赤になってるよ?熱?風邪?」

おでこに手をつける楓。当然舞の顔は完全に真っ赤になる。

楓「あつつ!ウソ本当に風邪!?ととりあえず保健室に行こう!熱

計つてもらわないと!」

舞「き、桐生君落ち着いて。」

楓「いやいや!この熱じゃ落ち着けないよ!40度近くあるよあの

熱さじゃ!これは本当にヤバイ!」

舞「(華ちゃん。私が好きなのはね。こういうところだよ。)」

楓「よし!そうと決まったら早速保健室に!」

舞「わー!待って待って桐生君!」

ガシツ

舞「あ・・・」

とつさに腕を掴む舞。

楓「ん?・・・篠原さん?」

舞「(今なら・・・)桐生君。私実はね。」

昴「全く、楓遅いな。どこで道草食ってるんだろ?」

舞「今までずつと言えなかったんだけど。」

一方、楓の帰りが遅いのを心配して昴が迎えに行っていた。

昴「あ、そういえば、楓の事好きそうな人もう一人いたっけ?確

か・・・あ!

篠原舞さんだったかな?」

その中、舞は楓に告白しようとしていた。

舞「私ずっと桐生君の事・・・す」

楓「す?」

舞「す」

p r r r r

二人「!」

楓「ん?」

舞「・・・ふえ?」

楓「ああ俺のだ。・・・もしもし?あ、昴。うん。あ!ごめん!すぐ戻るよ!ごめん!篠原さん、ちよつと用事ができたからすぐに戻るよ。あ、熱あるなら保健室に行くこと。いいね?」

舞「え?あ、ひゃい。」

楓「ん?でもさつきなんて言おうとしたの?」

舞「え!?!いや、その・・・ううん!なんでもない。気にしないで。」

楓「そう?じゃあまた。」

そして、その場を去る楓。その中、告白に失敗した舞はその場に倒れた。

舞「・・・はああ。(こ、こんな事ってある!?!ひどいよ神様。あーまだドキドキしてる。力抜けちゃった。せっかく勇氣だったのに・・・)

／／／

そして、昴と楓は合流した。

昴「あ!楓いた。」

楓「ごめん!」

昴「で、どこで人助けしてたの?」

楓「ん?」

昴「楓が遅くなる理由、それくらいしか思いあたらないし。」

楓「いや、篠原さんと話してた。」

昴「ふーん。・・・篠原さん?」

楓「?」

昴「な、なあ。それってまさか、同じ中学だった篠原舞さん?」

楓「あ、昴も覚えてた?いやー!最近思い出してねー。それでたま

に話すようになって。」

昴「ヤバい・・・これはヤバい！」

楓「？」

昴はあまり見せない焦りの表情をとっていた。楓はわからず首を傾げていた。

一方、この二人は。

華「で？結果は？」

舞「・・・ごめん。無理だった。」

華「そう・・・このヘタレ！まあどうせそんな事だろうとは思ってたけど。」

舞「うっ！そ、そんなあ。」

華「ま、舞にしては頑張ったんじゃない？私もせかすぎたし。」

舞「華ちゃん。」

華「でも、次同じ事やらかしたら絶交だから。」

舞「え!？」

華「ま、そのつもりで頑張んな。」

舞「そんなあ。(ごめんね華ちゃん。実は少しほっとしてるんだ。

これは早く知ってほしいけど、この関係もまだ続いてほしいから。)

舞「(でも、次はちゃんと伝えるからね、桐生君。)」

新たな決意をした舞であった。

放課後

楓「もしもし？ああしの？うん。それでさ、あの手紙なに？」

忍『はい。アリスのお母さんと電話で話したくて、アリスに訳をお願いしようと手紙に書いておいたのですよ。』

楓「なるほどねえ。」

忍『下駄箱にいたらラブレターっぽいかなと思いましたがアリスドキしてましたか!』

楓「・・・なあしの？その事なんだけど。」

忍『はい?』

楓「それ・・・俺のところに入ってたよ?」

忍『……』

楓「……」

二人に沈黙が走るが。

忍『うわあああ!!／／／』

楓「ちよつ!しの大丈夫!?!」

突如忍が叫び出したので戸惑う楓。

忍『す、すみません!大丈夫です!／／／』

楓「と、とにかく訳はできたから持つていくよ。あと、皆でお見舞いに行くから。」

忍『わ、わかりました!／／／』

電話を切った忍はベッドで悶絶していた。

忍「私は……なんて事を……!!／／／」

昂「大宮さんなんて?」

楓「わかったって。」

陽子「そこじゃなくて、あのしのの宿題つてやつ。」

楓「あああれ?なんかそれ伝えたら叫んだ。」

海翔「(間違えて好きな奴に手紙置いたら誰だつて悶えるだろうな)」

綾「あ、今度勉強会することは?」

楓「あ、忘れてた!」

昂「楓も時々ドジになるよな。」

楓「あ、でも元気そうだったよ。明日には復活するかもね。」

アリス「そっかあ、良かったよ!」

日曜日

綾「何だか緊張する。」

昂「ああ、小路さんと海翔は勇さんに会うの初めてなんだっけ。」

綾「雑誌では何度も見たことある。」

陽子「私フアッション雑誌読まないからな。」

昂「陽子つてあんまり読むタイプじゃないからね。」

陽子「なにおう!」

昴の一言にいくつく陽子。

カレン「イエス！女子高生から絶大な人気を誇るファッションモデル、イサミに憧れる女の子は多いデス！サインは何枚までOKデスかね!？」

海翔「お前が日本に来てからそんなに時間たったのか。」

綾「海翔は知ってるの？」

海翔「具体的には何も。ただ姉ちゃんが読んでたまに見せるから。」

昴「お姉さんも読んでるんだ。」

そして、忍の家にお邪魔する一同。

全員「お邪魔します。」

楓「みんな遅いよ。」

忍「おはようございます。」

陽子「あれ？しのそんな花飾りつけてたか？」

忍は頭に花飾りをつけていた。

楓「フフン！どう？実はこれ、しのの誕生日プレゼントだったんだよ！」

勇「あら。今日はなんの集まり？」

楓「勉強会ですよ。」

カレン「九条カレンと申します。イサミさんの事は雑誌でお見かけしてすぐファンになりました。よろしければ、サインを頂きたいと・・・」

陽子「カレンの日本語が流暢になってる！」

綾「なんで。」

楓「さて、俺はそろそろ行くか。」

昴「行くなってどこに？」

楓「んー？バイト。」

海翔「前言ってたクスクシエってどこか？」

楓「いや、今日はラビットハウスで。」

陽子「そこでもバイトしてるの？」

楓「いやー、あそこの空気にハマっちゃって！結局バイトすることに。」

勇「楓君。」

楓「はい？」

勇「いつか修羅場になるかもね。」

楓「？」

それに理解ができないまま楓はバイトへと向かった。

チノ「楓さん、おはようございます。」

楓「おはようチノちゃん。今日コーヒー豆出しておこうか？」

チノ「まだ余裕があるので大丈夫です。」

リゼ「すまない！部活の助っ人で・・・遅く・・・」

楓「あ、リゼちゃん。どうしたの？」

突如リゼは驚いた。

リゼ「な、なんで楓がここに!？」

楓「あれ？聞いてないのかな？俺ちよつと前からここでバイト始めたんだけど。」

リゼ「ば、バイト？」

そこへ二人の少女が入ってきた。

???「こんにちはー。」

???「今日バイト休みだからってコーヒー苦手なの知ってるでしょ？」

???「・・・ってリゼ先輩!？」

リゼ「あ、ああ、シャロ。千夜もどうした？」

千夜「今日私達バイトお休みだから、ラビットハウスに行こうってことになって。」

シャロ「その人は。」

楓「・・・知り合い？」

リゼ「ああ、こつちが私の後輩の、桐間紗路。隣が宇治松千夜だ。」

楓「へえ、あ。俺は桐生楓。最近ここでバイトを始めたんだよ。」

ココア「楓君も来たんだね！ねえ千夜ちゃん！彼が前に言った仮面ライダーさんだよ！」

楓「ちよっ！」

突然の暴露に驚く楓。

千夜「仮面ライダー。」

シャロ「この人が？」

楓「・・・そう呼ばれてるっぽい。」

ココア「この目でちゃんと見たもん！変身するところ！」

チノ「ココアさん仕事してください。」

楓「そんな大袈裟に言うことかなあ？」

考える楓にリゼはそわそわしながら話しかけた。

リゼ「そ、そういえば楓。夏休みは何か予定はあるのか？」

楓「うん。7月の終わりに皆で山に行くことになって、それと8月に花火大会に。」

リゼ「そ、そうか・・・シュン」

その中、千夜は何かに気づいたのか、リゼに釜をかけた。

千夜「あらあら？リゼちゃんは楓君と二人きりの時間が欲しいのね？」

リゼ「ち、違う！そんなわけあるか！ただ、誘える機会があるか聞いただけだ！／／／」

顔を赤らめながら咲けぶりゼ。

リゼ「わかったか楓！決して千夜の言ってるような事ではないから！／／／」

楓「わかった。わかったから。そんなにムキにならなくてもいいから。」

宥めているなか、シャロも気づいてしまった。リゼが楓に恋心をむけていることに。

シャロ「(これは・・・まさか！)」

楓「えつと・・・桐間さんだっけ？どうしたのそんな俺を睨んで。」

シャロ「え？あ、なんでもないです。」

そんな中、チノは何かを考えていた。

チノ「・・・」

楓「チノちゃんどうかした？」

チノ「楓さんは、三枚のメダルを使うんですよね？」

楓「うん。そうだけど、それが？」

チノ「いえ、ちよつとした確認です。」

ココア「他のお友達も仮面ライダーさんなんだよ！」

千夜「私も見たかったわー。」

シヤロ「そんなにいくつくこと？」

チノ「(子供の頃にあんなメダルをみたような・・・気のせいでしょうか?)」

楓達が談笑している中、ティツピーとチノの父親、タカヒロが話していた。

・・・一応、ティツピーはうさぎである。中身は別だが。

ティツピー「息子よ。」

タカヒロ「・・・なんだ親父。」

ティツピー「あの小僧がお前が言った奴か。」

タカヒロ「・・・間違いない。彼が【あの時】の子さ。妻が亡くなる前の・・・最後の戦争に巻き込まれたもう一人の子だ。」